

フィロロギカ——古典文献学のために

VII

目次

Horatius, <i>Epod.</i> 11	1
大芝芳弘	
プラトン『饗宴』178b-c の引用について	23
納富信留	
アリストテレス『弁論術』1355a23: δι' αὐτῶν	42
——弁論術の有用性について——	
堀尾耕一	
英雄叙事詩を演じる英雄: <i>Iliad</i> 9.182-95	51
安西眞	
Ovidius, <i>Metamorphoses</i> , 13.146-7	77
中川未来	

2012
 古典文献学研究会
 (フィロロギカ編集委員会)

(編集責任)

『フィロロギカ』編集委員会

事務局長 葛西康德

名誉編集委員 久保正彰、Elizabeth Craik

編集委員 安西眞、大芝芳弘、高橋宏幸、納富信留、佐野好則

フィロロギカ 第VII号

Horatius, *Epod.* 11

大芝芳弘

Petti, nihil me sicut antea iuvat
 scribere versiculos amore percussum gravi,
amore, qui me praeter omnis expetit
 mollibus in pueris aut in puellis urere.
hic tertius December, ex quo destiti 5
 Inachia furerē, | silvis honorem decutit.
heu me, per urbem—nam pudet tanti mali—
 fabula quanta fui, conviviorum et paenitet,
in quis amantem languor et silentium
 arguit et laterē | petitus imo spiritus. 10
‘contrane lucrum nil valere candidum
 pauperis ingenium?’ querebar applorans tibi,
simul calentis inverecundus deus
 fervidiore mero | arcana promorat loco.
‘quodsi meis inaestuet praecordiis 15
 libera bilis, ut haec ingrata ventis dividat
fomenta vulnus nil malum levantia,
 desinet imparibus certare summotus pudor.’
ubi haec severus te palam laudaveram,
 iussus abire domum ferebar incerto pede 20
ad non amicos heu mihi postis et heu
 limina dura, quibus lumbos et infregi latus.
nunc gloriantis quamlibet mulierculam
 vincere mollitiae | amor Lycisci me tenet;
unde expedire non amicorum queant 25
 libera consiliā | nec contumeliae graves,
sed alius ardor aut puellae candidae
 aut teretis pueri longam renodantis comam.

2 percussum AB(B): -ulsum CRΛ1Ψ (*utrumque exhibent test.*) 4 in
pueris] aut p- *coni. Bentley, nescio an recte* 8 et *om. Sacerd. GL 6,*
544: ut *Bentley* 13–28 *om. B* 16 adhuc *Campbell*: ut
haec *codd.* dividam *H. Schuetz*: -at *codd.* 17 *anne* levantia
et ? 18 *anne* desinat ? summotus (*P^l*) *obscure dictum. anne*
commotus ? 24 mollitiae R *pr.(?)* 5 (B): -tia *cett.*

ペッティウスよ、もはや私には以前のように楽しくない、
ささやかな詩を書くことが、重苦しい恋に打ちひしがれて――
 恋、それはほかの誰よりも私を攻め立てて
 柔かな少年や少女たちへの思いに燃やすのだ。
 これが三度目の十二月だ、私がイーナキアに狂うのを 5
 やめてから、この月が森からその誉れを打ち払うのは。
 ああ私は！ 都中で――こんな醜態が恥ずかしい――
 どれほどの噂的だったことか！ 宴さえ後悔の種だ、
 その宴の場では、恋をしていることが無気力と沈黙と
 胸の奥深くから吐き出した溜め息とで暴露されてしまった。 10
 「利得に対しては、貧乏人の真摯な才能など
 何の力もないのか？」と、私は君に泣きながら訴えた、
 いっそう熱い生酒で燃え立った私の密かな思いを、恥知らずな神が
 その隠れ処から引き出してしまうや否やたちまちに。
 「だが、もしも私の胸の中で自由な胆汁が 15
 沸き立って、悪しき傷を癒すには何の役にも立たぬ
 こんな有り難くもない湿布薬など風に吹き散らせてしまえば、
恥の念は追いやられ、劣った敵との戦いなどやめるだろう。
 こんなことを、君の前では大まじめに高言していた私だったが、
 家へ帰れと勧められて、覚束ない足取りで向かった先は 20
 ああ、私には優しくない戸口と、ああ、堅い（無慈悲な）
 敷居だった、それに私は尻と横腹を打ちつけた。
 だが今は、どんな女の子よりもその柔弱さでは負けないと
 自慢するリュキスクスへの愛が私を捉えている。
 その愛から私を解き放つことができるのは、友人たちの 25
率直な忠告でも、重い非難の言葉でもない、
 そうではなく、別の熱情、輝くように白い少女か
 長い髪を結んでは解くなまめかしい少年への熱情だろう。

I

本稿は、ホラーティウスの初期作品の一つであるイアンボス詩集『エポーディ（イアン
 ビー）』のうち、第 II 歌を取り上げ、その作品解釈上の問題を考察しようとするものであ

る^{*1}。『エポーディ』は全部で 17 編の詩から成るが、その最初の 10 編が全て同一の韻律であるのに対して、第 11-17 歌ではそれとは別の、また 14 と 15 が同一である以外は相互に異なる韻律の詩が続く^{*2}。ホラーティウスがこの詩集では韻律と精神の点で主としてアルキロコスに倣っていることは詩人自身も明言している通りであるが^{*3}、そのことはこの第 11 歌にも妥当する。ただ、この作品では、やはりアルキロコスの韻律を用いながらも、10 歌までとは異なる新たな韻律を初めて用いている。また内容的にも、本詩集中で初めての本格的な恋愛詩的作品であり^{*4}、その点でもやはり典拠となったアルキロコスの作品の一面を受け継いでいる。恋愛詩的要素を引き継ぐ第 14, 15 歌の 2 つの詩にもやはりこうした韻律と内容の両面におけるアルキロコスとの密接な連関が認められるが^{*5}、とりわけ第 14 歌は、特に恋愛と詩作の関係を問題にする点で第 11 歌と共通性があり、ある意味で 11 歌と対をなす詩として読むことができる。従って、第 11 歌の解釈においては、こうした 14 歌との類似性も考慮に入れる必要がある。以上のような観点から、本稿ではまず第 11 歌それ自体をどう理解すべきかを検討し、特に第 14 歌との関連性を念頭に、この作品における作者ホラーティウスの詩作意図の問題を考察してみたい。それを通じてまた、『エポーディ』詩集の中でこの作品が占めている意味合いについても一つの見通しを得ることを目指したい。

すでに触れたように、第 11 歌が韻律と内容の両面でアルキロコスの作品を踏まえていることは明らかである。具体的には、Arch. fr. 196, fr. 196a (First Cologne Epode) がこの第 11 歌の韻律上の先例であることは、その韻律が細部に至るまで忠実に模倣されていることから疑いの余地はない^{*6}。内容的にも fr. 196-196a では詩人の恋ないし情欲ゆえの狂

^{*1} 冒頭のテキストと app. crit. は SB による。ただし 16 dividat については、cf. n. 22.

^{*2} 具体的には、1-10 はすべて iambic trimeter + iambic dimeter という iambus の韻律だが、11 歌からは dactylus の要素が加わり、11 は iambic trimeter + 'elegiambus (= hemiepes + iambic dimeter)', 12 は dactylic hexameter + dactylic tetrameter catalectic, 13 は dactylic hexameter + 'iambelegus (= iambic dimeter + hemiepes)', 14, 15 は dactylic hexameter + iambic dimeter, 16 は dactylic hexameter + pure iambic trimeter、そして最後の第 17 歌は純然たる iambus に戻るも唯一 epodic でない iambic trimeter *κατὰ στίχον* である。

^{*3} *Epist.* 1.19.23-5 *Parios ego primus iambos / ostendi Latio, numeros animosque secutus / Archilochi*, non res et agentia verba Lycamben. Archilochus との関連については、Fraenkel 27 ff. (n.b. 31 n. 2), 47 f., 56 ff., 65, Mankin 6-9, Watson 4-10、韻律上の関連性については、Mankin 14-22, Watson 43-5.

^{*4} 第 8 歌と 12 歌の *Vetula-Skoptik* 「年増嬲り」の詩 (cf. Watson, *Index* s.v.) も広く見れば *erotisch* な詩ではあるが、恋自体を主題とした詩としては第 11, 14, 15 歌に限定されるだろう。例えば Grassmann は第 8, 12 歌は *Aischrologie* の系譜に位置づける一方、'Die Liebesepoden 11, 14, 15' は *Parodie der Elegie* と見なす (S. X)。

^{*5} 両歌は韻律上 Arch. fr. 193 と同一であるだけでなく、恋ないし情欲が詩人を苦しめているという状況も共通している、cf. Watson 44, 459.

^{*6} 偶数行の *elegiambus* を構成する *hemiepes* と *iambic dimeter* の間に *brevi in longo* と *hiatus* が起こることから、実際にはこれは 1 行ではなく独立した 2 行に書かれるべき *versus asynartetus* だが、これらの現象が

気・逆上 *infatuation* が語られており、その点で第 11 歌の恋にかまける詩人の状況と軌を一にする（ただし、両者の相違もまた重要な意味を持つと思われるが、それについては後に触れる）。だがその一方で、第 11 歌にはローマ恋愛エレゲイア詩に典型的に見られる要素が多分に認められる。重い恋の打撃（2）、詩人が恋ゆえに都中の噂の的になったこと（7-8）、それ故の恥への言及（7, 18）、宴の場での態度から恋心が暴露されること（8-10）、金持ちの恋敵と詩人の詩才の争い（11-2）、そして恋人の家の戸口で過ごす *exclusus amator* のモチーフ（21-2）などである⁷。これらの要素は同時代の恋愛エレゲイア詩の影響を受けたものとして⁸、ホラーティウスがイアンボス詩にこうした異種ジャンルの要素を混交させようとした結果であると想定することができる⁹。従って、第 11 歌は前古典期のアルキロコスのイアンボス詩を踏まえつつ、同時代の恋愛エレゲイア詩の要素を大々的に取り入れて作られた、時代とジャンルを大きく横断あるいは越境する作品であると言っても過言ではない。その背後には、詩人の何らかの詩作上の意図が窺える。ではその意図とは具体的にはどのようなものだったのであろうか。

この問題を考察するに当たっては、作品中に描かれる詩人と作者ホラーティウスを混同せぬこと、作品中の *persona* としての詩人と作者である詩人を区別することが肝要である¹⁰。そこでまずは、前者の有様がどう描かれているか、作中の *persona* としての詩人の姿をどう理解すべきかを検討することで、作者の詩作意図の問題への糸口を見出すことにしたい。

II

さて、作品冒頭の 2 行で語られる内容は作品解釈上重要な意味を持つ。とりわけ、重苦しい恋に打ちのめされた今の自分には「書くことが楽しくない（または助けにならない）」と言われる詩 *versiculos* とは、どのような種類の詩を指していると考えるべきであろうか。この一節に関しては、解釈者の見解が一致を見ていないだけでなく、作品全体との関連に

Arch. と同様に（冒頭のテキストにも縦線 | で示したように）Hor. にも見出される点に、後者が前者を忠実に模倣していることが明らかである（*brevis in longo*: Arch. 196a. 1, 7, 21, 33; Hor. *Epod.* 6, 10, 26; *hiatus*: Arch. 3, 17; Hor. 14, 24）。Cf. Bremer 51 ff., Watson 360 f.

⁷ エレゲイア詩（やその先例となった *epigram* 等）におけるこれらの要素の類例については、Luck, Grassmann 37-44, 90-119, Mankin, Watson *ad locc.*

⁸ 具体的にはおそらく Cornelius Gallus の影響を推測することができると思われる、cf. Luck, Grassmann 36-7, 96-7, Mankin *ad* 6, Harrison 120. この点は後に触れるウェルギリウスの『牧歌詩』第 10 歌との関連性とも関わる。

⁹ Cf. Watson 13-5, 362.

¹⁰ 作者と *persona* の区別という見方については、Anderson viii-ix, 3-10, 28-9, Brown *Sat.* 12; N-R xxvi, Watson 9, 12, 21, 254-6, etc.; cf. Fraenkel 30, 47, N-H xxiv-xxvi, Oliensis (1998) 1-2.

についてもこれまで十分に顧慮されて来たとは言い難い。しかし、上述のような詩人の詩作意図の問題と、この一節の解釈は密接に連動すると考えられる。それは次のような点からも言える。即ち、1-2 *nihil me sicut antea iuvat / scribere versiculos* 「もはや私には以前のようには楽しくない、ささやかな詩を書くことが」というこの詩句は、実はやはりアルキロコスの fr. 215 *καί μ' οὐτ' ἰάμβων οὐτε τερπωλ(έω)ν μέλει* 「私はイアンボス詩にも楽しみにも興味が持てない」を踏まえるとともに、カトウツルススの 65.1-8; 68.1-40, esp. 15-26 で語られている詩人の状況とも類似している。ところが、Arch. fr. 215 では詩人の姉妹の夫の溺死が、Catull. 65, 68 では詩人の兄の死が原因となつて、詩人は今、詩作に心を向けられずにいるという事情であるのに対して、この第 11 歌では、直後に語られるように詩人が *amore percussus gravi* 「重苦しい恋に打ちひしがれた」ということが「詩作が楽しくない」ことの理由とされている。しかもこの作品全体において、上述の通り、恋愛詩の要素が大きな比重を占めているのであるから、「詩作が楽しくない」と告白する詩人がこうした恋愛的内容の詩を書いていることと、その告白自体の関連、即ち、恋と詩作の関連は重要な意味を持つことになる。はたして、ここで (persona としての) 詩人が「恋に落ちたがゆえに楽しくない」と告白している詩作とは、どのような種類の詩を指しているのか。

一つの解釈では、*versiculos* は恋愛詩（またはそれを含む詩作一般）を指すと取る^{*11}。しかし、5-22 の回想場面では詩人は自らの詩才と恋敵の富の対立を語り (11-2)、かつての Inachia との恋に際して恋敵との対抗上から恋愛詩を書いたことを示唆する。また「役にも立たぬ湿布薬」(16-7) という言葉で恋を癒すための恋愛詩を書いたことをも示唆している^{*12}。つまり、かつて恋に落ちた際には恋の詩を書いたと解される。これは、エレゲイア詩に典型的に見られるような、恋に落ちたら詩人は恋の詩を書くものだという常識的な理解^{*13}とも一致する。従つて、*versiculos* を恋の詩と解した場合、こうした一般的な理解ともこの詩の回想場面とも矛盾することになる。他方でしかし、恋敵との競争にも役に立たず、重苦しい恋を癒す力もない恋愛詩を書き続けても、それが恥になるばかりで何の救いにもならぬ以上、今や恋愛詩を書いても楽しくない（あるいは助けにならない）と言われているのだと考えることもできそうである。しかしその場合でも、以前には楽しかったのに今は楽しくない、と解する限り、この詩で語られている回想場面の状況から見て、以前には恋愛詩を書くのが楽しかった、とは思えない点が問題である。その点では Mankin のように「(恋愛詩を書くことは) 以前にも今回も助けにならない」とする方が一応筋が

^{*11} E.g. Luck 123 f., Grassmann 37-8, 90-2, Mankin, Watson ad loc.

^{*12} Mankin, Watson ad locc.

^{*13} Cf. e.g. Mankin ad 1, Watson 359.

通るように見えるが、*nihil me sicut antea iuvat* の解釈として妥当かどうかは疑わしい^{*14}。加えて、「恋に打たれた」時には恋の詩作は全く役に立たない（そのことは以前も今回も同様だ）、という解釈は、詩作とくに恋愛詩の一般的な前提である *remedia amoris* の考え方^{*15}との間に齟齬をきたす。他方、Watson のように^{*16}、*amore percussus gravi* を原因・理由ではなく時間的な意味に取り、以前の *Inachia* との恋に際しては喜んで恋の詩を書いたが、そのために都中の噂となって恥をかいたので、今回また新たに恋に落ちた状況ではもう恋の詩（あるいは詩作一般）を書く気になれない、とするのも妥当とは思えない。なぜならその場合、*amore percussus gravi*, ... という現在の恋自体の衝撃が本当の理由ではなく、後に語られる以前の恋ゆえの恥という過去の副次的な経験こそが真の原因だと解する点で奇妙であるし、また、詩人を襲う恋がとりわけ由々しい恋だということが 2-4 で強調されていることにもそぐわない。「重苦しい恋に打たれた」からこそ興味が失せるような種類の詩を指しているという理解が成り立つことが必要であろう。そもそも 7-10 からは詩人の恋の詩が恥の原因になったとは明確には語られておらず、11-2 の詩才への言及からそう推測できるだけである。しかも、詩人は今やこの詩自体の中で自らの「恋ゆえの恥」を公言こそすれ、恥をさらすような詩作を厭わしく思っているとも、従って恥を語るような恋愛詩を書くまいとしているとも解し難い。詩を書くことが恥になるので嫌になった、と言っているとは考えにくい^{*17}。

versiculos を恋愛詩と解する限り、以上のような難点が避けられない。さらに何よりも、恋愛詩と解した場合、この詩自体が明らかに恋愛詩的な詩であることと、その冒頭で恋の詩を書くことへの否定的な言及が矛盾することにならないか、という問題もある。無論その矛盾に現在の恋愛状況のやり切れなさが語られていると解することもできるかもしれない。だが、それよりもむしろ、冒頭のこの言明はこの詩自体の性格を説明するものなのではないか、あるいは、そう理解すべきなのではないだろうか。つまり、*nihil me ... iuvat / scribere versiculos amore percussus gravi* 「重苦しい恋に打ちひしがれて、ある種の詩作が楽しくなくなった」ことが原因で、詩人の書く詩が今書かれているような詩になっている、と理解できる（そう理解するような解釈が求められる）のではないか。とすれば、冒頭の

^{*14} *sicut antea* にも否定を補うことは不可能ではないとしても不自然である。Watson ad 1 によれば主文が否定された場合の比較の *ut / sicut* は *parallel negative* ではなく *contrasting positive* を導くのが通例だという。しかし、*contrasting positive* だと「以前は役立ったが今は役立たない」になるが、これは回想場面とは明らかに矛盾する。

^{*15} Cf. Mankin ad 1 (*nihil me ... iuvat*: p. 194).

^{*16} Watson (1983) 230, id. 359-60.

^{*17} 後に見るように、以前の *Inachia* との恋に際しては、詩人は恋とそれ故の恥からの脱却を求めたが、現時点での詩人の態度はそれとは異なると解さねばならない。

この詩句は、作中の詩人の詩作上の変化あるいは詩作のプログラムを語る詩句として読まれるように置かれている、と見ることができるであろう。

そのような観点から、また冒頭で見た『エポーディ』詩集の中での位置から考えても、ここで作者は、アルキロコスの伝統に立つイアンボス詩人としての自分が今や恋に落ちた、という状況を冒頭に設定している（そして作中でそのような詩人としての *persona* を演じている）、と考えることには然るべき根拠がある、と言えるだろう。そしてその場合、*versiculos* とは詩人がこれまで書いて来たイアンボス詩を指し、由々しい恋に落ちた今や、詩人はこれまでのようにイアンボス的な詩を書くことが楽しくなくなっている、と告白していると理解することになるだろう。そしてそのために、詩人は今や、元来のイアンボス詩ではなく、むしろ現にこの詩がそうであるような恋愛詩、ローマの恋愛エレゲイア的な詩を書くに至っている、と読むことができるのではないか。言い換えれば、この作品はイアンボス詩と恋の主題の関係を語る「詩論」的な作品として捉えることができるのではないだろうか。この解釈は、作品全体、とりわけ 16 *libera bilis* の意味合いから支持できると思われる。というのは、次に見るように、この作品においては単に詩人の恋の状況だけではなく、その恋と詩人の詩作の営みの関わりが重要な問題として語り込まれており、*libera bilis* の句にもそうした含意を読み取ることができるからである^{*18}。

versiculos がイアンボス詩を指すことは、まず第一に、上述のようにこの一節の典拠と見られる Arch. fr. 215 で語られた *ἰάμβων*（がこの *versiculos* に当たる点）から支持できるだけでなく、作品全体との関連においても妥当なものだと考えられる。具体的には、その冒頭 1-4 では「重苦しい恋に打ひしがれた」状況では、以前のように軽佻浮薄で誹謗的なイアンボス詩を書くことは楽しくない、由々しい恋にはイアンボス詩はそぐわない、ということが語られている、と解せる。続く 5-22 の回想場面での叙述も、先に触れたように、やはり詩人の詩作に関わるものと理解できる。11-2 では詩人の詩才と恋敵の金銭の対立が語られる。それは恋の競争において詩人の作る恋愛詩が恋敵の富に敗れたことを語っている。また 15-8 の *fomenta* 「湿布葉」とは、やはり詩人が自らの恋の苦しみを癒すために恋の詩を書いたことを指すと解される。こうして、この 2 つの箇所では、*Inachia* との恋に際して詩人が作った恋愛詩の無力さが強調されている。恋敵との争いにおいても役に立たず、恋の苦悩を癒す力もないことを詩人は嘆いたのである。だがここで重要なのは、「悪しき傷を癒すには何の役にも立たぬこんな有り難くもない湿布葉を風に吹き散らす」力を持つものが「胸の中で沸き立つ自由な胆汁」だと言われている点である。この 16

^{*18} *versiculos* = *iambos* と取るのは、例えば O-B-H ('de priore studio loquitur'), Schmidt 413-6, Davis 255 n. 72 ('*versiculos* as a narrower reference to the *Epodes*'), Harrison 120 など。K-H は *iambi* に加えて *saturae* も含むとする。

libera bilis「自由な胆汁」とは何を指しているのか。

従来の解釈では、「胆汁」とは単なる怒りの隠喩であり、この一節は思うようにならぬ恋の状況に対して、怒りに任せて恋を振り切ろうとする詩人の意図を語る言葉と理解されて来たようである^{*19}。しかし、この言葉もまた詩人の詩作の問題に関わるものと解釈することができると思われる。fomenta が苦悩を癒す恋の詩作であるならば、それを吹き散らそうというのは、恋の詩作などもうやめよう、という意味に他なるまい。そしてそのための原動力が libera bilis だと言うからには、これは単なる憤激などではなく、むしろイアンボス詩人に典型的な怒り、イアンボス詩の原動力となる「自由の怒り」を指しているのであり、ここで詩人は満たされぬ恋に対して、本来のイアンボス詩人に立ち戻って恋も恋愛詩も打ち捨てて、「自由の怒り」を爆発させることで元のイアンボス詩人らしい詩作に回帰しようとしている（そして Inachia にも誹謗中傷をぶつけるような詩を書こうとしている？）、と理解できるのではないだろうか。——ところが、そのあと結局恋人の戸口で exclusus amator を演じてしまい、再び恋に引き戻されてしまった。その後、Inachia との恋からは逃れたものの、今はまた Lyciscus への恋にかまける有様だ。つまり、恋愛詩の無力さを実感した詩人が、イアンボス詩に復帰することで恋も恋の詩も打ち捨てようとしたものの、再び以前と同様の servitium amoris の状況に引き戻された、こういう状態ではもはやイアンボス詩を書くことも楽しくない、結局、現にこの詩がそうであるように、今やエレゲイア詩人の書くような恋愛詩を書く他はない、ということなのではないか。

さらには、18 summotus pudor にも詩作の含意を読み取ることができる。この一節はこの作品の中でも難解な箇所であるが、次のように理解できよう。この pudor は明らかに 7 nam pudet tanti mali に対応する。tanti mali とは詩人が恋ゆえに都中で噂的となったことを指しているから、pudor とは詩人の恋ゆえの恥ずかしさを指す。Watson は a source of / cause of shame 「恋ゆえに陥った恥ずべき有様」と取るが、それを恥じる気持ち、恋ゆえの恥の念と解することも可能であろう。だがそれに加えて、つれない恋人のために徒らに詩を作る「恥ずかしさ」も含むと考えられる。Watson はそのような類例として、Prop. 3.24.3-4 noster amor tales tribuit tibi Cynthia, laudes: / versibus insignem te pudet esse meis; Tib. 1.9.47-8 quin etiam attonita laudes tibi mente canebam, / at me nunc nostri Pieridumque pudet を挙げる。恋人を讃える詩を書いても何の役にも立たないので、詩人たちは自らのそうした詩作を恥じるのである。本作品でも 11-2 で己の詩才が恋敵の富に対抗できないことを嘆くのも、詩作が恋には無益であることを恥じる気持ちの現れだとも理解できる。

^{*19} ただし、Barchiesi (apud Watson 15 + n. 104, Oliensis 93) が詩論的な解釈を提示しているようであるが、遺憾ながら筆者未見。

18 *summotus pudor* にもその含意を読み取ることができるとすれば、詩人は今、イアンボス詩に復帰して無益な恋の詩を書く恥ずかしさも追いやり、恋敵との争いもやめようとしている^{*20}、と解せる。15 ff. *quodsi* ... の条件節が詩作の問題を語っているならば、その帰結節 18 *desinet* ... *pudor* も詩作に関わる「恥」を問題にしていることになる。また実際、「恋敵との争い」の手段も、11-2 で語られたように詩人には詩作以外にはないはずだから、詩人がイアンボス詩に復帰して恋とともに恋の詩を書くこともやめれば、恋や恋愛詩から生ずる恥ずべき状況も、それらを恥じる気持ち（恋ゆえの恥の念）も追い退けられ、恋敵との争いをやめることになる、と理解できる^{*21}。

この解釈では、*libera bilis* がイアンボス詩を書く際の原動力となる「自由の怒り」を指すという点が重要である。そもそも *bilis* 「胆汁」は Arch. fr. 234 *χολήν γὰρ οὐκ ἔχεις ἐφ' ἥπατι* と関連する可能性がある。とすれば、アルキロコスにおいてすでにイアンボス詩の源としての「怒り」を表現する隠喩として「胆汁」が用いられていたことも考えられる。その含意は単にこの詩の文脈に合致するだけでなく、ホラーティウス自身の作品の中にも十分な根拠を見出すことができる。その一つとして、何よりもまず *Epod.* 4.9-10 *ut ora vertat huc et huc euntium / liberrima indignatio* を指摘することができる。この詩では成り上がり者に対する道行く人々の「自由きわまりない憤懣」のあと、作品後半（11-20）はその人々の語る誹謗中傷の言葉で占められている。それはまさに、「自由の怒り」こそがイアンボス的な誹謗中傷の源であることを如実に語ったものと言えよう^{*22}。

同様に、「怒り」がイアンボス詩の原動力であることを語る箇所としては『詩論』の一節 *Archilochum proprio rabies armavit iambo* 「憤怒がアルキロコスに彼独自のイアンボスで武装させた」（A. P. 79）と『カルミナ』第1巻 16 歌を挙げることができる。後者は、非

^{*20} Grassmann 107-8 は 18 *imparibus certare* を「対等の恋を返さない恋人 *Inachia* と喧嘩する」の意と取るが、*certare* + *dat.* = *rixor* と理解する点で無理がある。K-H, Watson ad loc. が解するように「恋敵と争う」の意が妥当であろう。

^{*21} *pudor* を追いやることで恋敵との争いをやめる、という表現から、恋敵と争ったのは恋の競争に破れる屈辱を味わいたくないという「恥の念」からであり、詩人は今そうした恥の念を打ち捨てようとしている、と理解してもよいかもしれない。しかし、それをも含めて、恋と恋愛詩から生ずる恥ずかしさとそれを恥ずかしく思う気持ちを全体として *pudor* と呼び、要するに恋に伴う不面目を追いかうこと、即ち恋も恋の詩もやめることを語っていると理解できよう。なお、*summotus pudor* の表現については末尾の補注 1 も参照されたい。

^{*22} なお、この解釈は、11.16 *dividat* という写本の読みの妥当性を裏書きする。なぜなら、*Epod.* 4.9-10 *ut ora vertat huc et huc euntium / liberrima indignatio* でも「自由な憤懣」が人々の行動を左右する主体のように一種擬人的に表現されており、また、イアンボス的な *libera bilis*こそが恋愛詩を指す「無益な湿布薬」を風に吹き散らすことで、イアンボス詩が恋愛詩に取って代わることが表現されることになると考えられるからである。

難がましいイアンボス詩を書いてきた詩人が今や誹謗の歌を取り消して穏やかな詩に切り替えることで恋人と和解することを求める palinode 「歌い直しの詩」であるが、そこではイアンボス詩の源である「怒り」の力の大きさと普遍性が主題化される形で語られている。冒頭の 2-4 quem criminosus cumque voles modum / pones iambis, sive flamma / sive mari libet Hadriano に続いて 5-21 で「怒り」の力の大きさと普遍性が語られ、結末では 22-6 compesce mentem; me quoque pectoris / temptavit in dulci iuventa / fervor et in celeris iambos / misit furem, nunc ego mitibus / mutare quaero tristia, dum mihi / fias recantatis amica / opprobriis animumque reddas と締め括られる。怒りほど強力なものはなく、怒りを抑制できる者もない、人類創造に際して怒りが付与された、怒りこそが人や都の破滅をもたらした。私もかつて怒りに駆られて誹謗のイアンボス詩を書いたが、今は穏やかな詩に歌い直すので仲直りしてほしい、と。詩人がイアンボス詩を作ったことが「熱情が過激なイアンボスへと私を狂おしく駆り立てた」(24-5)と言われているが、その fervor, furem もやはりイアンボス的な辛辣な怒り (9 tristes ... irae, 17 irae, 26 tristia) の言い換えであると言ってよからう*23。

他方、liber / libertas 「自由」も、上述の *Epod.* 4.10 liberrima indignatio 以外にも特に『サトゥラエ』等ではギリシア古喜劇や *saturae* などのジャンルの自由闊達な誹謗中傷と毒舌の詩に関連してしばしば言及される*24。言うまでもなく、古喜劇自体も何らかイアンボス詩の影響を受けた、多くの共通性を持つジャンルであり*25、従って、ホラーティウス自身の主張によれば (*Sat.* 1.4.1-7) ギリシアの古喜劇に依拠しているとされるローマの *saturae* のジャンルもまた、イアンボス詩の性格のある面で受け継ぐ類縁のジャンルだと言っても間違いではない。端的に言えば、非難に値する人物や状況を槍玉に挙げてこれに歯に衣着せぬ誹謗や非難を投げかけるという意味での「自由闊達さ」の点で、ホラーティウスが同時期に書いていた 2 種類の初期作品『エポーディ (イアンビー)』と『サトゥラエ』は共

*23 *Carm.* 1.16 はこのあと見る *Epod.* 14 で語られる抒情詩への傾斜との関連でも、また *Epod.* 17.37-52 の palinode との関連からも、詩人の詩作の問題に深く関係する点で興味深い。

*24 *Sat.* 1.4.1-5 Eupolis atque Cratinus Aristophanesque poetae / atque alii, quorum comoedia prisca virorum est, / siquis erat dignus describi, quod malus ac fur, / quod moechus foret aut sicarius aut alioqui / famosus, multa cum libertate notabant; 1.4.103-5 liberius si / dixero quid, si forte iocosius, hoc mihi iuris / cum venia dabis: insuevit pater optimus hoc me, / ut fugerem exemplis vitiorum quaeque notando; 2.8.37 vel quod maledicunt liberius; *Epist.* 2.1.145-50 Fescennina per hunc inventa licentia morem / versibus alternis opprobria rustica fudit, / libertasque recurrentis accepta per annos lusit amabiliter, donec iam saevos apertam / in rabiem coepit verti iocus et per honestas / ire domos inpune minax; *A. P.* 282 successit vetus his comoedia, non sine multa / laude; sed in vitium libertas excidit et vim / dignam lege regi: lex est accepta chorusque / turpiter obtulit sublato iure nocendi.

*25 Cf. Arist. *Poet.* 1448b26-1449a6; West 33-37, esp. 37; *Cambridge History of Classical Literature*, I. *Greek Literature*, Cambridge 1985, 363.

通する性格を持つと言うことができる。

このように、*Epod.* 11.16 libera bilis は自由闊達に誹謗中傷を語るイアンボス詩の原動力となる怒りを意味する言葉であり、ここで詩人はその「自由の怒り」によってイアンボス詩に復帰することで Inachia との恋と恋愛詩から脱却しようとしている、と理解できる^{*26}。

libera bilis についてはまた、13 inverecundus deus (= Liber) との関連も考慮すべきであろう。さらに、13 inverecundus と 7 nam pudet tanti mali, 18 summotus pudor との関連も明らかである。つまり、inverecundus deus 「恥を知らぬ神」即ち酒神 Liber が詩人の心の奥底の秘密を暴露した、とは、酒に酔ったことで恋心を秘密にしておけずに友人に告白したことを指し、それは酒の力によって恋ゆえの恥の気持ちさえも薄れたために、内心の本音をあけすけに語るに至ったことを指している。Liber の名が示す通り、酒の神はイアンボス的な自由闊達であけすけな発言を促す神でもあり、詩人がイアンボス詩に復帰しようとする決意を促した神だったとも想像される。そして、それによって恋と恋愛詩を打ち捨てそれ故の恥の念をも押しのけようとしたことも、Liber 神の「恥を知らぬ」性格に合致すると考えられる。

しかも、libera bilis の詩句はさらに 25-6 unde expedire non amicorum queant / libera consilia nec contumeliae graves と関連することも明らかである。そこでは友人たちの「自由闊達な忠告も重い非難の言葉も」詩人を Lyciscus への恋から解放してくれはしない、と言われる。libera consilia、即ち友人たちの率直な忠告の言葉が詩人自身のイアンボス詩の精神に通ずることは明らかである。続く contumeliae graves も同じくイアンボス的な「重い非難」を指し、2 amore percutsum gravi と言われた「重苦しい恋」に対抗するものと理解できる。しかし、ここではそれらも詩人を恋から解き放つことはできないだろう、と言われる。expedire 「解放する」の一語からは詩人が今捕われている恋の隷属 servitium amoris の含意を読み取ることができると同時に、友人たちの「自由な」忠告や非難もまた、詩人自身が恋から脱却すべく復帰しようと試みた（「自由の怒り」に発する）イアンボス詩と同じく、結局は詩人を恋から解放する力のないことが最後に明言され、詩人は別の新たな恋に捕われるしか今の恋から抜け出せないことを告白するのである。この最後の 6 行 23-8 は 5-22 の回想場面を挟んで冒頭の 1-4 と対応する ring-composition を形成しており^{*27}、重苦しい恋が詩人を捉えて（自由な）イアンボス詩の詩作を妨げているのに対して、友人たちの自由な忠告も重い叱責もその恋から詩人を解放できずにいるという対応関係が読み取

^{*26} Porphyrio ad *Epod.* 11.1 Pettium contubernalem adloquitur, indicans occupato sibi amore Lycisci pueri non libere versus scribere も同様の解釈を示しているとも考えられる。

^{*27} Cf. Grassmann 119-20, Watson (1983), 230, id. 360.

れよう。libera bilis が scribere versiculos (= iambos) に繋がることからすれば、versiculos にも「自由の詩」の含意が込められていたと考えられる^{*28}。

こうして、イアンボス的な libera bilis のほか、inverecundus deus (= Liber), libera consilia, contumeliae graves が詩人を恋と恥から解放し「怒り」によって自由闊達・奔放な詩作を続けさせる（と期待される）ものである一方で、その対極にある amor gravis は詩人を pudor と servitium amoris のうちに引きずり込み、イアンボス詩を書くことに魅力を感じなくさせてしまい、結局詩人は今書いているようなエレゲイア的な恋愛詩を書かざるを得なくなっている、というのが、この作品で描き出されている詩人の有様——恋と詩作の関連——であると理解できる。

III

さて、以上の解釈は、ホラーティウスが自らを「恋に落ちたイアンボス詩人」として描くことで、それによって自らの詩作のあり方が変質したことを示唆するという「詩論的」meta-poetic な作品として捉えるものである。確かにイアンボス詩人でありながら恥ずべき恋にかまける詩人は、今やエレゲイア詩のような恋愛詩を書くに至っているかに見える。しかしながら、ここに描かれた詩人の姿とこれを書いている詩人（作者ホラーティウス）の詩作意図とは別物であり、「恋に落ちたイアンボス詩人」という persona を描き出した作者ホラーティウスの本当の詩作意図はさらに別のところにある、と考えねばならない。その意味において、恋愛詩的要素を引き継ぐ第 14 歌との類似性を考慮に入れるとき、これまでの解釈は新たな視点から捉え直されることになる。

Epod. 14

Mollis inertia cur tantam diffuderit imis
 oblivionem sensibus,
 pocula Lethaeos ut si ducentia somnos
 arente fauce traxerim,
 candide Maecenas, occidis saepe rogando: 5
deus, deus nam me vetat
inceptos olim, promissum carmen, iambos
ad umbilicum adducere.
 non aliter Samio dicunt arsisse Bathyllo
Anacreonta Teium, 10
qui persaepe cava testudine flevit amorem

^{*28} この点は小池登氏のコメントが参考になった。

non elaboratum ad pedem.
 ureris ipse miser. quodsi non pulchrior ignis
 accendit obsessam Ilion,
 gaude sorte tua: me libertina nec uno
 contenta Phryne macerat.

15

軟弱な怠惰がどうして感覚の奥底にまで

これほどの忘却を行き渡らせたのか、

あたかも私はレーテー（冥界の河）の眠りを誘う杯を

乾いた喉から呑み込んだようだ、と

率直なマエケーナースよ、あなたは何度も尋ねて私を打ちのめす。

5

神だ、神なのだ、私が（あなたに）お約束した詩、

すでに書き始めたイアンボス詩を、

巻物の軸に至るまで仕上げることを禁じているのは。

それと同じように、かつてテオス島のアナクレオンも

サモスのバテュッロスへの恋に燃えたと言われる、

10

彼は、空洞の亀甲の豎琴で何度となくその恋を嘆いた、

念入りに整えられてはいない足取り（韻律）で。

あなた自身もみじめに燃やされている。だがもし、包囲された

イーリオンを焼き滅ぼした火の方がより美しくなかったとしたら、

あなたの幸運をお喜びなさい。対する私は、解放奴隷で、一人の

15

男に満足しないプリュネーに煮立てられている。

第 11 歌と同じく、恋のためにもはやイアンボス詩への情熱が失せ、今やアナクレオンのような恋愛抒情詩に詩作の心が傾いていることを示唆する「プログラムの」な詩論的作品である。この第 14 歌ではマエケーナースと詩人の友人関係という、第 1, 3, 9 歌にも見られた設定が敷かれ、特にパトロンに対する詩作の約束を守れないことへの言い訳という形で、詩人の詩作の方向性が語られている。詩人は今や恋に捕われたために、約束通りにイアンボス詩集を完成させられず、より恋愛にふさわしいアナクレオンのような抒情詩に心を寄せるに至っている、と言うのである。ここでも、イアンボス詩は恋に落ちた詩人にふさわしい詩作ではなく、恋には別のジャンルの詩が必要であることが示唆されている。第 11 歌も 14 歌もともに「恋に落ちたイアンボス詩人」を描き、ともに異なるジャンルの恋愛詩（第 11 歌ではエレゲイア詩、第 14 歌では抒情詩）への傾斜を示す点で共通する。

しかしながら、重要なことは、これら両歌ともイアンボス詩人としての「墮落」を自嘲的に語る点でイアンボス詩としての性格を保っているという点である。例えば K-H は、

第 11 歌について、この詩は決してエレゲイア詩になっているわけではなく、エレゲイア詩人ならばこのように自らを突き放した嘲笑的な態度を示すことはないと指摘する^{*29}。また、イアンボス的な libera bilis の無力さを語るのも、実はアルキロコス以来のイアンボス詩人の無力さ・頼りなさ (ἀμνηχανία / impotentia) を語る伝統に忠実な描き方だと言える^{*30}。しかも、詩人の恋はエレゲイア詩人のように特定の恋人に対するものではなく、次々と「少年や少女」に無差別に熱を上げるような恋であって、詩人自身がローマの内乱に対して非難したのと同様の見境のなさで連続性を特徴とする、まさにイアンボス詩の標的となるにふさわしい恋である^{*31}。詩人はそのような非難に値する自らの恋を自嘲と皮肉を込めて描き出している^{*32}。また第 14 歌でも、冒頭のマエケーナースの問いかけは第 3 歌でニンニクを詩人に食わせた悪戯にも対応するようなかからかいであり^{*33}、それに対する 5 行目の詩人の応答も第 3 歌と同様の誇張と揶揄を含む。続く deus, deus nam me vetat ... もうわべの荘重さを装いつつ、カッリマコス以来の詩人の詩作を制止する Apollo を Amor に置き換えた諧謔的な recusatio である^{*34}。また、末尾のマエケーナースの恋との対比にもイアンボス的な皮肉と自嘲が込められている。特に、マエケーナースの恋人が傾城の美女ヘレネー（あるいは美男子パリスか）にも勝ると示唆する皮肉やからかいと、詩人自身を「煮立てる」恋人が解放奴隷身分で浮気な「プリュネー」だという自嘲^{*35}との組み合わせは、第 3 歌の詩人とマエケーナースの関係と好一対をなす形で、やはり基本的にイアンボス詩の軽佻浮薄で諧謔的な性格を保持している^{*36}。そのような共通性の点でも、

^{*29} K-H 530: ... auch ist das Gedicht dem Gehalt nach keineswegs zur Elegie geworden. Der Elegiker, der seine Ohnmacht gegen quälende und entwürdigende Leidenschaft schildert, kommt sich dabei bedauernswert vor, der Jambiker halb lächerlich, halb verächtlich. Eine solche Objektivität der Selbstbetrachtung ... ただし、この直後の、この客観視は過去の恋が主題だからこそ納得できる、という考えには賛同しかねる。現在・未来の恋もさらに冷徹に捉えられているからである。

^{*30} この問題については、Fitzgerald, Oliensis (1991), ead. (1998), esp. 68 ff., Watson (1995), id. 9, 22, 461.

^{*31} E.g. *Epod.* 11.4 mollibus in pueris aut in puellis urere, 27-8 alius ardor aut puellae candidae / aut teretis pueri longam renodantis comam, cf. 7.1-2, 16.1 altera iam teritur bellis civilibus aetas. Cf. Oliensis (1998) 94. なお、11.28 renodantis が「結び上げる」のか「結び目を解く」なのか曖昧だが、詩人を今後も絶え間なく恋の呪縛に巻き込む恋人がその髪を「縛る」のか「解く」のかどちらともつかぬところにその逆説が象徴的に暗示されている、cf. Armstrong 66.

^{*32} Cf. Grassmann 121-2, Watson 362.

^{*33} *Epod.* 14.3-4 pocula Lethaeos ut si ducentia somnos / arente fauce traxerim は 3.3 cicutis alium nocentius, 5 quid hoc veneni saevit in praecordiis? への (Maecenas による?) allusion とも考えられる。

^{*34} Callim. fr. 1.22 ff., *Hymn.* 2.105 ff., Verg. *Ecl.* 6.3 ff., Hor. *Carm.* 1.6.9 ff., Prop. 3.3.13 ff. etc.; cf. Grassmann 129, 144, Watson ad 6.

^{*35} 16 macerat は *Carm.* 1.13.8 macerer ignibus でも繰返される表現だが、13-4 の叙事詩的な猛火とは対照的な卑近な調理用語であり、また Phryne は前 4 世紀の美貌の hetaira の渾名でもあるが、その名が意味する「ヒキガエル」には美女ヘレネーとの対比も含意されていると考えられる、cf. Mankin, Watson ad loc.

^{*36} Cf. Grassmann 144, Watson 440-1.

第 11 と第 14 の両歌はやはりペアをなすと言うことができよう。

ただし、第 14 歌が明確に「イアンボス詩はもう書けない」と言って抒情詩に向かうことを示唆するのに対して、第 11 歌では「イアンボス詩はもう楽しくない」と言いながらも、必ずしもエレゲイア詩に方向転換する姿勢を示すわけではない。だが逆に、第 14 歌はアナクレオンの抒情詩への方向性を語りつつも、韻律的にも表現の上でも必ずしも抒情詩的とは言えず^{*37}、むしろその本質においてイアンボス的である。一方で、第 11 歌もまた、恋に落ちたことで詩人が書く詩はエレゲイア詩的になってしまったように描かれてはいるけれども、それはあくまでモチーフや表現の点においてであり、上記のように詩の精神（調子や姿勢）はイアンボス的だと言わざるを得ない^{*38}。

でははたして、このような第 11 歌における詩人（即ち作者ホラティウス）の詩作意図はどこにあるのだろうか。その点を考える上では、改めて元になったアルキロコス の断片 Arch. fr. 196–196a との類似と相違を考慮すべきであろう^{*39}。Arch. fr. 196 ἀλλά μ' ὁ λυσιμελής ὠταίρε δάμνεται πόθος 「おお友よ、体を弛める欲望が私を圧倒している」、fr. 196a. 3 εἰ δ' ὦν ἐπείγεται καὶ σε θυμὸς ἰθύει 「もしあなたが急いでいて、欲望に駆られているなら」の詩句は、明らかに *Epod.* 11.1 *amore percussus gravi*, 4 *mollibus in pueris aut in puellis urere*, 6 *Inachia furere* と内容的に対応する。Arch. でも詩人の恋ないし情欲ゆえの狂気・逆上 *infatuation* が語られていることと *Epod.* 11 の恋の呪縛とは軌を一にするのである。しかし、Arch. ではその逆上は Neobule への非難罵倒とその妹の乙女との姦通(?) という形で、いかにもイアンボス詩的な展開を見せる^{*40}。だが、対する *Epod.* 11 ではむしろ「満たされぬ恋」という恋愛エレゲイア詩的な要素を大きく取り込む形で、むしろ恋がイアンボス詩の詩作を阻害するかその存立を危うくするように語られる。しかし、実はそのような形で「恋するイアンボス詩人」の墮落と変化を語ることで、むしろイアンボス詩の可能性を増幅する結果となっている。そこには、イアンボス詩の伝統を受け継ぎつ

^{*37} 韻律上は冒頭にも見たように dactylic hexameter + iambic dimeter であり、また 12 non elaboratum ad pedem には、詩人が緻密なイアンボス詩ではなく単純な恋の詩しか書けなくなったことさえ示唆されている (Watson ad 9–16)。他にも 13–4 の叙事詩的な都陥落の猛火の喩えや neotericism の要素 (Watson 455–7) など多様なジャンルの要素が盛り込まれているが、抒情詩的なのは 11 行目だけでも言えるほどで、9 dicunt はアナクレオンの詩が直接の典拠ではないことすら窺わせる (K–H ad loc.)。

^{*38} ちなみに、韻律上も elegiambus が versus asynartetus であること自体、elegus と iambus の合成かつ独立を端的に示している (cf. n. 6)。この関連から見ると、20 incerto pede もまた、いったんはイアンボス詩人に復帰する決意をしながら今まさにエレゲイア的な恋人に逆戻りするような「覚束ない足取り」と同時に、iambus と elegus の両方の韻律の間を揺れ動く「不確かな韻律」の意を掛けているのかもしれない (cf. *Epod.* 14.12 non elaboratum ad pedem)。

^{*39} この作品については、cf. Burnett 84–97, Bremer.

^{*40} イアンボス詩の全般的な性格に関しては、cf. Dover, West 22–39, Brown, Gerber 1–10, Carey.

つ、ローマの恋愛エレゲイア詩の要素を取り込むことで、イアンボス詩に新たなローマ的な独自性をもたらしとしたホラーティウスの意図が窺えよう。

そのような詩作意図との関連において、ウェルギリウスの『牧歌詩』第10歌とこの『エポーディ』第11歌の類比関係は重要な意味を持っている。最後にこの点を簡単に見ることで、『エポーディ』詩集の中でのこの作品の位置付けについても大まかな方向性を探っておきたい。

Verg. *Ecl.* 10.1–8, 60–77

Extremum hunc, Arethusa, mihi concede **laborem**:

pauca meo Gallo, sed quae legat ipsa Lycoris,
carmina sunt dicenda; neget quis carmina Gallo?

sic tibi, cum fluctus subterlabere Sicanos,

Doris amara suam non intermisceat undam,

5

incipi: sollicitos Galli dicamus amores,

dum tenera attondent simae uirgulta capellae.

non canimus surdis, respondent omnia siluae.

.

... — tamquam haec sit **nostri medicina furoris**,

60

aut deus ille malis hominum mitescere discat.

iam neque Hamadryades rursus **nec carmina nobis**

ipsa placent; ipsae rursus concedite siluae.

non illum nostri possunt mutare **labores**,

.

omnia uincit Amor: et **nos cedamus Amori**.

69

Haec sat erit, diuiae, uestrum cecinisse poetam,

70

dum sedet et gracili fiscellam texit hibisco,

Pierides: uos haec facietis maxima Gallo,

Gallo, cuius amor tantum mihi crescit in horas

quantum uere nouo uiridis se subicit alnus.

surgamus: solet esse grauis cantantibus umbra,

75

iuniperi grauis umbra; nocent et frugibus umbrae.

ite domum saturae, uenit Hesperus, ite capellae.

最後のこの労苦を、アレトウーサよ、私に許したまえ、

我がガッルスのために少しだけ、だがリュコーリス自身も読むような

詩を歌わねばならぬ。誰かガッルスに詩を拒む者があろうか。

どうか、あなたがシカーニアの波の下を潜って行くとき、

ドーリス（海）がおのれの潮辛い水をあなたに混ぜませぬように、

いざ始めたまえ、我らはガッルスの悩み多き恋を歌おう、
 鼻面の低い牝山羊たちが柔らかな藪草を食んでいる間に。
 我らは聞く耳持たぬ相手に歌うのではない、森はすべてをこだまさせる。

……まるでこれらが私の狂気を癒す薬であるかのようだ、 60

あるいはかの神が人間の苦しみに和らぐ心得があるかのようだ。
もはや、森のニンフたちも詩歌そのものさえ再び私には
楽しくはない、森たちよ、お前たち自身も再び引き退ってくれ、
 かの神を私の労苦が変えることはできない、

アモルはすべてを打ち負かす、我らもまたアモルに屈しよう。 69

これで十分に、女神たちよ、あなた方の詩人は歌ったはずだ、 70
 腰を下ろしてほっそりとしたタチアオイの枝で籠を編みながら、
 ピーエリデスよ、どうかこれを最大の贈り物となしたまえ、ガッルスに、
 ガッルスのために — 彼への私の愛は刻一刻といや増してゆく、
 ちょうど春先に緑のハンノキがぐんぐんと伸び上がるように。
 立ち上がろう、詩を歌う者にとって影はいつも重苦しいもの、 75
 ネズの木影は重苦しい、作物にも物影は障りになる。
 満ち足りて家へ帰れ、宵の明星が現れる、帰れ牝山羊たち。

Ecl. 10 でも、特に 60–3 では Gallus が牧歌世界は「恋の狂気を癒す薬」にはならず、牧歌世界とその詩作さえ「もはや楽しくない」と語る点に、*Epod.* 11 で描かれる詩人の状況との共通性が認められる。そして Gallus は結局 Amor に屈してエレゲイア詩の世界に戻ってゆく。Gallus は異質な牧歌詩を「楽しくない」と言って自らのエレゲイア詩へと戻るのに対して、*Epod.* 11 では詩人自身が自らのイアンボス詩を「今や楽しくない」と言ってエレゲイア詩への傾斜を示すが、*Ecl.* 10 でも *Epod.* 11 でも本来のジャンル（牧歌詩とイアンボス詩）が恋には不十分なことを示唆する点では共通する。

また、*Ecl.* 10 では牧歌詩人ウェルギリウスが「最後の labor」として恋愛エレゲイア詩人 Gallus を牧歌世界に導き入れ（1–8）、そこで生きようとする彼の姿を描き出す。Gallus は牧歌世界での生活と詩作によって自らの恋を癒そうとするが、結局そうした labores も恋の癒しにはならぬことを悟り、最終的には Amor の神に屈して再びエレゲイア詩の世界に戻る（60–9）。だがウェルギリウス自身は最後に、なおも牧歌詩人として Gallus への愛を語りつつ、自らもまた牧歌世界から立ち去ろうとする（70–7）。そういう形で 2 つのジャ

ソルの一時的な混交がなされると同時に最終的な融合は否定される。*Ecl.* 10 では牧歌詩人 ウェルギリウスとエレゲイア詩人 Gallus の詩人同士とジャンル間の交流と分離が描き出されることで、前者の后者への称賛とともに最終的なジャンルの自律性もが示される*41。

対する *Epod.* 11 と 14 ではイアンボス詩人たるホラーティウス自身（その *persona*）が恋に落ちることで、恋愛エレゲイア詩や抒情詩の世界に傾斜する様子が歌われる。異なるジャンルの詩人 Gallus を牧歌詩の世界に迎え入れる *Ecl.* 10 とでは方向性が逆だが、ジャンルの越境が語られる点では共通する。詩人自身の恋によりイアンボス詩の詩作の変質ないし別のジャンルへの移行さえもが示唆される一方で、「イアンボス詩人」の墮落が自嘲的に皮肉に語られる点でイアンボス詩の性格を保持している。こちらでもやはり、*Ecl.* 10 の場合と同様に、ジャンル間の混交が行われると同時にイアンボス詩の精神は維持され、最終的に融合や変質が生じるわけではない。

このようにして、元来の作品自体はあくまで「牧歌詩」なり「イアンボス詩」であり、その中に異質な要素、即ち恋愛エレゲイア詩的要素が組み込まれることで異なるジャンルの間の接触と衝突あるいは交流と対立が生じる。しかし、最終的には異質な要素は必ずしも融合することなく、元来のそれぞれのジャンルの独自性をあくまで保持する形で、むしろ異なる要素との混交によって「牧歌詩」なり「イアンボス詩」の特性がいつそう浮き彫りになるような形で生かされる。つまり、「牧歌詩」も「イアンボス詩」も「恋愛エレゲイア詩」との混交（接触と衝突）を経ることで、むしろ新たな可能性を付与されて豊かになり、同時にそれぞれのジャンルの性格が改めて確認されることにもなっている*42。

Ecl. 10 が『牧歌詩』詩集の最後に至って「最後の labor」として牧歌詩と異質なジャンルとの出会いと別れを演出しているのに対して、冒頭に述べたように *Epod.* 11 は 17 編から成る『エポーディ』詩集の半ば過ぎに位置して、第 10 歌までとは韻律上も内容的にも異なる詩のグループの先頭に置かれている。そのことと、この詩がイアンボス詩の新たな可能性を示す作品であることとは符合する。敢えて推測するならば、『牧歌詩』詩集では最後の試みとされたことを、ホラーティウスは『エポーディ（イアンビー）』詩集において、さらに拡張して試みようとしているのかもしれない*43。ともかくも、*Epod.* 11 は *Ecl.* 10 の先例に倣って異質なジャンルの要素を組み込むことで、イアンボス詩としての可能性を広げるような作品として意図されたと考えられる。しかも、同じ Gallus のローマ恋愛

*41 *Ecl.* 10 の解釈については、cf. Harrison 59-74.

*42 こうした「ジャンル混交」の特性と機能については、cf. Harrison 1-33, また特に『エポーディ』詩集については、104-35.

*43 『エポーディ』詩集全体の構成と構想の問題については、いずれ稿を改めて検討したい。なお、補注 2 も参照されたい。

エレゲイア詩の要素を導入することで、ローマ的な独自性を持った作品を作り出そうとしたのである^{*44}。

補注 1 (18 *summotus pudor*)

summotus pudor が「恋敵との争いをやめる」主体であるかのように語られている点と、*pudor* はしばしば *amor* の対極にあるものとして語られる (cf. e.g. Prop. 2.24.4) 点がこの一節の理解を困難にしている。後者の点からは *commotus pudor* (SB) や *furor* (Mankin) との修正読みが提案されている。だが、本作品では *pudor* は *amor* に対立するものではなく、逆に恋と恋愛詩に不可避免的に伴うものとして *bilis* (= *ira*) との対比においてほとんど *amor* の代わりに置かれている。換言すれば、この *pudor* は「恥 (の念)」一般ではなく、あくまでも恋と恋愛詩に関わるそれに他ならない。その *pudor* を退けることは *amor* を退けることに通ずるがゆえに、*summotus pudor* が「争いをやめる」主体のように言われていると考えられる (ちなみに、ホラティウスには *pudor* の否定的側面、「悪しき *pudor*」あるいは「捨てるべき *pudor*」を語る例が散見されることがこの関連から注目される: *Sat.* 2.3.39, *Carm.* 3.5.38, *Epist.* 1.9.12, 1.16.24, 1.18.24, *AP* 88)。従って、ここではあくまでも *pudor-amor* からの脱却ということを主語に置いたにすぎず、実際に「争いをやめる」のは人間 (詩人自身) 以外にはないとすれば、これは「詩人は *pudor* を追いやって (争いをやめる)」の代替表現だとも言えよう (人間の心情や属性を主体化する表現は例えば *Epod.* 15.11–6, esp. 15–6 *nec semel offensi [offensae codd.] cedit constantia formae, / si certus intrarit dolor* などにも見られる)。あるいは、「追いやる」主体は文脈から *bilis* だとも理解できるから、「恥が (怒りによって) 追いやられて」即ち「怒りが恥の念を押しつけて」(*pudor summotus [sc. (a) bile] = bilis summoto pudore*) と解することも不可能ではない (これは本論で見たように *bilis* がイアンボス詩に、*pudor* が恋愛詩に対応することにも合致する)。つまり、詩人は恋敵を自分に劣る者 (*imparibus*) と見なし、そのような相手と争ってまで恋にかまける自分の有様を恥ずかしく思い、そうした恋に伴う恥と恥の念 (即ち、恥を伴うような恋と恋愛詩) をイアンボス的な怒りによって追いやって、そこから脱却しようとしている (ちなみに、上述の *Epod.* 15 の 11 *mea ... virtute*, 12 *si quid ... viri*, 14 *quaeret iratus parem*, 15 *constantia*, 16 *dolor* もやはり同様に「男らしい憤り」で恋に対抗する意図を語っている)、と理解できる。なお、文体論的にはこれは、抽象名詞による (それを具象名詞の代りに用いる) 一種の換喩表現 (LHS 745 f.) あるいは抽象名詞の擬人化表現 (*ibid.*

^{*44} 本稿は、2011 年 10 月 15 日に東京大学駒場キャンパスで行われた第 10 回フィロロギカ研究集会で発表した原稿に加筆修正を施したものである。当日司会を担当された高橋宏幸氏を始め貴重な意見を頂いた方々、また査読の労をとられた方々にも、心より御礼を申し上げたい。

752 f.) の一例と見なせる。こうした換喩法や擬人化はエレゲイア詩にも特徴的な詩的語法であり、*Epod.* 15 の類例や本作品の類似表現 (3 amore, qui ... expetit, 5–6 December ... decutit, 10 arguit ... spiritus, 13–4 deus ... promorat, 24 amor ... tenet, 25–7 expedit non ... queant ... consilia ... sed alius ardor) と並んで、やはりエレゲイア詩的要素として意図的に用いられたものと考えられる。

補注 2

最新の Propertius のテキストを校訂した S. J. Heyworth (*Cynthia* 4–6) は、Prop. 1.1.5–6 donec me docuit castas odisse puellas / improbus et nullo vivere consilio (5 Puellas / sorores Heyworth) について、castas ... puellas = Musas とする古い解釈を復活させた。その当否はひとまず置いて、Prop. 1.1 が *Epod.* 11 といくつかの対応関係を含むことから (e.g. *Epod.* 5–6: Prop. 7; *E.* 15–6: P. 28; *E.* 12, 25 f.: P. 25 f.)、この解釈は興味深い。この解釈によれば Arch. fr. 215, Catull. 65, Hor. *Epod.* 11 と同様に詩作の妨げをもたらす状況が語られていることになる。仮にこの理解に従えば、特に恋が詩作の妨げとなったとする点で、Prop. は *Ecl.* 10.60–9 で語られる Gallus や *Epod.* 11 の Hor. の状況を踏まえていることが考えられる。とすれば、[Arch. > Catull. >] Gallus > Verg. > Hor. > Prop. というジャンルの枠を超えた応酬がなされたとさえ想定できるかもしれない。また、詩作に対する妨げが詩集の冒頭で語られる (しかしまさにそれが新たな詩作の始まりを告げるものとして用いられる) 点では、Catull. 65 がやはり「エレゲイア詩集」の冒頭に当たることと、*Epod.* 11 も新たな詩のグループの冒頭であることとの関連が注目される。

文献表

Q. Horati Flacci Opera, ed. D. R. Shackleton Bailey, Teubner 1985. [SB]

Q. Horatius Flaccus, recc. Io. G. Orellius, Io. G. Baiterus, G. Hirschfelder, Berlin 1886 (1972). [O–B–H]

Q. Horatius Flaccus, Oden und Epoden, erkl. von A. Kiessling u. R. Heinze, Weidmann 1930 (1984). [K–H]

Horace, Epodes, ed. [and comm.] by D. Mankin, Cambridge 1995. [Mankin]

Watson, L. W., A Commentary on Horace's Epodes, Oxford 2003. [Watson]

Horace, Satires I, with an Introd. Text, Tr. and Comm. by P. M. Brown, Warminster 1995. [Brown Sat.]

A Commentary on Horace, Odes, Book I, by R. G. M. Nisbet and M. Hubbard, Oxford 1970.
[N–H]

A Commentary on Horace, Odes, Book III, by R. G. M. Nisbet and N. Rudd, Oxford 2004. [N–R]
Iambi et Elegi Graeci ante Alexandrum cantati, ed. M. L. West, Oxford 1971².
Sexti Properti Elegos, ed. S. J. Heyworth, (OCT) Oxford 2007.

Anderson, W. S., *Essays on Roman Satire*, Princeton, NJ 1982.

Armstrong, D., *Horace*, New Haven and London, 1989.

Barchiesi, A., Alcune difficoltà nella carriera di un poeta giambico. Giambo ed elegia nell'epodo XI, in R. Cortès Tovar and J. C. Fernandez Corte (eds.), *Bimilenario de Horacio*, Salamanca 1994, 127–38.

Bremer, J. M. et al., *Some Recently Found Greek Poems*, (Mnemosyne Supplement 99), Brill 1987, 24–61 ('First Cologne Epode'). [Bremer]

Brown, C. G., Iambos, in *A Companion to the Greek Lyric Poets*, ed. by D. E. Gerber, (Mnemosyne Supplement 173), Leiden / New York / Köln 1997, 13–88, esp. 43–69.

Burnett, Anne Pippin, *Three Archaic Poets: Archilochus, Alcaeus, Sappho*, London 1983.

Carey, C., Iambos, in *The Cambridge Companion to Greek Lyric*, ed. by F. Budelmann, Cambridge 2009, 149–167.

Davis, G., *Polyhymnia, The Rhetoric of Horatian Lyric Discourse*, Berkeley / Los Angeles / Oxford 1991.

Dover, K. J., The Poetry of Archilochus (1963), in *Greek and the Greeks, Collected Papers, Vol. I*, Blackwell 1987, 97–121.

Fitzgerald, W., Power and Impotence in Horace's *Epodes*, *Ramus* 17 (1988) 176–91. = Lowrie, 141–59.

Fraenkel, E., *Horace*, Oxford 1957.

Gerber, D. E. (ed. tr.), *Greek Iambic Poetry, from the seventh to the fifth centuries BC*, (Loeb CL), Cambridge, Mass. 1999.

Grassmann, V., *Die erotischen Epoden des Horaz, Literarischer Hintergrund und sprachliche Tradition*, (Zetemata 39), München 1966.

Harrison, S. J., *Generic Enrichment in Vergil and Horace*, Oxford 2007.

Heyworth, S. J., *Cynthia: A Companion to the Text of Propertius*, Oxford 2007.

- Lowrie, Michèle (ed.), *Oxford Readings in Classical Studies; Horace: Odes and Epodes*, Oxford 2009.
- Luck, G., An Interpretation of Horace's Eleventh Epode, *JCS* 1 (1962) 122–6.
- Oliensis, Ellen, 'Canidia, Canicula, and the Decorum of Horace's *Epodes*', *Arethusa* 24 (1991), 107–38. = Lowrie 160–87.
- ead. *Horace and the Rhetoric of Authority*, Cambridge 1998.
- Schmidt, E. A., Amica vis pastoribus: Der Jambiker Horaz in seinem Epodenbuch, *Gymnasium* 84 (1977) 401–23.
- Watson, L. W., Problems in *Epode* 11, *CQ* 33 (1983) 229–38.
- id., Horace's *Epodes*: The Impotence of *Iambos*?, in *Homage to Horace*, ed. by S. J. Harrison, Oxford 1995, 188–202.
- id., The *Epodes*: Horace's Archilochus?, in *The Cambridge Companion to Horace*, ed. by S. Harrison, Cambridge 2007, 93–104.
- West, M. L., *Studies in Greek Elegy and Iambus*, Berlin / New York 1974.

(首都大学東京)

プラトン『饗宴』 178b–c の引用について

納富信留

I テクストの異同

プラトン『饗宴』では6名の「エロース讃美」が報告されるが、その口火をきるパイドロスの演説は、詩人の権威の引用から始まる。その箇所（178b2–c2）では写本上異読の問題はないが^{*1}、現代の諸校訂本はそれと異なるテキストを印刷している。本論文は、そのテキスト改変の経緯を辿り、写本通りの読みが正しいことを示す。

まず、BTW という主要写本が一致して伝えるテキストは、以下の通りである^{*2}。

【プラトン『饗宴』 178b–c】（以下の言及は、この行数で行う）

- b2 γονῆς γὰρ Ἐρωτος οὐτ' εἰσὶν οὔτε λέγονται ὑπ' οὐδενὸς
οὔτε ἰδιώτου οὔτε ποιητοῦ, ἀλλ' Ἡσιόδος πρῶτον μὲν Χάος φησὶ
γενέσθαι—
- b5 αὐτὰρ ἔπειτα
Γαί' εὐρύστερνος, πάντων ἕδος ἀσφαλὲς αἰεὶ,
ἣδ' Ἔρος
- b8 φησὶ μετὰ τὸ Χάος δύο τούτῳ γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα.
Παρμενίδης δὲ τὴν γένεσιν λέγει—
πρῶτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσαστο πάντων.
- c1 Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλειως ὁμολογεῖ. οὕτῳ πολλαχόθεν
ὁμολογεῖται ὃ Ἔρος ἐν τοῖς πρεσβύτατος εἶναι.

というのは、エロースを子供とする親は存在しませんし、それは、散文作家によっても詩人によっても語られていません。ヘシオドスは、こう言っています。最初にカオスが生まれ、

「更に次に、広い胸をもつ大地（ガイア）が、すべてのものの常に揺るぎなき

^{*1} 直前の 178a9–b1 “τὸ γὰρ ἐν τοῖς πρεσβύτατον εἶναι τὸν θεὸν τίμιον” には、数種の異読があるが、本論文では扱わない。

^{*2} B (= cod. Bodleianus, E. D. Clarke 39, 895 AD); T (= cod. Venetus Append. Class. 4, cod. 1, 12 世紀); W (= cod. Vindobonensis 54, suppl. phil. Gr. 7, 11 世紀)。

座として、そしてエロースが」と。

彼は、カオスの後でこの二人の神々、大地（ゲー）とエロースが生まれたと言っているのです。他方で、パルメニデスも、その生まれについて語っています。

「すべての神々の中で、まず最初にエロースを工夫して作った。」

アクシレオスもヘシオドスに同意しています。このように、多くの方面から、エロースが神々の中でもっとも年長であることが合意されているのです。

ところが、Burnet が校訂した OCT 版（1901¹, 1910²）を始めとする現代の諸校訂版では、ヘシオドスの引用に続く 178b8–c2 が、次のように印刷されている。

b8 Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλεως σύμφησιν μετὰ τὸ Χάος δύο
τούτῳ γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα. Παρμενίδης δὲ τὴν
γένεσιν λέγει—

πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων.

c1 οὕτῳ πολλὰχόθεν ὁμολογείται ὁ Ἔρως ἐν τοῖς πρεσβύ-
τατος εἶναι.

アクシレオスもヘシオドスに賛成して、カオスの後でこの二人の神々、大地とエロースが生まれたと主張しています。他方で、パルメニデスも、その生まれについて語っています。

「すべての神々の中で、まず最初にエロースを工夫して作った。」

このように、多くの方面から、エロースが神々の中でもっとも年長であることが合意されているのです。

Burnet 版はその後の定本となり、Dover (1980)、Vicaire (1989)、Rowe (1998) 等がこれに従っている。しかし、この数行には 18 世紀末以来議論があり、現在では広く受け入れられている Burnet のテキストは、複雑な経緯の末に校訂された新しい提案であった。

20 世紀の主な校訂版の中で、写本の読みを基本的に維持しているのは、Léon Robin による Budé 版 (1929¹, 1958⁶) であった。但し、b8 “φῆσι” の後に “δῆ” を補っている。しかし、Vicaire による Budé 新版 (1989) では、他の諸版と同様に Burnet 版のテキストに変更されている。その変更に応じて、フランス語訳では、Chambry (1958) が Robin と共に写本通りの読みを、Brisson (1998) が Burnet–Vicaire の流布したテキストの読みを、それぞれ採用している*3。

日本語訳では、ギリシア語原典から最初に翻訳を行った久保勉が、Robin を主に用いて

*3 Brisson (1998), p. 188 の註はこの問題に触れているが、理解が混乱しているように見える。

写本通りに訳していた*4。また、山本光雄訳、岩波全集版の鈴木照雄訳は、Burnet 版を底本としているにもかかわらず、この箇所については註記して写本の通りの読み方を採用している*5。それに対して、森進一訳、朴一功訳は、特に註記することなく Burnet 版に従っている*6。

Burnet 版は、主要写本の読みと、以下の 3 点で異なっている。

- (i) BTW の写本では、“Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλεως ὁμολογεῖ” がパルメニデスの引用後の c1 にあったが、その前の b8 に移されている。
- (ii) 写本にあった c1 の動詞 “ὁμολογεῖ” が、移動した b8 では “σύμφησιν” に変えられている。
- (iii) ヘシオドス引用直後 b8 の “φησί” が削除され、移動した “σύμφησιν” の構文に統合されている。

最も新しい Rowe の註釈書はこのテキスト問題に触れ、写本通りの読み方も不可能ではないとしながら、内容上まったく違いがないため、わざわざそれを擁護する必要はないと断っている*7。しかしながら、私はここには重要な違いがあり、写本の読みを採らなければプラトンの真意が読み取れないことを論じていく。

2 テキスト改竄の経緯

写本の読みが大きく変更されるのは、Martin Schanz の校訂（1882）からであるが、この箇所については、それ以前から議論が向けられてきた。

〔第 1 段階 18 世紀末の疑義提示〕

Friedrich August Wolf（1759–1824）は、1782 年に出版した『饗宴』の註釈書 *Platons Gastmahl, Ein Dialog* で、伝統的なテキスト（Stephanus 版）を印刷しながら、註でこの箇所の読み疑問を提示している。Wolf は、Christian Gottlob Heyne（1729–1812）が前年に発表した意見として、パルメニデスへの言及部が後世の欄外註記（gloss）の挿入であると

*4 久保・阿部（1934）、久保（1952）参照。

*5 山本（1952）、（1973）、鈴木（1974）参照。Robin の影響が強いとはいえ、日本語訳者たちの判断は注目に値する。なお、鈴木（1966）の中央公論社版は、Burnet のテキストの通りに訳出していた。

*6 森（1963）、朴（2007）参照。

*7 Cf. Rowe（1998）, p. 137.

の見方を紹介している*⁸。Heyne は、ストバイオスの抜粋を典拠にして、パルメニデスの引用がアリストテレス『形而上学』に由来する挿入であろうと示唆していたという（これら 2 典拠についてはすぐに検討する）。Wolf 自身は、後のアガトンの言及（I95b-c）を参照し、この提案を受け入れてはいない。だが、この註は、以後の議論の出発点になった。

〔第 2 段階 19 世紀の後半まで〕

Heyne-Wolf の疑問が提示される以前、Stephanus（I578）の普及版は基本的に写本伝承に従っており⁹、それが諸校訂版に受け継がれていた。19 世紀に新たに校合を行った Bekker（I817）も、写本通りの読みを採っている。

他方で、Stallbaum（I836）は写本通りの読みを印刷しながら、Heyne らによる b8-I0 “φησὶ μετὰ ... πάντων.” への疑義を註で論じている。パルメニデスの詩句に連動して、ヘシオドスへの言及も疑問視されるようになっていく。

ヘシオドスの詩行を引用した直後 b8 にパイドロスが与えるパラフレイズは、詩句の内容のくり返しに過ぎないものと見なされ、その必要性に大きな疑義が投げかけられる。Ast（I821）と Zürich 版の Baier et al.（I841）は、実際にヘシオドス引用後のパラフレイズとパルメニデスへの引用部、即ち、b8-I0 “φησὶ μετὰ ... πάντων.” の全体に [] を付けて削除を提案している。さらに、Hommel（I834）の議論を受けて、19 世紀後半には、Jahn（I864）と Hug（I884）が b8 のパラフレイズ部を削除している*¹⁰。Hermann（I851）は、逆に、ヘシオドスの引用自体（b6-7）の削除を提案している*¹¹。

〔疑義への典拠〕

b8-c2 の部分は、2 つの典拠との関係から正当性が疑われていた。一つは、ストバイオスによる抜粋であり、もう一つは、アリストテレスの並行（パラレル）記述である。この 2 典拠を検討しよう。

*⁸ Wolf（I782）, p. 20 参照。Wolf が言及するのは、Heyne（I781）, p. 377 であるが、筆者は未見。19 世紀ドイツ古典文献学の理論的礎を築いた Wolf であったが、『饗宴』について写本校訂（recensio）は行っていない。Timpanaro（2005）, p. 74, n. 47 参照。

*⁹ 但し、次の 2 箇所異なる語句が印刷されている：b2 γονεῖς, b3-4 γενέσθαι φησὶν。これらの起源がどこにあるのか、調査はついていない。

*¹⁰ Hommel（I834）, pp. 55-56 は註で問題を議論しているが、本文では写本通りに印刷している。Jahn（I864）, p. 11, Hug（I884）, p. 37 は削除記号を付ける。

*¹¹ Hermann（I851）, Praefatio, p. xiii, p. 146 参照。不思議なことに、彼は “αὐτὰρ ἔπειτα” の部分は残している。Badham（I866）はテキストでは写本通りに印刷しているが、Praefatio, p. iv でやはりヘシオドス引用の削除を論じている。

【ストバイオス『精華集』*Anthologium* 1.9.12】(陰影部はプラトンとの相違箇所)

(12.) Τοῦ αὐτοῦ

Ἐφη Φαῖδρον ἀρξάμενον ἐνθένδε ποθὲν λέγειν, ὅτι μέγας θεὸς εἴη ὁ Ἔρως καὶ θαυμαστὸς ἐν ἀνθρώποις τε καὶ θεοῖς, πολλαχῇ μὲν καὶ ἄλλῃ, οὐχ ἥκιστα δὲ κατὰ τὴν γένεσιν. τὸ γὰρ ἐν τοῖς πρεσβύτατον εἶναι τῶν θεῶν τίμιον, ἡ δ' ὅς· τεκμήριον δὲ τούτου· γοῶναι γὰρ Ἐρωτος οὐτ' εἰσιν οὔτε λέγονται ὑπ' οὐδενὸς οὔτε ἰδιώτου οὔτε ποιητοῦ, ἀλλὰ Ἡσίοδος πρῶτον μὲν Χάος φησὶ γίγνεσθαι, μετὰ τὸ χάος δύο τούτω γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα. Ἡσιόδω δὲ καὶ Ἀκουσίλειως ξύμφησιν ἐν τοῖς πρεσβυτάτοις εἶναι· πρεσβυτάτος τε ὦν μεγίστων ἀγαθῶν ἡμῖν αἰτίος ἐστίν.

ストバイオスはこの項で『饗宴』178a-cから抜粋しているが、そこではパルメニデスへの言及と引用が完全に欠落している。また、ヘシオドスについても、パラフレイズだけで詩行の引用はない。最後に、アクシレオスの説明が若干表現を変えてある。

Heyneはこの抜粋を根拠に、パルメニデスの詩句が後世の欄外註記であると考え、その註記の元はアリストテレス『形而上学』の並行箇所にあったと推測した。

【アリストテレス『形而上学』A4, 984b23-31】(陰影部はプラトンとの一致箇所)

ὑποπεύσειε δ' ἂν τις Ἡσίοδον πρῶτον ζητῆσαι τὸ τοιοῦτον, κὰν εἴ τις ἄλλος ἔρωτα ἢ ἐπιθυμίαν ἐν τοῖς οὖσιν ἔθηκεν ὡς ἀρχήν, οἷον καὶ Παρμενίδης· καὶ γὰρ οὗτος κατασκευάζων τὴν τοῦ παντὸς γένεσιν πρῶτον^{*12} μὲν φησιν “ἔρωτα θεῶν μητίσαστο πάντων”, Ἡσίοδος δὲ “πάντων μὲν πρῶτιστα χάος γένητ', αὐτὰρ ἔπειτα / γαῖ' εὐρύστερνος. / ἡδ' ἔρος, ὃς πάντεσσι μεταπρέπει ἀθανάτοισιν”, ὡς δέον ἐν τοῖς οὖσιν ὑπάρχειν τιν' αἰτίαν ἣτις κινήσει καὶ συνάξει τὰ πράγματα.

ヘシオドスが最初にこのような原理を探求したのではないかと疑う人がいるかもしれない。あるいは、もしその他の誰かが、エロスや欲望を存在するもののうちに原理として立てたのであれば、その人であると。パルメニデスもそうであるように。というのは、彼もまた、すべてのものの生成を考案して、「すべての神々のうち」最初に「エロスを工夫して作った」と言っているからである。他方で、ヘシオドスは、「すべてのもののうち、最も初めにカオスが生まれ、更に次に広い胸をもつ大地（ガイア）が、そしてすべての不死なる神々のなかで秀でたエロースが」と言っている。これらは、存在するもののうちにそれらの事物を動かし結び付ける何かの原因があるに違いないと考えてのことである。

^{*12} 写本では“πρῶτον”とあるが、David RossやWerner Jaegerの校訂版ではプラトンに対応させて“πρώτιστον”に修正している。確かに写本の読みではヘキサメトロスを構成しないが、“πρῶτον”の語は地の文に組み込まれていたであろう。写本通りとする。

アリストテレスはパルメニデスの引用（断片 13）と並んで『神統記』の 116–117, 120 行を引用しており、『饗宴』に精確に対応する。その密接な対応は逆に、Heyne らによる『饗宴』のテキストへの疑義を生むことになった。だが、Wolf が指摘したように、アガトンも後にパルメニデスのこの詩句に言及している。

しかし、ストバイオスの『精華集』第 1 巻 9 章は「天上のアフロディテとエロース」という主題で名言を集めたもので、その第 5 項ではヘシオドス『神統記』の当該箇所が（116–117, 120 行のみ）、第 6 項ではパルメニデスの断片 13 が、それぞれ独立に収録されている。それに続く第 12 項での『饗宴』178a–c からの抜粋は、それらの抜粋に重ならないように修正されている。そこでヘシオドスの詩行が省略され、パルメニデスが言及されないのは、ストバイオスの文脈では当然なのである。

いずれにせよ、『饗宴』のテキストは、ストバイオスとアリストテレスとの関係で疑問に付され、改訂されていった。

〔第 3 段階 Schanz の改定案〕

引用をめぐる問題点を回避するために、アクシレオスの言及 (c1) を前に移す Schanz 提案が登場する^{*13}。Schanz は b8–c2 のテキストをこう復元した。

Ἡσιόδω δὲ καὶ Ἀκουσίλεως ὁμολογεῖ *ὄς* φησὶ μετὰ τὸ Χάος δύο τούτω γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα. Παρμενίδης δὲ τὴν Γένεσιν λέγει
πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων.
οὕτω πολλαχόθεν ὁμολογεῖται ὃ Ἔρως ἐν τοῖς πρεσβύτατος εἶναι.

このように c1 にあった “Ἡσιόδω δὲ καὶ Ἀκουσίλεως ὁμολογεῖ” を b8 に移動させると、不必要とされてきた b8 “φησὶ ... Ἔρωτα” の文の主語が、ヘシオドスではなくアクシレオスになり、パラフレイズの冗長性は回避される。Schanz はその間に関係代名詞 “ὄς” を挟んで 2 文を接続する提案をしている。

c1 を 3 行前に移動させることは、やや突飛に見えるかもしれない。しかし、19 世紀の論争では、b8–10 の 3 行全体に疑義がもたれ、一部の校訂者はその削除を提案していたことを思い出そう。もしその 3 行を省くと、c1 は b7 の直後に来る。様々な改訂案の中で、おそらくそのような発想が生まれたのであろう。

〔第 4 段階 Burnet 版の成立〕

Burnet は基本的に Schanz の改訂の方向を受け入れた上で、更に、ストバイオスから

^{*13} Cf. Schanz (1882), p. 7.

“σύμφησι”の語を取り入れた。

Burnet が “ὁμολογεῖ” を “σύμφησι” に変えたのは、Schanz による “ὅς” 挿入の提案に見られるように、移動後に 2 文の接続が問題となるからであろう。この点では、“σύμφημι” という動詞は、ストバイオスにもあるように、対格と不定詞を取ることが自然である。また、b8 の “φησι” という写本の読みが、“σύμφησι” からの破損と見なすことはそれほど難しくはない。

だが、“σύμφημι” が同意の相手として与格を伴った上で、対格と不定詞を目的句に持つ用例は、LSJ の範囲では見られない。プラトンでは若干の用例があるが、この一語で「～に同意する」と、「……が……であると主張する」という二義を込めるには、やや無理があるかもしれない^{*14}。

この改訂の後、Heyne らが提起したパルメニデス引用部への疑義は、大きな障碍とは見なされなくなる。パルメニデスの引用自体は、c1-2 “οὕτω πολλαχόθεν ὁμολογεῖται” という表現が 2 名以上の証言に相応しい点、及び、195b-c のアガトンの言及によって、擁護されるからである^{*15}。

このような複合的な推測と改変の上で、現行の校訂版テキストが成立した。Burnet 版は、それ自体として自然な読みを提供するテキストとして、以後急速に普及していく。

〔第 5 段階 20 世紀の動向〕

Schanz の改訂案を受けながら、20 世紀前半には Burnet とは違う改訂を行う者もいた。

まず、Loeb 古典叢書の Lamb (1925) は、関係代名詞を追加せずに c1 の b8 への移動だけを採用する^{*16}。そこで、“φησι” の主語はアクシレオスと解されている。

Bury (1909¹, 1932²) も Schanz の移動案を受け入れるが、b8 “φησι… Ἐρωτα.” の部分を “ὁμολογεῖ” の欄外註記として削除する^{*17}。つまり、その文の主語がアクシレオスに変わっても、なお冗長性があるとの疑義が残っていたのである。

これらの校訂は、Schanz の移動提案が大きな影響力を揮ったこと、他方で、Burnet の更なる改訂案は必ずしもすぐに受け入れられていなかったことを示す。

既に紹介したように、Burnet 以降で写本の読みを維持していたのは Robin の Budé 版だけであった。だが、1989 年に改訂された Budé 新版では、Burnet 校訂と同じに変えられて

^{*14} プラトン著作集の範囲では、『ラケス』199a と、偽作と見なされる『ヒッパルコス』232b で、この構文が見られる。

^{*15} Cf. Bury (1909¹, 1932²), p. 23.

^{*16} Lamb (1925), p. 100.

^{*17} Bury (1909¹, 1932²), pp. 22-23.

しまった。そのため、現在流布するほとんどの主要なギリシア語校訂版とそれに依拠する翻訳が、Burnet 版テキストの読みとなっている。

3 ヒippias『名言集』からの引用

このテキスト改訂問題を大きく左右する新しい知見がある。それは、ここでパイドロスが語るヘシオドスとパルメニデスの引用に関わる。2つの引用を精査しよう。

[ヘシオドスの引用]

ヘシオドスが、カオスからエロースが生まれるまでを謳ったのが『神統記』116–122 行である。

【ヘシオドス『神統記』116–122】(陰影部はプラトンの引用箇所)

- 116 ἦτοι μὲν πρώτιστα Χάος γένητ'· αὐτὰρ ἔπειτα
 Γαῖ' εὐρύστερνος, πάντων ἕδος ἀσφαλὲς αἰεὶ
 ἀθανάτων οἳ ἔχουσι κάρη νιφόεντος Ὀλύμπου,
 Τάρταρά τ' ἡρόεντα μυχῶ χθονὸς εὐρυοδείης,
 120 ἦδ' Ἔρος, ὃς κάλλιστος ἐν ἀθανάτοισι θεοῖσι,
 λυσιμελής, πάντων τε θεῶν πάντων τ' ἀνθρώπων
 δάμναται ἐν στήθεσσι νόον καὶ ἐπίφρονα βουλήν.

このうちパイドロスが一まとまりで引用しているのは、116 行後半から 117 行、そして 120 行目の初めの部分である。間の 2 行が飛ばされていることが、大きな問題となる。内容的には、118 行の“ἀθανάτων”（不死＝神々）の語が落ちることで、117 行（178b6）の“πάντων”が「すべての者／物」といった不確定の対象を指すことになってしまう。但し、パイドロスの引用の文脈では、その 2 行がなくても意味は十分に取れる。

Hug は、プラトンとアリストテレスがその 2 行を知らなかったとコメントしている^{*18}。つまり、彼らが『神統記』を、現在に伝承されるテキストとは異なるテキストで読んでいたと、ここから推測したのである。この点は、実際、ヘシオドスのテキスト校訂にも問題を投げかけてきた。その帰趨は後述する。

[パルメニデスの引用]

パルメニデスの詩からの短い引用は、この箇所を主要典拠としてディールス・クランツ

^{*18} Cf. Hug (1884), p. 36.

の断片集(DK)にB13として収録されている。彼の詩の第2部「思いこみの道」に属することは間違いがないが、文脈は不明である。この断片には、プラトン当該箇所とアリストテレス『形而上学』A4を最古の証言として、他に後世の2箇所が典拠とされる。

【プルタルコス『愛について』*Amatorius*, 13, 756 F】

διὸ Παρμενίδης μὲν ἀποφαίνει τὸν Ἑρωτα τῶν Ἀφροδίτης ἔργων πρεσβύτατον ἐν τῇ
κοσμογονίᾳ γράφων
πρώτιστον μὲν Ἑρωτα θεῶν μητίσαστο πάντων.

プルタルコスは直後にヘシオドス『神統記』120行に言及しており、プラトン『饗宴』との対応も想定される。

【シンプリキオス『アリストテレス『自然学』註解』39, 18-20^{*19}】

ταύτην καὶ θεῶν αἰτίαν εἶναι φησι λέγων
πρώτιστον μὲν Ἑρωτα θεῶν μητίσαστο^{*20} πάντων.
καὶ τὰ ἐξῆς.

シンプリキオスは『形而上学』第1巻4章も意識していたかもしれないが、アリストテレスとは違って、“πρώτιστον”の語も正確に引用している。

これらのパルメニデス典拠からは、その詩句では何が主語かの論争も生じている。パイドロスはb9 “τὴν γένεσιν” (生成) を主語にとっているという読みもあるが(その場合、語頭が大文字で印字される)、私はパルメニデスが「生成」を神格化して語った可能性は低いと考える。また、プラトンでの引用部をそう読む必要はまったくない。他方で、プルタルコスは“Ἀφροδίτην”、シンプリキオスは“δαίμων”を主語においている。オリジナルの文脈がない以上、復元は困難である。後にアガトンが言及する際には(後に引用する)“ἀνάγκη”を主語に取っている、という解釈もある。

こういった論争に相即して、Rettig (1875) は導入部 b9 の “τὴν γένεσιν” を、Jahn (1865) は “τὴν γένεσιν λέγει” を削除している。

〔アリストテレスとの並行性〕

ヘシオドス『神統記』118-119行は、プラトンとアリストテレス、及び、その影響を受

^{*19} *Simplicii in Aristotelis Physicorum libros quattuor priores commentaria*, edidit Hermann Diels, 1882.

^{*20} μητίσαστο, DE.

けた引用でだけ欠落しており^{*21}、ヘシオドスの写本ではまったく疑われていない。West はヘシオドスの註釈書でこの欠落について検討し、その 2 行がすべてのヘシオドス写本に見られること、テオフィロス、ヒッポリュトス、ストバイオスら古代の著述家にも知られていたこと、そして一連の詩句の内容上の妥当性から、真正性は疑う余地がないものと結論づけている^{*22}。

すると、プラトンとアリストテレスは、この文脈では内容的に不必要という理由から、2 行を省いて引用しているのであろう。だが、2 人の引用の仕方の共通性は偶然であるとは思われない。執筆時期としては間違いなく『饗宴』（前 370 年代？）が『形而上学』講義に先立つことから、アリストテレスがプラトンのテキストを引用したと考えたくなる。しかし、両者の引用範囲は若干異なっており、アリストテレスが 116 行と 120 行をプラトンより長く引用している（その代わり、117 行は前半部のみ）。この点では、プラトンから単純に孫引きしたのではなく、別の典拠を用いたと想定すべきである。だがその場合、もし手元にヘシオドスの元本があったのであれば、何故欠落の 2 行を埋めなかったのか、という疑問が残る。

反対に、プラトンのテキストに当初はなかったパルメニデスの引用が、アリストテレスに由来する欄外註記から紛れ込んだという Heyne の示唆も、アガトンによる言及を考慮するとほぼ不可能である。それゆえ、プラトンとアリストテレスは直接の引用関係にあるのではなく、両者に共通する源泉・出典があると考えるのが自然であろう。この並行性は以前から知られていたが、『饗宴』においては、パルメニデス引用をめぐる疑念と混乱を惹き起こしてきた。

〔典拠としてのヒッピ阿斯〕

しかし、この問題を一挙に解決する提案が、別の研究から登場する。プラトンもアリストテレスも、ソフィスト・ヒッピアスの『名言集』*Anthologia* から引用していたという推定である。これは、哲学説の伝承 (doxography) を研究した Bruno Snell の知見を、Classen がこのテキストに適用したものである。

Snell は初め、アリストテレス『形而上学』第 1 巻 3 章 983b21 以降のタレスの説明が、プラトン『クラテュロス』402b に対応することに気づき、それがヒッピアスの『名言集』編集の方針に合うことを説得的に論じて、受け入れられてきた^{*23}。

前 5 世紀後半までに「抜粋集」を編集したとされる人物は、私たちの知るかぎりでは

^{*21} ストバイオス『精華集』I.9.5 参照。その抜粋は、『饗宴』178b からのものであろう。

^{*22} West (1966), pp. 193–194.

^{*23} Cf. Snell (1944), p. 170 ff. (*Crat.* 402a–c), von Kienle (1961), p. 41 ff.

ヒippiasだけであり、もしプラトンとアリストテレスが何らか共通の出典をもつとすると、状況からほぼヒippiasに間違いはない。

ヒippiasの編集方針については、次の証言がある。

【アレクサンドリアのクレメンス『雑録』*Stromateis* VI.15 = DK 86B6】

τούτων ἴσως εἴρηται τὰ μὲν Ὀρφεῖ, τὰ δὲ Μουσαίῳ κατὰ βραχὺ ἄλλωι ἁλλαχοῦ, τὰ δὲ Ἡσιόδωι τὰ δὲ Ὀμήρῳ, τὰ δὲ τοῖς ἄλλοις τῶν ποιητῶν, τὰ δὲ ἐν συγγραφαῖς τὰ μὲν Ἑλλήσι τὰ δὲ βαρβάροις· ἐγὼ δὲ ἐκ πάντων τούτων τὰ μέγιστα καὶ ὁμόφυλα συνθεῖς τοῦτον καινὸν καὶ πολυειδῆ τὸν λόγον ποιήσομαι.

こうした事柄のなかで、あることはオルフェウスによって語られ、あることはムーサイオスによって簡潔にそれぞれの場所でそれぞれの仕方語られており、またあることはヘシオドス、あることはホメロス、あるいは他の詩人たちによって語られている。またあることは、ギリシア人の、あることは異国人たちの散文著作において語られている。私は、これらすべてから、最も重要で同一なものを結合させて、この新しい多彩な言論作品をつくるのだ。

これは「断片」とされているが、おおよそその引用であり、逐語的なものではなからう。ヒippiasには『選集』*Συναγωγή*という著作があり（散逸）、そこではタルゲリアという女性の結婚歴が論じられているが、それとの関係は不明である（DK 86B4）。

「詩人」（韻文）と「散文著作」の両方から重要な部分を抜粋するという方針は、パイドロスの引用紹介の仕方（I78b1-3）と非常に類似している。ClassenはSnellの研究を発展させ、『クラテュロス』と同様に『饗宴』での引用がアリストテレスと共通する典拠、即ちヒippiasにあることを推定した。それを受けて、Patznerは、この箇所も含めてヒippias『名言集』から引用と推定される箇所を網羅的、かつ分類的に検討している。

Classen以来、MansfeldやPatznerらの学説誌研究により、『饗宴』I78b-cがヒippiasに由来することは、ほぼ確実視されている^{*24}。しかし、彼らの関心は、並行箇所を探索して『名言集』を復元することにあり、引用がはめ込まれたプラトンの文脈自体は顧みられていない。他方で、その後に書かれたDover, Roweらの『饗宴』註釈書で、この知見はまったく顧慮されていない。

〔アクシレオスの学説〕

『饗宴』の当該箇所が、「エロース」に関わる詩人や学識者の言葉を集めたヒippias

^{*24} Cf. Classen (1965), pp. 175-178. Mansfeld ([1986]/1990), pp. 35, 46, 48, 71, n. 9, Patzner (1986), pp. 43-48.

『名言集』からの引用であるとする、ヘシオドスとパルメニデスと並んでアクシレオスが登場することは自然に納得される。

Patzner は、基本的に写本通りの読みを採った上で、ヒッピアスの編集方針が年代順であり、「ヘシオドス、パルメニデス、アクシレオス」と並んでいた可能性を示唆する^{*25}。

アルゴス出身のアクシラオス（プラトンは「アクシレオス」と表記するが同一人物）は、ヘシオドス（前 700 年頃）の散文化を行ったともされる人物であり、『系譜論』Γενεαλογίαを著わした^{*26}。彼の年代ははっきりとは分からないが、活躍したのは前 5 世紀前半、ペルシア戦争の時期と推定されており、その場合パルメニデス（前 5 世紀初）よりやや後になる。年代順という Patzner の提案は妥当であろう。

Schanz-Burnet のようにアクシレオスへの言及を前に移して合成すると、文脈から彼もカオスの後に「大地とエロースが生まれた」と語っていたことになる。だが、伝承された学説はそれとは適合しない。

【ダマスキオス『第一の諸原理について』I24 (I.320, 10R.) = DK 9B1】

Ἀκουσίλαος δὲ Χάος μὲν ὑποτίθεσθαι μοι δοκεῖ τὴν πρώτην ἀρχὴν ὡς πάντῃ ἀγνωστον, τὰς δὲ δύο μετὰ τὴν μίαν Ἐρεβος μὲν τὴν ἄρρενα, τὴν δὲ θήλειαν Νύκτα ... ἐκ δὲ τούτων φησὶ μυχθέντων Αἰθέρα γενέσθαι καὶ Ἐρωτα καὶ Μῆτιν.

アクシラオスは、第一原理が、誰にも知られないものとして、カオスであると措定したと私に思われる。この 1 つの原理の後に、2 つの原理、即ち、エレボスという男性的原理と、ニュクスという女性的原理がある。〔中略〕これらが交わって、そこからアイテールとエロースとメーティスが生まれた。

この証言の出典は、アリストテレスの弟子エウデモスであったと明言されている (fr. 117 Wehrli)。アクシラオスについては、フィロデモス『敬虔について』のパピルスでも、「第一のものであるカオスから、他のものどもが〔生じた〕」と語ったとされる^{*27}。「カオス」を最初とする点ではヘシオドスと共通するが、その後「エロース」の出生にいたる系譜は両者で異なっている^{*28}。

^{*25} Patzner (1986), p. 46.

^{*26} クレメンス『雑録』6.26 = DK 9A4。七賢人の一人に数えられることもあるが (DL 1.41 = DK 9A1)、時代は他の候補者よりかなり下る。断片とその分析は、丸橋 (1996) 参照。

^{*27} 『敬虔について』137, 13 p. 61 Gomperz = DK 9B1。但し、1866 年刊 Theodor Gomperz 版での当該部は、Dirk Obbink の 1997 年版には収録されておらず、現在では再検討の余地があるようである。

^{*28} ヘシオドスとの相違については、丸橋 (1996)、106 頁参照。

【「テオクリトスへの古註」 13 1/2c Wendel = DK 9B3】

ἀμφιβάλλει, τίνος υἱὸν εἶπηι τὸν Ἑρωτα· Ἡσίοδος μὲν γὰρ Χάους καὶ Γῆς, Σιμωνίδης Ἄρεος καὶ Ἀφροδίτης, Ἀκουσίλαος Νυκτὸς καὶ Αἰθέρος.

〔テオンによれば〕エロースがだれの子とすべきかは定かでない。ヘシオドスはカオスとゲーの子だと言い、シモニデスはアレスとアフロディテの、アクシラオスはニュクスとアイテールの子だと言うように。

ヘシオドス『神統記』への言及は、私たちが見てきた 116–120 行を指し、シモニデスの言及は断片 43 D とされる^{*29}。ダマスキオスやテオンの報告が正しければ、アクシレオスは決してヘシオドスと同一のことを語ったわけではなく、「同意している」のは、エロースがカオスの後に生まれた非常に古い神々の一人である、という点に限られる。エロースとカオスの関係は、ヘシオドスのように直結するものではなく、中間段階があると、アクシレオスは考えていたのである。

そうである以上、両者の主張を同一化する Schanz–Burnet の改訂は、かえって元の内容を損なうことになる。

〔ヒッピ阿斯考慮の帰結〕

もしパイドロスがヒッピアスの『名言集』から適宜引用しながら語っているとすると、以下の点が推定される。

- (i) ここで紹介されるヘシオドス『神統記』、パルメニデスの断片 13、アクシレオスの説は、ヒッピアスが「愛（エロース）について」といった主題で集めた名言の一部であった。
- (ii) ヒッピ阿斯はおそらく年代の古い順に名言を収録していたのであろう。それに依拠するパイドロスの引用も、写本の読み通り、ヘシオドス、パルメニデス、アクシレオスの順であったと推定される。
- (iii) ヘシオドスの詩句 118–119 行を 2 行省略して引用したのは、おそらくヒッピ阿斯であり、プラトンとアリストテレスはその資料から引用したために、同じ 2 行を欠くと考えるのが自然である。そうであるとする、Hug が主張したように、プラトンとアリストテレス自身がこの 2 行を知らなかったということは帰結しない。
- (iv) パイドロスは引用詩句について、「ガイア」という古語を「ゲー」と言い換えるなど、パラフレイズを加えている。現代の註釈者から見ると冗長に見える部分ではあ

^{*29} Cf. Th. Bergk, *Poetae lyriici graeci* III⁴ 408.

るが、これが『名言集』から引用する作法であったと考えられる。

- (v) アクシレオスについて、ヒippiアスは独立の証言や引用を収めていたかもしれない。その場合、パイドロスはそれを簡単に「ヘシオドスに同意しています」とまとめたのであろうが、他の証言を参照する限り、両者の主張が完全に同じという意味ではなかったことが分かる。

4 パイドロスの演説と「引用」について

パイドロスは、彼とソクラテスが二人で対話する『パイドロス』篇では、リュシアスの弁論模擬作品を暗唱しようとしている「言論好き」の若者として登場している^{*30}。彼はまた『プロタゴラス』篇では、カリアスの邸でヒippiアスに熱心に従っている若者の一人として描かれている (315c)^{*31}。パイドロスは、弁論家、詩人、ソフィストら知識人の書き物を誦んじてはそれを披露したり、引用して知識をひけらかしたりするのが好きな文学青年であったのであろう。

アガトン祝勝会の饗宴では、通常の飲酒や音楽を楽しむのではなく（二日酔いのせいもあるが）、言論を交わすことを主とするという合意がなされる。そこで選ばれて主題となる「エロース讃美」は、言い出したエリュクシマコスによれば、実はパイドロスの強い提案であった (177a-d)。他の神々と異なりエロースにだけは、詩人やソフィストたちによって讃辞が作られていないことに、彼は憤慨していたという。それがきっかけとなって、当のパイドロスが「この言論の父」(πατήρ τοῦ λόγου, 177d) として、最初の演説者に指名されたのである。

エリュクシマコスの提案によって「エロース」がテーマに選ばれた時、パイドロスはおそらく既にその話題について事前に勉強していて、いつでも話せる準備を整えていたに違いない。その種本として、ヒippiアス『名言集』が用いられたことは十分に推測される。指名されたパイドロスは開口一番、そこから3名の知者の「名言」を権威として引用して、自分のスピーチを始めたのである。

パイドロスのこの語りは、まず詩句や文章を引用をして、それに適宜パラフレイズを加えるスタイルであったことが見て取られる。現代では冗長に感じられるが、古代において、それは自然な「引用」の作法であったのであろう。古い言い回しを説明したり、他との類似性を指摘したりしながら自分の主張を裏付けていく手法に、ヒippiアスが抜粋を編

^{*30} パイドロスの「言論好き」(φιλόλογος) という性格については、Ferrari (1987) 参照。

^{*31} Cf. Classen (1965), p. 177.

集した『名言集』は有用であった*32。そのような「知識」の披瀝は、本当の知者にとっては底の浅いものに見えたにしても、多くの教養人に好まれていたことが容易に想像できる。パイドロスの語りの聞き手たち、つまり宴会の参加者たちも、彼がヒippiアスに依拠していることを承知しながら、それに応答していく。一種の知的な遊戯がなされていたと考えられる。

アガトンは後に、自分の演説の中で、パイドロスの議論にコメントして、彼のヘシオドスとパルメニデス解釈が正しくないことを批判する。

【プラトン『饗宴』195b6-c3（アガトンの演説）】

ἐγὼ δὲ Φαίδρῳ πολλὰ ἄλλα ὁμολογῶν τοῦτο οὐχ ὁμολογῶ, ὥς Ἐρῶς Κρόνου καὶ Ἰαπετοῦ ἀρχαιότερός ἐστιν, ἀλλὰ φημι νεώτατον αὐτὸν εἶναι θεῶν καὶ αἰεὶ νέον, τὰ δὲ παλαιὰ πράγματα περὶ θεοῦς, ἃ Ἡσίοδος καὶ Παρμενίδης λέγουσιν, Ἀνάγκη καὶ οὐκ Ἑρωτι γεγονέναι, εἰ ἐκεῖνοι ἀληθῆ ἔλεγον·

ところがぼくは、他の多くの点ではパイドロスに同意するが、エロースがクロノスやイアペトスよりも古いという、この点に関しては同意しない。ぼくの主張では、エロースは神々のうちで最も若く、常に若いのであり、ヘシオドスやパルメニデスが語っているような、神々に関する昔の出来事は、もし彼らの語るところが真実であったとするなら、「必然（アナンケー）」によって生じたのであって、エロースによってではないのだから。

アガトンもヒippiアスの『名言集』を熟知しており、それを基にした応酬が交わされていると考えるのが自然であろう。彼らが共通の典拠においてくり広げる知的なやりとりは、178b-cのパイドロス引用では、写本の読みを維持することで、生き生きと読み取ることができる。

付論：『饗宴』の語り／書き物

以上、パイドロス演説の開始部にある先人の名言の引用を分析してきたが、この問題はより広く、『饗宴』という作品における語りの重層性の問題につながる。その複雑な構造は、これまで分析してきた議論に先立つ、パイドロス演説の導入部から明らかである。

*32 ヒippiアス『名言集』そのものはまったく残っていないが、引用が適宜加えられ、受け継がれていったものと推定される。そこからストバイオスらの抜粋集の伝統が作られたが、哲学においては、テオフラストス『自然学説の摘要』以来の「学説誌」に発展した。

【プラトン『饗宴』195a6-b1】

- a6 Πρῶτον μὲν γάρ, ὥσπερ λέγω, ἔφη Φαῖδρον ἀρξάμενον
 ἐνθένδε ποθὲν λέγειν, ὅτι μέγας θεὸς εἴη ὁ Ἔρως καὶ
 θαυμαστός ἐν ἀνθρώποις τε καὶ θεοῖς, πολλαχῇ μὲν καὶ ἄλλῃ,
 οὐχ ἥκιστα δὲ κατὰ τὴν γένεσιν. τὸ γὰρ ἐν τοῖς
 b1 πρεσβύτατον εἶναι τὸν θεὸν τίμιον, ἧ δ' ὅς, τεκμήριον δὲ τούτου·

最初に、私〔アポドロス〕が言っているように、パイドロスがどこかこのような所から始めて語った、と〔アリストデモスが〕言った。曰く、エロースは偉大な神であり、人間たちにおいても神々においても驚くべき者である。多くの点でもそうなのだが、とりわけ生まれについて少なからずそうなのである、と。

「というのは、この神がもっとも年長であることが、尊重されている理由であり、このことの証拠なのです」と彼〔パイドロス〕は言った。

この演説は、対話の外枠で昔の饗宴の模様を尋ねられたソクラテスの友人アポドロスが、その宴会に出席したアリストデモスが記憶して伝えてくれた言説を憶えていて語っているものである。それゆえ、文章は全体としてはアポドロスの一人称の語りであるが、その中にアリストデモスの語りがあり、また、演説内では各話者が一人称で語っている。最初の論者であったパイドロスの語りは、そのような間接話法から直接話法への移行部にあたる。

中世写本や近代初期の校訂版では、引用にあたって明示的な表記は必ずしもなされていなかったが（欄外に記号が付されることはあった^{*33}）、その後、現代校訂版にいたるテキスト表記では、引用符や改行などの工夫がこらされてきた。実際に口頭で語られた場合には、抑揚や間などで引用部がはっきりと分かったことであろうが、書かれた文字テキストではその区別が消えてしまう。

パイドロスがヒippiasを引用することでヘシオドスやパルメニデスを引用する重層構造は、ソフィストの言論活動とも関わる、プラトンによる「書き言葉」への問題提起、あるいは、挑戦であったとも考えられる。

^{*33} BW 両写本には、ヘシオドス引用部の欄外に > 印がある。パルメニデス引用部にはない。T 写本は手元の画像が不鮮明で確認できなかった。

参考文献

- Friedrich Ast (1821), *Platonis Opera quae extant*, III, Weidmann, Leipzig.
- Carolus Badham (1866), *Platonis Convivium*, Apud William et Norgate, London, Fr. Frommann, Jena.
- Johann Georg Baiter, Johann Kaspar von Orelli, & August Wilhelm Winckelmann (1841), *Platonis Opera Omnia*, XVII, *Platonis Symposium*, Meyeri & Zelleri, Zürich.
- Immanuel Bekker (1817), *Platonis Dialogi*, II.2, Berlin.
- Luc Brisson (1998), *Platon, Le Banquet*, presentation et traduction inédite, GF Flammarion, Paris.
- John Burnet (1901¹, 1910²), *Platonis Opera*, II, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford Classical Texts, Clarendon Press, Oxford.
- Robert Gregg Bury (1909¹, 1932²), *The Symposium of Plato*, edited with introduction, critical notes, and commentary, W. Heffer, Cambridge.
- Émile Chambry (1958), *Platon, Œuvres complètes*, III, Classique Garnier, Paris.
- Carl Joachim Classen (1965), “Bemerkungen zu zwei griechischen ‘Philosophier-historikern’”, *Philologus* 109, 175–178.
- Kenneth Dover (1980), *Plato, Symposium*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Giovanni Remo Francesco Ferrari (1987), *Listening to the Cicadas: A Study of Plato’s Phaedrus*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Carl Friedrich Hermann (1851), *Platonis Dialogi secundum Thrasylli tetralogias dispositi*, II, Teubner, Leipzig.
- Christian Gottlob Heyne (1781), *Abhandlung und Auszüge der königlichen Akademie der Inschriften und der schönen Wissenschaften zu Paris: in Klassen gebracht/ 1. Das griechische Alterthum*, Weidmanns Erben.
- Alexander Hommel (1834), *Platonis Convivium*, recensuit, emendavit et illustravit, Leipzig.
- Arnold Hug (1884), *Platons Symposion*, 2 Aufl., Teubner, Leipzig.
- Otto Jahn (1864), *Platonis Symposium in usum scholarum*, Apud A. Marcum, Bonn.
- Walter von Kienle (1961), *Die Berichte über die Sukzessionen der Philosophen in der hellenistischen und spätantiken Literatur*, Freie Universität, Berlin.
- Walter Rangeley Maitland Lamb (1925), *Plato III, Symposium*, Loeb Classical Library, Harvard University Press, Cambridge Mass.

- Jaap Mansfeld ([1983]/1990), “*Cratylus* 402a–c: Plato or Hippias?”, L. Rossetti ed., *Atti del Symposium Heracliteum 1981*, I, Edi. del Ateneo, Roma, 43–55; repr. in his *Studies in the Historiography of Greek Philosophy*, Assen / Maastricht, 84–96.
- Jaap Mansfeld ([1986]/1990), “Aristotle, Plato, and the Preplatonic Doxography and Chronography”, G. Cambiano ed., *Storiographia e dossografia nella filosofia antica*, Torino, 1986, 1–59; repr. in his *Studies in the Historiography of Greek Philosophy*, Assen / Maastricht, 22–83.
- Andreas Patzer (1986), *Der Sophist Hippias als Philosophiehistoriker*. Alber, Freiburg / München.
- Georg Ferdinand Rettig (1875), *Platonis Symposium in usum studiosae iuventutis et scholarum*, Libraria Orphantotrophei, Halis.
- Léon Robin (1929¹, 1958⁶), *Platon, Œuvres complètes*, IV.2, *Le Banquet*, texte établi et traduit, Société d’édition “Les Belles Lettres”, Paris.
- Christopher J. Rowe (1998), *Plato: Symposium*, edited with an introduction, translation and commentary, Aris & Phillips, Warminster.
- Martin Schanz (1882), *Platonis Opera quae feruntur omnia*, 5, *Symposium, Phaedrus*, ad codices denuo collatos, Leipzig.
- Bruno Snell (1944), “Die Nachrichten über die Lehren des Thales und die Anfänge der griechischen Philosophie- und Literaturgeschichte”, *Philologus* 96, 170–182.
- Gottfried Stallbaum (1836), *Platonis Opera Omnia*, I.3, Gothae et Erfordiae.
- Sebastiano Timpanaro (2005), *The Genesis of Lachmann’s Method*, edited and translated by Glenn W. Most, University of Chicago Press, Chicago.
- Paul Vicaire (1989), *Platon, Œuvres complètes*, IV.2, *Le Banquet*, texte établi et traduit, “Les Belles Lettres”, Paris.
- Martin Litchfield West (1966), *Hesiod, Theogony*, edited with prolegomena and commentary, Clarendon Press, Oxford.
- Friedrich August Wolf (1782), *Platons Gastmahl, Ein Dialog*, Leipzig.

久保勉・阿部次郎 (1934)、プラトン『饗宴』、岩波書店。

久保勉 (1952)、プラトン『饗宴』、岩波文庫。

鈴木照雄 (1966)、「饗宴」、『世界の名著 プラトン I』、中央公論社。

鈴木照雄 (1974)、「饗宴」、『プラトン全集』5、岩波書店。

朴一功 (2007)、『プラトン 饗宴／パイドン』、西洋古典叢書、京都大学学術出版会。

丸橋裕（1996）、「アクウシラオス」（翻訳、註）、『ソクラテス以前哲学者断片集』I、岩波書店。

森進一（1963）、「饗宴」、『プラトン名著集』、新潮社。

山本光雄（1952）、『プラトン 饗宴』、角川文庫。

山本光雄（1973）、「饗宴」、『プラトン全集』3、角川書店。

（慶應義塾大学）

アリストテレス『弁論術』 1355a23: δι' αὐτῶν

——弁論術の有用性について——

堀尾耕一

アリストテレスは『弁論術』 1.1: 1355a21 以下において、この術の有用性を四つの理由をあげて説くが、このうち第一の論点についてはテキストの読みに議論の余地がある。この箇所ではまず「本当のことおよび正しいことは、本来的にそれらの反対のことにまさる」ことが語られたのち、「ゆえに判定がしかるべく下されない場合、必ずや δι' αὐτῶν ἡττᾶσθαι という事態が生じるが、それは非難されるべきことだ」という。この αὐτῶν が文法的に何を指示するかという問題は、『弁論術』という著作全体の性格を評価するうえで少なからぬ意味合いを持つだろう。すなわち、写本の δι' αὐτῶν を指示代名詞として読めば、本当のことおよび正しいことが「それらの反対によって」負かされること、となるはずだが、これを再帰的に δι' αὐτῶν あるいは δι' αὐτὸν と読むならば、訴訟当事者たちが「自分のせいで」敗北すること、と理解される。はたして著者は、いかなる事態を非難されるべきと考えているのか。そして弁論術は、いかなる意味で役に立つというのか。本稿では、すでにこれまでも議論が重ねられてきた同箇所の解釈について再考する^{*1}。

I

写本の読みは次のとおりである。

χρήσιμος δέ ἐστιν ἡ ῥητορικὴ διὰ τε τὸ φύσει εἶναι κρείττω τὰ ληθῆ καὶ τὰ δίκαια τῶν ἐναντίων, ὥστε ἐὰν μὴ κατὰ τὸ προσήκον αἱ κρίσεις γίνωνται, ἀνάγκη δι' αὐτῶν ἡττᾶσθαι, τοῦτο δ' ἐστὶν ἄξιον ἐπιτιμῆσεως. ἔτι δὲ ...

[δι' αὐτῶν Bywater: δι' αὐτὸν: Kassel]

必ずしも見通しやすいとはいえない文章全体の構造について、まずは簡単に確認しておこう。χρήσιμος ... ἡ ῥητορικὴ 「弁論術は有用である」ことが、この一節の眼目である^{*2}。

^{*1} この論考は、2011 年 10 月 15 日に開催された第 10 回フィロロギカ研究集会（東京大学駒場キャンパス）での口頭発表に基づく。当日の質問者および当誌査読者の方々から多くの示唆を頂戴した。記して感謝申し上げたい。

^{*2} 有用性については、『トポス論』 1.2: 101a25 および『ソフィスト的論駁について』 16: 175a5 においても、それぞれの術に関して述べられている。

διὰ τό + 不定法によってその理由が挙げられるが、διὰ τε の τε は二番目以下の理由を導入する ἐπὶ δέ の δέ に対応するだろう^{*3}。τὸ φύσει ... τῶν ἐναντίων 「本当のことおよび正しいことは本来的にその反対よりも強いということ」。ここでは κρείττω という語が選択されていることに留意したい。ἀμείνω といった表現よりも、より直接的に「強い」ないしは「勝る」という意味が前面に出てくるだろう。また「反対のもの」τὰναντία とは、けっして漠然としたものではなく、はっきり τάληθῆ の反対の τὰ ψεύδη、および τὰ δίκαια の反対の τὰδίκαια をまとめて言い換えたもの、と見るべきだろう^{*4}。これを受けて、ὥστε 以下が結果として言われる。ἐὰν μὴ ... ἡττᾶσθαι は普遍的条件文 (general condition) と解されよう。すなわち前文の条件のもとで、いつも後文で述べられることが生じる、という意味にとれる。κατὰ τὸ προσήκον 「しかるべく」とは、真実や正義に即した仕方で、というのに等しい。「判定がしかるべく下されない場合、いつも必ず——何かが何かによって——負かされることになる」。τοῦτο はそうした事態を指し、「そのことは非難されるべきだ」と結ばれる。

問題はやはり、δι' αὐτῶν ἡττᾶσθαι の理解に集約されるだろう。なお、写本は一致して δι' αὐτῶν を伝えるが、一般に氣息記号については、中世写本の情報は確たる根拠とはなりえない。またアリストテレスの語法として、意味内容のうえで再帰的な場合にも、氣息を帯びない αὐτός の斜格形が用いられる例が多く確認される^{*5}。したがってこの際、テキストの印字について αὐτῶν とするか αὐτῶν とするかという点は、第一義的な問題とはならない。

2

この δι' αὐτῶν ἡττᾶσθαι に関してこれまでに提示されてきた文法的説明を整理するならば、次のようになろう。

(A) 写本の αὐτῶν を指示代名詞〈中性・複数・属格〉とし、「本当のことおよび正しいことの反対」と理解する。この場合、ἡττᾶσθαι は〈受動〉、その主語は「本当のことおよび正しいこと」となる。これは 19 世紀の Spengel が示している解釈であるが、近年では Grimaldi の注釈書がこの読みを支持しているほか、Kennedy による英訳、および戸塚七郎による和訳もこれに従っている。この解釈の文法的な難点は、被指示語のうちひとつの候補とも

^{*3} Cf. J. D. Denniston, *The Greek Particles*, 2nd ed., p. 513.6ii; Kassel (2), app.cr.

^{*4} たとえば Pl. *Cri.* 47c9: περὶ τῶν δικαίων καὶ ἀδίκων καὶ αἰσχυρῶν καὶ καλῶν καὶ ἀγαθῶν καὶ κακῶν およびその言い換えとしての 48a9: περὶ τῶν δικαίων καὶ καλῶν καὶ ἀγαθῶν καὶ τῶν ἐναντίων が参考になろう。

^{*5} Cf. Cope, p. 23.

なりうる αἱ κρίσεις を跨ぐかたちで、αὐτῶν が τῶν ἐναντίων という中性名詞を指示するのが、やや迂遠に感じられることであろうか。

(B) 写本に修正を施して δι' αὐτῶν とする読みは Bywater らによって提唱され、Ross による OCT はこれを採用している^{*6}。また Cope はその注釈書において、テキストの修正こそ求めないものの、内容的にこの語句を再帰的に理解しているほか、Budé 版の Dufaut も同じ解釈をとる^{*7}。この場合、αὐτῶν の文法的な性が〈中性〉ではなく〈男性〉と解される点が重要であり、「自分たち自身によって」敗北する、と読む。すると ἡττᾶσθαι の主語は、結果として想定される「訴訟当事者たち」ということになるが、直近の箇所ですうした意味の〈男性・複数〉名詞は見あたらない。この唐突さには、やはり少なからず難点があると言うべきだろう。なおこの解釈は、すでに指摘したとおり、写本にある δι' αὐτῶν の変更を必ずしも要求するものではない^{*8}。

(C) 近年の定本とされる Kassel は δι' αὐτὸν という新たな修正読みを採用しているが、これはディオニュシオス『アンマイオス宛書簡(第1)』の写本が伝える δι' αὐτὸν を根拠とし、氣息記号に変更を加えたものである^{*9}。いずれにせよこの場合には形として〈男性・単数・対格〉が確定するが、〈男性〉をとる以上、この αὐτὸν は「人」を指すことになり、同時にその不特定の「ひと」が ἡττᾶσθαι の主語と解される。この場合の「ひと」とは、やはり直近で話題にのぼっていなかった「訴訟当事者」のようなものを想定することになり、実質的には (B) の理解と立場を共有することになる。ただ、αὐτὸν が単数である分、δι' αὐτὸν ἡττᾶσθαι が全体として慣用句の様相を帯び、〈中動〉的に「自分のせいで敗北する」と理解しやすくなるだろう^{*10}。近年では Rapp による注釈および独語訳が全面的にこの解釈を支持しているほか、Chiron の仏語訳も、(A) の読みへの未練を残しつつも、この線で翻訳している^{*11}。

^{*6} この修正は、すでに Dobree によって提案されていたようである。Cf. Spengel, vol. 2, p. 26.

^{*7} このほか M. Van Straaten & G. J. De Vries, 'Some Notes on the Rhetoric of Aristotle', *Mnemosyne*, 17, 1964 も同様の立場をとる。

^{*8} 逆に、Bekker や Roemer のように δι' αὐτῶν と写本の読みをそのまま印刷していても、この語句をどう理解しているのかは判然としない。

^{*9} Dion. Hal. *Ammon.* 1, 6. この著作では『弁論術』1355a20–29 が逐語的に引用されている。なお Usener–Radermacher 版はすでに δι' αὐτὸν という修正読みを提案している。

^{*10} Cf. Kassel (1), p. 121.

^{*11} Cf. Chiron, p. 102; p. 120 n. 26.

この際、文法的にあるいは問題となるかもしれないのは、前置詞 διὰ が属格をとるか対格をとるか、という違いである。いずれも「～によって」と訳しうるが、これについてたとえば Smyth では、属格支配の場合、ある意図された行為の直接的な行為者ないしは媒体を表すのに対し、対格支配では、当事者の意思の範囲を超えた行為者ないしは媒体を示す、という区別が設けられている^{*12}。ただし、ほとんど差別化できない場合もある、とも^{*13}。とりわけ再帰的な表現については、δι' ἐαυτοῦ および δι' ἐαυτόν のいずれも多く用例を見出しうるため、この場合に関しては決定的な指標とはなりえないことを確認しておきたい^{*14}。

3

ここでさらに、現代の注釈書ではあまり取り上げられることのない、近世以前の解釈について振り返っておくのも無駄ではあるまい。Spengel はこの箇所の理解に際して、先行する二つの根拠を示している^{*15}。ひとつはギリシア語写本の古注で、そこには δι' αὐτῶν について、διὰ τῶν ἐναντίων ἢ τοῦ ψευδοῦς ἢ τοῦ ἀδίκου という説明が見られる。「その反対のもの、すなわち偽りなり不正なりによって」と読めるが、これは明確に (A) の理解を示していよう。

もうひとつは中世のラテン語訳で、メルベケのギョームが 13 世紀に翻訳したものである^{*16}。当該箇所の訳文は、もともと *necesse per ipsa vinci* となっていた。このままでは ipsa が何を指すのか、にわかに判然としないが、ラテン語の場合 ipsa は形として〈中性・複数・対格〉が確定し、少なくとも〈人〉とは取れない。興味深いのは、現存するもうひとつの無名氏訳も *necesse per se ipsa diminui* と似たような訳文になっている事実である^{*17}。両者とも δι' αὐτῶν と記されたテキストに依拠していたと推察されよう^{*18}。ただ、後者は

^{*12} H. W. Smyth, *Greek Grammar* §1685, 1d; 2d.

^{*13} Cf. Dem. 18.34: δι' ὧν ἅπαντ' ἀπώλετο; 18.35: δι' οὓς ἅπαντ' ἀπώλετο.

^{*14} 以上のほかに、たとえば Freese (Loeb), 'if decisions are improperly made, they must owe their defeat to their own advocates'. おそらく山本光雄の和訳はこれに従っている。この解釈にどのような文法的説明をほどこしうるのか、筆者には理解できない。

^{*15} Spengel, vol. 2. p. 26.

^{*16} Tr. Lat. (Guillelmus de Moerbeke): utilis autem est rhetorica propterea quod vera et iusta sunt natura meliora contrariis. quare si non secundum conveniens iudicia fiant, **necesse per ipsa vinci**. hoc autem est dignum increpatione. [*necesse contraria per ipsa vinci Victorius*] なお Spengel においては、このギョーム訳が *translatio vetusta* と呼ばれる。

^{*17} Tr. Lat. (anonyma *sive* vetus): utilis autem est rhetorica propter id quod meliora sunt natura vera et iusta contrariis, quare si utique non ad conveniens iudicia fiant, **necesse per se ipsa diminui**, hoc autem dignum est increpatione.

^{*18} この二つのラテン語訳が示す読みは、いずれも基本的にギリシア語の写本伝承と独立した系統に属するものではない。Cf. Schneider, pp. lii–liii.

per se ipsa と、より踏み込んだ解釈を示している。この se は先行する vera et iusta すなわち「本当のことおよび正しいこと」を指示するほかないのだが、〈再帰〉かつ〈中性〉という理解は、上記 (A) ～ (C) のいずれにも該当しない (D) と呼ぶべきものである。おそらくはギョーム訳も含め、ラテン中世においてはこの理解がなされていた可能性が高いが、それにしても「本当のことおよび正しいことが自ずから敗北する」とは、はたしていかなる事態なのか。「読まれ方の歴史」としてはたいへん興味深い事例であるとはいえ、当該箇所ギリシア語理解としてこの読みを擁護するのは、いささか難しいと思われる。

おそらくはこうした解釈の余地を斥けるために、16 世紀の Pietro Vettori はギョームのラテン語訳に *necesse contraria per ipsa vinci* と整形をほどこし、「その反対のものによって負かされるのが必然である」と読ませている^{*19}。そして Spengel はこの Vettori に示唆を受けるかたちで、ギリシア語古注の情報と併せて (A) の解釈を確認したのだった。

4

以上のとおり、『弁論術』を伝える中世写本は一致して δι' αὐτῶν を読んでおり、かつ、その理解も近世に至るまで〈中性・複数〉で一貫していたといえる。これに対して、19 世紀になって内容理解の面から提案されてきた (B) の読みは、ディオニュシオス写本という新たな根拠を伴う (C) によってむしろ発展的に継承され、今日の有力な立場を形成している。これまでに確認したとおり、それぞれの読みに関する写本伝承および文法的説明にはいずれも相応の根拠があり、それ自体で決定的な力を持つには至らないと評すべきだろう^{*20}。そこで、求められるのは著作全体の文脈に即した理解ということになるが、問題は、ἡττᾶσθαι の主語が「ひと」なのか「こと」なのか、この選択に尽きている。

20 世紀の主要な注釈者である Grimaldi は、Vettori–Spengel による (A) の理解を支持したうえで、当該箇所に「弁論術の有用性についての、目立って力強い宣言」を認める^{*21}。すなわち、弁論術は真実と正義を守るためにこそ役立つものだ、と読み解くのである。そして同時に、19 世紀後半からたびたび主張されてきた (B) もしくは形を変えた (C) の読みを強く牽制する。後者はいずれも「訴訟当事者が自分のせいで敗北をみる」と解釈す

^{*19} この読みそのものは Vettori による写本欄外への書き込みに見出される。Cf. Spengel, vol. I, p. 181; P. D. Brandes, *A History of Aristotle's Rhetoric*, Metuchen, 1989, pp. 57–69. また彼の注釈書においても、これと同趣旨の解釈が示されている。Cf. Victorius, p. 19.

^{*20} じっさい、ディオニュシオスの段階ですでに (C) の理解がなされていたことを否定する根拠はない。その一方で、アラビア語訳の伝統は δι' αὐτῶν を反映した読みを示し、同時に ἡττᾶσθαι の主語を不特定の「ひと」と解しているようである（東京大学高橋英海氏のご教示による）。Cf. M. C. Lyons, ed., *Aristotle's Ars Rhetorica: The Arabic Version*. Cambridge, 1982.

^{*21} Grimaldi, p. 28.

るわけだが、これではアリストテレスによるきわめて本質的な言説が、はなはだ陳腐なもの (sheer triviality) に成り下がってしまう、と彼は指摘した。

これに対して、Kassel の提案した (C) の読みを擁護する Rapp は、Grimaldi によるこの批判は当たっていないと反論する^{*22}。そもそも「本当のことや正しいこと」が本来的に強いのであるなら、どうして負かされるのが必然でありえようか^{*23}。それらは現実の訴訟や議会においてもしかるべき判定を導くに足るほど、本来的に「強い」はずなのである。しかるにそれが貫徹されないのは、当然ながら当事者における話術の欠如が原因となっているわけで、それこそが非難に値するのだろう。こうした事態を回避するために弁論術は役立つのであり、これを問題の矮小化などと呼ぶのは的外れである、と。したがってこの解釈に従うならば、弁論術の有用性とは、およそこの術の現実的な側面に表れたそれである、ということになろう。

しかしここで、アリストテレスの「技術」に関する規定を思い起こしてみたい。「弁論術の仕事は説得することではなく、それぞれの問題について、そこに具わる説得的なものを考察すること」にあったはずだ^{*24}。しかるべき判定を導くことは、すでに技術それ自体の役割を超えていよう。また、たとえばソクラテス裁判を考えた場合はどうなるだろう。あの一件は「正しいこと」が「その反対によって」凌駕された典型ではなかったのか。それとも「係争当事者」が「自分のせいで」敗訴した、非難されるべき見本なのだろうか。現に Rapp はそのように理解しているようだが、それこそ問題を trivial なものに矮小化してはいないだろうか^{*25}。Grimaldi の指摘は、やはり当を得たものと言わざるをえない。

5

それにしても、本来的に「強い」はずの「本当のことおよび正しいこと」が負かされる、それがいかなる意味で ἀνάγκη と言われるのか。ここで、当該箇所が普遍的条件文 (general condition) の形式をとっていたことに注意を促したい。言い換えれば、これは前文・後文ともに直説法を用いる論理的条件文 (logical condition) ではない、ということである。後者のタイプであれば、たとえば εἰ τοῦτό ἐστι τὸ καλόν, ἀνάγκη τὴν ἀρετὴν καλὸν εἶναι 「美しいものがそのようなものであるとすれば、必然的に、徳は美しいものということになる^{*26}」のように、前文から論理的に導かれる帰結として後文が語られることにな

^{*22} Rapp, pp. 90–91.

^{*23} これは Cope 以来、(A) の読みを批判する立場から絶えず提示されてきた疑問である。

^{*24} *Rh.* 1.1: 1355b10. Cf. *Top.* 1.3: 101b5.

^{*25} Rapp, p. 83.

^{*26} *Rh.* 1.9: 1366a34.

ろう。

これに対して、前文に *ἐάν* + 接続法、後文に直説法現在を用いる普遍的条件文では、前文に提示された条件のもと、いつも後文の内容が生じる、ということが表示されるだけで、前文と後文との間に必ずしも論理的な必然性は介在しない。たとえばプラトンからの用例で、*ἐάν γάρ καὶ πάνυ εὐφυῆς ᾗ καὶ πόρρω τῆς ἡλικίας φιλοσοφῇ, ἀνάγκη πάντων ἄπειρον γεγονέναι ἐστὶν ὧν χρὴ ἔμπειρον εἶναι τὸν μέλλοντα καλὸν καγαθὸν καὶ εὐδόκιμον ἔσεσθαι ἄνδρα*。「すぐれた素質に恵まれていながら、いい歳を過ぎてもなお哲学をやっている場合、必ずや、いずれ立派な人士となって名を挙げようという者が心得ておくべきあらゆることに、疎くなってしまうものだ^{*27}」。この場合の *ἀνάγκη* は前文から導かれる必然的な帰結ないしは原因をいうものではなく、前文の条件のもと、「きまって」後文の事態が生じる、ということを表示するだろう。

当該箇所の *ἀνάγκη* という言葉を問題視した Cope をはじめとする論者は、いずれもこの一文を論理的な条件文と見なして議論を立てているように思われる。が、それが妥当しないことは、以上の説明からも確認されるのではないか。ここでは「しかるべき判定が下されない」ことの必然的な原因が説かれるわけではなく、その条件下で *きま*って起こる事柄が語られているはずなのであり、それはつまり、「本当のことや正しいことが負かされる」という事態に相違ないのである。

6

最後にもうひとつ、これまでに指摘されることのなかった論点として、この箇所に見られる *κρείττω* と *ἡττᾶσθαι* とが、いわば一種の縁語関係にあることに注目しておきたい。「より強いものが負かされる」、そこで暗に対比されているのは、*τὸν ἡττω λόγον κρείττω ποιεῖν* すなわち「弱い議論を強くする」という、いわゆるソフィスト的な話術のあり方ではなかったろうか。

前 5 世紀後半のアテナイを席捲した「弱い議論を強くする」という言論の流儀については、すでにアリストファネスが『雲』において痛烈に揶揄していた。

εἶναι παρ' αὐτοῖς φασιν ἄμφω τῷ λόγῳ,
τὸν κρείττον', ὅστις ἐστί, καὶ τὸν ἡττονα.
τούτοιον τὸν ἕτερον τοῖν λόγοιν, τὸν ἡττονα,
νικᾶν λέγοντά φασι τὰδικώτερα.

Ar. *Nub.* 1112–1115.

「聞くところでは、彼らのあいだでは両方の論、つまり、何にせよ強い論と弱い論とい

^{*27} Pl. *Grg.* 484c8.

うのがあるのだそう。このうちの片っぽう、弱い論のほうは、正しくないことを語っておきながら、勝ちをおさめるのだとか」。

さらに作品の半ばでは、強いほうと弱いほう、つまりは正論と邪論とが言い争うという場面がある^{*28}。その際、邪論は「弱いやつ」 ἥττων と呼ばれながらも、「俺より強い κρείττων とおそくお前を負かしてやる」と正論にむかって啖呵を切る。こうしたやりとりが成り立つのは、正論のほうが本来的に「より強い」ことが前提とされているからに違いない。そして「弱い議論を強くする」とは、逆に言えば、もともと「強い」はずの正論が負かされることを意味するだろう^{*29}。

アリストテレス自身、『弁論術』第2巻24章において、こうした言論の流儀をコラクスの名に関連づけて批判している^{*30}。ここでは、著作全体の核心をなす概念である「蓋然なこと」 εἰκός と見せかけのそれとを峻別する必要性が強調されていた。そして「いかにもありそうだから、ありそうにない」といった無際限な論じ方こそが、じつは「弱い議論を強くする」ことにほかならないと断じられ、さらにはプロタゴラスの公言につきまとういかがわしさもまた、ここに起因するのだと指摘される。こうした「見せかけの」説得術を斥けることは、アリストテレスにとって、あるべき弁論術を論じるうえで不可欠の作業であった。そしてそれは同時に、著作冒頭部において彼がこの技術の有用性を語る際の、ひとつの重要な契機でもあった、と見てよいのではないか。

結

もういちど当該テキストに目を移してみよう。現実の裁判や議会の場においてしかるべき判断が下されない場合、必ずや、本来は「強い」はずのものが「負かされる」という状況が生じることになる。それはすなわち「弱い」はずのものが「強い」ものを凌駕することにはかならず、そうした事態こそが非難に値する、と著者は言っているのだろう。まさしく ἥττωσθαι の主語が κρείττων であるところに文章の肝が存するのであり、当該箇所はこの把握を基礎として解釈されるべきものと思われる。写本どおり δι' αὐτῶν を読み、(A) の理解を支持する所以である。

本来的に強いはずの「本当のことおよび正しいこと」が「それらの反対」すなわち偽りや不正によって負かされる、この顛倒した事態を遠ざけるためにこそ、弁論術は役に立

^{*28} Ar. Nub. 889f. Cf. K. J. Dover, *Aristophanes, Clouds*, Oxford, 1968, pp. lvii–lviii.

^{*29} 周知のとおり、皮肉にもこの芝居がもとで「弱い議論を強くする」とはソクラテスの営みに対する世間の風評となった。Pl. Ap. 18b.

^{*30} Rh. 2.24: 1402a23.

つ。アリストテレスの『弁論術』という著作全体の基調をなすこの思想は、「弁論術はつねに、正しいことのために用いねばならぬ^{*31}」というプラトンの見解とも、むしろ立場を共有するに違いないのである。

参考文献

- I. Bekker, *Aristotelis Opera*, vol. 2, Berlin, 1831.
 P. Chiron, *Aristote, Rhétorique*, Paris, 2007.
 E. M. Cope–J. E. Sandys, *The Rhetoric of Aristotle, with a Commentary*, vol. 1, Cambridge, 1877.
 M. Dufaut, *Aristote, Rhétorique*, Livre 1, (Budé) Paris, 1931.
 J. H. Freese, *The “Art” of Rhetoric*, (Loeb) London, 1926.
 W. M. A. Grimaldi, *Aristotle, Rhetoric I: A Commentary*, New York, 1980.
 R. Kassel (1), *Der Text der aristotelischen Rhetorik*, Berlin, 1971.
 R. Kassel (2), *Aristotelis Ars Rhetorica*, Berlin, 1976.
 G. A. Kennedy, *Aristotle, On Rhetoric*, Oxford, 1991.
 C. Rapp, *Aristoteles Rhetorik*, Berlin, 2002.
 A. Roemer, *Aristotelis Ars Rhetorica*, (Teubner) Leipzig, 1898.
 W. D. Ross, *Aristotelis Ars Rhetorica*, (OCT) Oxford, 1959.
 B. Schneider, *Aristoteles Latinus XXXI 1–2, Rhetorica*, Leiden, 1978.
 L. Spengel, *Aristotelis Ars Rhetorica, cum adnotatione*, vols. 1 & 2. Leipzig, 1867.
 P. Victorius, *Commentarii in tres libros Aristotelis De arte dicendi*, Firenze, 1548.

(一橋大学)

^{*31} Pl. *Grg.* 527c3: τῇ ῥητορικῇ οὕτω χρητέον, ἐπὶ τὸ δίκαιον ἀεί.

英雄叙事詩を演じる英雄： *Iliad* 9.182–95

安西眞

I

*Il*¹ 9 巻の使節の場面は、この叙事詩を理解する上で要となる箇所である。この巻は私たちに与える難問²を含む。Ak が戦場復帰を求める使節たちの熱心な要請を断る真意は何かという問題である。この問題をどう理解するかは *Il* をどう理解するかということとほぼ等価であるほどの重みを持っていると筆者も考えている。この難問に関して我々は解答を得ていない³。が D. Cairns⁴ は現在この問題を最も熱心に追求しているひとりであるが、彼の現在のところの結論は、Ak の使節たちの要請に対する反応は “a big mistake” であるということに尽きるであろう。英雄の決断を「過ち」と断じることができるような *Il* 理解の視点があり得ることは私も認める。しかし、それは（最後の口承）詩人が指定している *Il* 理解の角度ではない。それとは異なる指定がタイトルにあげた箇所にあることを指摘することが本稿のひとつの目的である。

また、彼の力作である “Ate in the Homeric Epic” が提示する *Il* の根本構造に関する試案とも言うべき提案についても本稿は、それに触発された形で *Il* の構造を論じる。彼によ

¹ 以下、次の略号を使用する：ホメーロス = H；ヘーシオドス = Hes；『イーリアス』 = *Il*；『オデュッセイア』 = *Od*；アキレウス = Ak；オデュッセウス = Od；ヘクトール = Hek；パトロクロス = Pat；アガメムノーン = Ag；ネストール = Ne；ポイニクス = Ph；アイアース = Ai；アンドロマケ = Andr。なお、*Il* 本文の巻行指示に際しては 9.182 という形で、*Od* については *Od.* 1.100 という形で行なう。また、複数回引用される文献については、繰り返される時の略号の形に下線を施してある。

² ここで、「私たちに与える難問」という言い方をするのはなぜか。それは、聞き手を選ばない上演ものの文芸であった *Il* の場合、ここでの彼の拒否は、聞き手の大多数にとって極めて了解の容易なものだったはずだ、と筆者は信じるからである。多分、最後の詩人と時代をギリシア社会のある時代を共有した直接の聴衆には理解が容易であったが、共有しない最後の詩人以降のギリシア人を含むすべての人間には難問である。そういう意味で「私たちに与える難問」を使っている。

³ 安西眞、「アキレウスの盾の描写」、『フィロロギカ』V, 2010, 46–68、特に第4章参照。

⁴ D. Cairns, ‘Ate in the Homeric Poems’, *Papers of the Langford Latin Seminar* 15 (2012) 1–52 [Cairns 2012]: id., ‘Ransom and Revenge in the *Iliad*’, in S. Lambert (ed.), *Sociable Man: Essays on Ancient Greek Social Behaviour in Honour of N. R. F. Fisher*, Swansea 2011, 87–116 [Cairns 2011]: D. Cairns and W. Allan, ‘Conflict and Community in the *Iliad*’ in N. Fisher and H. van Wees (eds.), *Competition in the Ancient World*, Swansea 2011, 113–46. なお、“a big mistake” という、英雄の反応に対する評価は、彼と私との個人的な会話の中で使われた言葉であって、こういうことには不正の匂いが全くしないわけではないので言い訳を加えておきたい。上に挙げた3論文のいずれを読んでも、Ak のこの巻での決断をそのように読むべきだ、という氏の主張は鮮明である。“a big mistake” という標語は、極めて分かりやすく、極めて印象的なものであったので使った。

れば、*Il* は、Ag–Ak–Pat–Hek による 4 つの “mistake = ate” の連鎖という主構造の上に立っている、ということになる^{*5}。確かに彼が明らかにした 4 つの判断の過ちの連鎖という案は、可能な構造理解である^{*6}。しかしこの連鎖は確かに存在するが *Il* の主構造ではない^{*7}。彼の見つけた構造は、竜骨に付加される副構造として捉えられるべきである。竜骨は Schadewaldt を受け継いで修正発展させることによって得られると私は考える。その竜骨の輪郭は *Il* 9.182–95 を正しく全体の中に位置づけることによって得られるというのが私の見通しである。「なぜ Ak は復帰要請を拒否したか」という恐らくはこの構造と一体不離の問題はここでは正面の問題とはしない。本誌に許された規模の論文ではそれを十分に論じることは不可能であるからだ。

本稿で扱う素材は Ak と使節たちのやり取りに密接に関係する。だがそこに Ak の口をついて出るあの爆発的な言葉そのものが含まれていない為か、研究者たちの注目を引くことが比較的稀であった。使者たちが Ak のテントに到着し、*Il* の行方と構造を決めるやり取りが使者たちと Ak の間で始まる前に次のような小さな場面が挟まれている。

2

τὼ δὲ βάτην παρὰ θῖνα πολυφλοίσβοιο θαλάσσης,
 πολλὰ μάλ' εὐχομένω γαιόχῳ ἐννοσιγαίῳ
 ῥηιδίως πεπιθεῖν μεγάλας φρένας Αἰακίδαο.
 Μυρμιδόνων δ' ἐπὶ τε κλισίας καὶ νῆας ἰκέσθην. 185
 τὸν δ' εὖρον φρένα τερπόμενον φόρμιγγι λιγείῃ,
 καλῇ, δαιδαλέῃ, ἐπὶ δ' ἀργύρεον ζυγὸν ᾗεν
 τὴν ἄρετ' ἐξ ἐνάρων πόλιν Ἡετίωνος ὀλέσας·
 τῇ ὅ γε θυμὸν ἔτερπεν, αἶδε δ' ἄρα κλέα ἀνδρῶν.
 Πάτροκλος δέ οἱ οἶος ἐναντίος ᾗστο σιωπῇ 190
 δέγμενος Αἰακίδαην, ὅποτε λήξειεν αἰδῶν.
 τὼ δὲ βάτην προτέρω, ἡγείτο δὲ δῖος Ὀδυσσεύς,
 στὰν δὲ πρόσθ' αὐτοῖο· ταφὼν δ' ἀνόρουσεν Ἀχιλλεὺς
 αὐτῇ σὺν φόρμιγγι, λιπὼν ἔδος, ἐνθα θάασσεν.

^{*5} もしかしたら、彼の意図は、Schadewaldt (W. Schadewaldt, *Iliasstudien*, Berlin 1966 [Schadewaldt 1966]) の構造理解の為の路線（後述）が、第 9 巻の拒絶をうまく説明できないのに業を煮やして、新しい構造理解を模索していることを示唆しているのかも知れない。

^{*6} ただし、Cairns は 9 巻の復帰要請拒否を Ak 自身も過ちと認めていると理解しているが (Cairns, 2012, 16 et passim)、私は懐疑的である。16 巻の Pat を自分の代替として戦場に出したことに對しては、Ak は明らかに自らの過ちを認めている (18.98–106) けれども。

^{*7} 彼の理解の根本的なところには、Adkins (A. Adkins, *Merit and Responsibility: a Study in Greek Values*, Oxford 1960)、Lloyd-Jones (H. Lloyd-Jones, *The Justice of Zeus*, Berkeley and Los Angeles 1983) らを主たる主張者とする、「20 世紀後半英語圏の *Il* 理解」とも称すべきものに繋がるものがある。これらの共通項は、いずれも Ag と Ak の重みを全体の構成上等しいものとして見ようとする傾向だと言つてよいかもしれない。

ὥς δ' αὐτως Πάτροκλος, ἐπεὶ ἴδε φῶτας, ἀνέστη.

195

彼らは、なり轟く海のなぎさに沿って進んで行った、
大地を支え、大地を揺さぶる神に、たやすくアイアコスの裔の
大いなる胸を説き伏せることができますように、と何度も祈りながら。
ミュルミドーンびとたちのテントの群れ、船の群れに彼らは着いた。
そして見つけた、かのひとがかん高い響きを立てる堅琴で心を楽しませているのを、
美しく、手のこんだ細工の、銀の弦頭がついた堅琴で。
エーエティオーンの町を落とした時の戦利品の中から彼が得た堅琴である。
その堅琴で心を楽しませながら、彼が歌っていたのは、男たちの誉れだった。
パトロクロスが独りで、黙って彼の前に座していた。
アイアコスの裔が、歌い終えるのを待ちながら。
彼らは歩を進めていた、先導するのはオデュッセウス、そして
かのひとの面前に立った。驚いて、アキレウスは立ち上がる、
堅琴を手にしたまま、座していた椅子を離れて。
パトロクロスも同じく、彼らの姿を認めると、立ち上がった。

9.182-95

ここにはギリシア英雄叙事詩の中で極めて特異な場面が歌われている*8。英雄が英雄叙

*8 ここには、古くから知られた、使節の数に関する議論と、対応する双数動詞の存在 (τῷ 182, εὐχομένῳ 183, ἰκέσθην 185, τὴν βάτην προτέρω 192) をめぐる議論とがある。このこと自体は本稿の核心と直接関係しないが、B. Hainsworth, *The Iliad: A Commentary*, vol. 3, Cambridge 1993, 85-87 が紹介する現在の有力説 (私も同意する) を簡単に記しておく。使節は、古い層の II では 2 人であった。ところが現存 II では Ak を説得する試みを行う「使者」は Od, Ph, Ai の 3 人である。英雄叙事詩の世界では、大きな使節は 2 名 (正使と使節に重大な関心を持つ者、例えば、3.205-206 に言及されている、Od とメネラーオスの組み合わせでのトロイア城訪問を参照) で構成されていた。古い形では、恐らくその 2 名とは、Od と Ai (Ak のい) とであった。つまりメレアグロスの伝説を含む大演説をする Ph は、口承の恐らく最後期に付加された。恐らく最後の II 詩人によって。そして決定的ではないが、双数を複数との境界をあいまいにしたまま受け入れていることから見て、この最後の II 詩人が文字に頼らない詩人であった可能性の方が高いという彼の指摘にも私は同意する (本稿最終章の議論を参照)。その上で次のことを私の観察として加えておきたい。引用した 14 行は、3 つの部分に分れる。最初の文は、使節が Ak のテントに到着するまでを描く (182-5)。次に Ak がテントの中でなしていたことが記述される (186-91)。最後は到着した使節がテントの前に立ち、Ak と Pat が迎える場面である (192-5)。以上の 3 つは文の単位としても截然と分れている。描く内容の叙事詩言語との関係に関してもはっきり分れる。2 つ目だけが内容的に極めて個性的である (誰かが叙事詩を演じていたという意味で特異なのではなく、他ならぬ Ak が演じていたという意味で)。始めと終わりの 2 つの部分は、「訪問者の道行きと到着」、「出迎え」という、叙事詩ではかなり定型的な場面である。そして基本的には双数問題は定型的な部分で起きている。ただし、194 前半は、特異な場面の内容 (Ak がそれまで堅琴を抱えて叙事詩を演じていた) を引きずった語彙と文要素から成る。既成の道行き、到着、出迎え、という場面に、最後の詩人独自のものを組み込んだ、という成立過程についての説明が一番妥当なものであろう。194 前半は、いわば接着剤として最後の詩人が手直しを加え、整形していると見るのが妥当である。

事詩を上演する情景が描かれているからである。叙事詩に通じた者が注意深く詩人の上演に耳を傾けていたならば、彼にとってはこの場面は衝撃的であつたろう。その衝撃の程度を推定するてがかりを以下に記す。まず H 叙事詩に英雄＝戦士が叙事詩を叙事詩人 (aoidos) のように演じる場面は他にないのだということを確認しておきたい。問題は生業としての戦士・英雄と生業としての叙事詩人に関わることである。Od には英雄叙事詩の上演場面はいくつかある。しかしこれらは叙事詩を演じることを生業とする者 (aoidos) によるものだ。叙事詩に叙事詩人が登場するという問題や、叙事詩の中に叙事詩が組み込まれているという別の意味では特異だが、我々の場面とは性質を異にする^{*9}。H 叙事詩に登場する「死すべき者たち」が自分たちのそれぞれの社会的な地位・身分・生業を越境することはほぼ皆無である^{*10}。一方で、20 世紀後半の古典学は、叙事詩人という生業が、神からのめぐみを必要とするほどに (Od. 8.487-8) 専門性の高いものだったということを、口承叙事詩研究という形で明らかにしたとも言える^{*11}。我々の場面は研究者たちの興味を引くことは稀であつたが、それでも Macleod と Whitman が何かが隠されているかも知れないと感じ取っていると思わせるような発言をこの場面に関してしている^{*12}。しかし彼らも叙事詩の構成部分として極めて特異なものがここにあることには気づかなかつた^{*13}。叙事詩の一節を口ずさむということは英雄にも可能であつたかも知れない。しかし

^{*9} Od (Od. 9.1-13.1) あるいは Ph (Il. 9.524-99) が実質的には叙事詩とも言うべき内容の話をする事実も我々の場面とは性質を異にする。これらが英雄叙事詩の言語で語られているのは、叙事詩人による詩の中に組み込まれているからに過ぎない。我々の一節は、叙事詩の中身こそ具体的ではないが、英雄である Ak が聴衆を前にして叙事詩を演じたと歌っている。

^{*10} マカーオーン (医神アスクレーピウスの子) が医師という生業を超えて、パリスから戦傷を受ける。つまり戦士と医師の境界を越えたとも言いうる (Il. 504-7)。しかし、Par がエウリュピュロスの傷の手当をする場面 (Il. 837-48) や、Od の母方の叔父たちが猪から受けた Od の傷の癒す (εὖ ἰησάμενοι Od. 19.460) 場面を思い起こせば答は簡単である。H 叙事詩の伝統の中では医術は専門性の高くない生業であつたのだ。

^{*11} A. Parry (ed.), *The Making of Homeric Verse: the collected Papers of Milman Parry*, Oxford 1971 および M. Parry の仕事に続いたひとりの仕事を指す。

^{*12} C. Macleod, *Collected Essays*, Oxford 1983, 3; C. Whitman, *Homer and the Heroic Tradition*, Cambridge Mass. 1958, 193. 現在の Il 注釈の定番とも言うべき Hainsworth, 88 が、Macleod に (恐らく) 影響されて次のような注を付している。我々の場面に関する読み手たちの理解の典型例として引用しておく: He is singing to the lyre—but not just any song: Akhilleus the hero sings of the heroic deed that he is no longer allowing himself to perform.

^{*13} Whitman は、叙事詩の英雄が叙事詩を即興で演じるというモチーフは叙事詩伝承に既にあつたのだという通俗説に、情報元を特定せずに従っている。ただ残された叙事詩ではここだけが該当するという自分の観察も加えている (注 12 参照)。つまり彼の信じているらしく見える通俗説は、ここに登場人物が叙事詩を演じる場面があるのだから、それは英雄叙事詩伝承内に既にあつたに違いない、と推定しているに過ぎない。だが、詩全体の構想にこの場面が持っている内容上の明らかな対応 (この論文全体の趣旨を参照) を考慮に入れば、さらに最後の詩人が叙事詩伝承そのものの中での自分の位置を自覚している様子も見えることも考慮に入れば (最終章参照)、さらにその上にこの場面が物語全体の構成に果たして

詩人はその理解を予め封じている。英雄は椅子に座し、豎琴を抱えて演じたのであり、その上演は、聞き手が終わるのを待つほどに長かったと詩人は加えている。だから詩人はここで叙事詩の約束に反するある無法を行なったのであり、同時に聴衆に重大な信号を送ったのだと理解すべきである。その信号の内容を探ることが本稿最大の目的である。

彼が演じていたのは κλέα ἀνδρῶν (189) だった。この語は叙事詩人が創作するものそのもの、つまりギリシアの英雄叙事詩を指す^{*14}。この「名声」は（以下数を無視して基本的には κλέος と表記する^{*15}）英雄たちを死の支配する戦場に駆り立てた動機でもあった。これがギリシア英雄叙事詩を支配する仕組みである。部族の単位で作られた多数の小さな社会的共同体が、消長の激しい、戦争に満ちた時期を数百年にわたって生き続けていくというような時代が存在した。このような社会集団の維持の為に優れた戦士集団が決定的な意味を持ち、優れた戦士はそのまま社会で大きな地位を得る^{*16}。英雄叙事詩はそういう社会と社会の構成員とを結ぶ価値体系の有力な表現のひとつであった。これは Adkins^{*17} の説得的なホメロス社会論の中心部である。κλέος は英雄叙事詩が上演された社会の中で英雄＝戦士たちを死に向かって駆り立てる至上の価値であり、社会の構成員を社会の価値体系に即して教育する鍵となる概念であり、叙事詩人たちが長い時間を費やして口承技法を獲得する理由であった。叙事詩伝承という用語がギリシア叙事詩に関して使われるが、このような社会的な思想の基盤の上でこそ伝承は可能だったのだ。

叙事詩を κλέα ἀνδρῶν という表現で詩人がここで言い換えており、その κλέος を Ak がこの大事な場面の前で歌っている情景を描くことによって、彼は聴衆に κλέος に関する大別して 2 つの信号を送ったと私には思える。2 つのうちひとつは II の登場人物たる Ak に関わることである。もうひとつは詩を上演し構成している詩人と英雄叙事詩という文学形式の関係を巡ることである。なぜ 2 つ目の信号が送信可能なのかを説明しておきたい。Ak はここで叙事詩と上演者として関わっていると先に記した。豎琴を抱き、椅子に座し、聴衆も一人ではあるが居る。最後の II 詩人が口承で創造したという前提に立つならば^{*18}、この最後の II 詩人とその聴衆が作り出している光景をそのまま Ak と Pat の行動として反

いる機能が極めて個別的な水準で現行 II の構造に関わっていることを考慮にいれれば、既にこういうモチーフが叙事詩伝承内にあったという Whitman の推定は受け入れがたい。

^{*14} Hainsworth 88 および Hes. Th. 100 を参照。

^{*15} 両形は単純な韻律的交替形とは言えないが、本稿の範囲内に限り、一語で代表が可能なのでそうすることにする。

^{*16} Adkins 34 は、この点を指摘するとともに、サルペードーンの防壁突入の際の名高い演説 (12.310-28) を思い起こせ、と言っているが、その指摘の正しさには全く異議がない。

^{*17} Adkins 34-7.

^{*18} これが正しい立脚点であると私は信じる。最終章で明らかにするように、最後の詩人が作り出した構造は、口承叙事詩伝承に深く関与した者でない限り考えられないものである。

映させていることになる。この重なり合いこそ、2つ目の信号が成立していると私が考える根拠である。とは言え我々の場面が描き出しているものそのものという側面と、詩人と聴衆が作り出している現実の光景がその場面と重なり合うという側面は、それほど截然と詩的機能を分けて論じることができることでもない。以下では最初の側面から見たこの場面と *II* の構成との関わりについて主に論じ、純粹に詩人と κλέος = 英雄叙事詩という文芸形式との関係については最後に触れるにとどめることとする。

さらに2点留意すべきことがある。第1点は Pat が唯一の聴衆として上演の要素を成していたという事実である^{*19}。聴衆がひとりだけの上演という絵も、ある衝撃を含みうる。Pat と Ak の2人だけがある閉じられた空間を占めていたこと自体は異とすべきことではない (24.572-5 参照)^{*20}。しかしただそれだけではない。Pat の気持は不明ながらも^{*21}、彼は叙事詩の上演には不可欠の聴衆としての役割を勤めていたと歌われている。明らかに詩人は何らかの信号を送っている。もうひとつは豎琴の由来である。エーエティオンの城は、Andr の父親の城であった。6巻では Ak がこの父娘と重大な関わりを持ったことが歌われている (6.414-28)。このことは Pat の場合ほど指示が明快ではないが、Andr の夫 Hek に繋がる。これも *II* の構成と重大な関わりを示唆している可能性がある。以上を論じれば、我々の一節の解説としては充分であると信じることにする。

3

この場面がこの叙事詩の進行の鍵 (中心は κλέος) を Ak に与えたという信号は明らかであるから^{*22}、その前提で詩の構造を探っていくことにする。この場面は Od と Ak のやり取り (9.225-429) の直前に置かれている。引用された部分の直後には、出迎え (196)、あいさつ (197-8)、案内 (199-200)、饗応 (201-21) といった定型的な場面が置かれて、すぐに Od の口上 (225-306) が始まるのだ。Od の口上に対して、Ag からの和解の申し込みを拒むばかりではなく、自分は明日郷里のプティエーに帰るという決意を語って (9.308-429) 和解拒否の態度を硬化させる。拒否の真意について論じることが本稿の目的ではないが、我々の詩行と直接関わることに限れば語ることを躊躇しないことにする。

^{*19} 聴衆を欠く口承詩上演は上演たり得ない。

^{*20} しかしそのことも、Ak の κλέος の置かれた場所についてある象徴的な意味を持っていると判断しているが、しかしこれはなぜ Ak は拒否するのかという問題とより多く関連しているのでここでは論じない。

^{*21} δέγμενος Αἰακίδην, ὅποτε λήξειεν αἰίδων (191) は、Pat の上演に対する否定的な姿勢 (早く終わってくれ) を表現しているとも解せるからである。だがこの理解はいかなる意味もこの文脈では持ち得ない。受け身の態度でじっと待っていた (第6章参照) ということ表現していると理解する。

^{*22} 最近の欧語での論考を読む限り、これが必ずしも共通了解事項となっていないということを私は知っているが、このことについてはここでは論じない。

まずこの使者の場面の Ak の拒否演説と Ph の説得 (9.434-605) にも κλέα—κλέος (9.413; 415; 524) が使われている事実に注意を促したい。Ak の拒否演説では、κλέος を選択するか命を選択するかという問いの中で繰り返されており、Ph の説得演説では、怒りは分かるが Ag とアカイア勢の嘆願を受け入れよという勧めに続く、メレアグロス物語導入の理由を示す文で使われている。つまり、Ak にとっては拒否の理由の核心であり、Ph にとっては説得の筋道の鍵になるのが κλέος であるのだ。この点を強調しておきたい。そういう κλέος を、長いやり取りの直前に Ak は上演していたというのだ。我々の場面から使節の場面を見るべきだと主張する本稿の根拠となる事実がここにある。

Od の口上に対する長い返答は、基本的には I 巻での Ag とのやり取りの繰り返しである部分と（主として返答の前半）、ここで新しく彼が拒否の理由として付け加えるものから成る。だから彼の拒否の真意を探究するという将来の作業は、繰り返されているかに見えることの真意を再検討することも当然含むことになる。

演説の後半部で Ak は戦士と命の関係についてこう言う：「戦士の命というものは、一度齒並みの垣から外に逃れてしまえば、またと呼び戻す方途はなく、略奪によっても買い求めることによっても回復はできない (9.408-9)」。彼は明らかにこのトロイアが戦士としての自分にとって命を賭けるに値するかどうか疑問を抱いている。もちろん Ag が自分にしたことへの怒りから完全に自由になって冷静な判断をしているとまで私は主張していない。しかしこの地で、この状況下で戦うことに対する疑いが彼になればこの発言は無意味だ。

確かに Ak はまだ怒っている^{*23}。しかし最後の詩人は Ak の怒りには冷徹な判断も含まれているのだと我々に知らせている。その冷徹な判断こそ II の屋台骨を作り出していると私は読む。それが冷徹な判断であることを我々に知らせるのが、この戦士の命への Ak の言及とテティスによる予言の提示と、それに対して自らの決意 (Hek と戦うつつもりはない。明日ヘレスポントスを渡る [9.356-63]；だから君たちも故郷へ帰れ [417-20]) を語るこの文脈である。この地に留まれば死と名声、帰還すれば名声は得られないが永い命をおまえは得るというのが彼女の「予言」であった (410-6)^{*24}。テティスの予言は、それが Ak のトロイア参戦に関してのものだと考えれば確かに予言であるが、戦士とは何かを規定する命題だとも言える。そういう意味で「戦士の息」と「予言」という連続する 2 つの発言は完全に文脈を成している。Ak も戦士という者が抱えている本質上の危険に言及しているのだ。戦士が戦って行く上で頼りにしてきた原理がこの戦場では貫かれていない

^{*23} Cairns は、使節の不成功の原因はこの点に尽きる、と主張する。e.g. Cairns 2011 105 f.

^{*24} 本文と訳を次章で引用してある。

(優れた働きをした戦士にも、優れていない者にも、同じ分け前 *μοῖρα* が待っており、同じ栄誉 *τιμή* が与えられている 9.318-9) という認識を Ak はこの長い演説の前半で示している^{*25}。だからここでは、自分の命を投げ出して *κλέος* を得るという賭博はしたくないと宣言しているというのが、「戦士の息」と「予言」に対して彼が出した帰郷という決断の持つ論理的結論であると言えよう^{*26}。

Schadewaldt は 11 巻の Ne による Pat 唆し場面を中心にして、その準備として直接にその唆しを可能にした運動の始まりをこの 9 巻に見ている。復帰への断固たる拒否が、Ph の長い説得演説の影響を受けていくらか軟化する。明日自分はヘレスポントスを渡るであろうというのが、Od への返答であった。それが Ph の説得の後では明日出発するかどうかは Ph と明日の朝相談することにしようというところまで後退する (618-9)。さらに Ai の短い (たった 19 行) 説得の後では、Hek がミュルミドーンの船とテントの群れまでやって来て船に火をかけるまでは戦いに戻る気はない (650-3) というところまで戦線復帰拒否を後退させる^{*27}。

Ak の中で起きた拒否の程度の後退という運動が、Ne の唆しの成功を支える素地である。この素地があるからこそ、次々とアカイアの英雄たちが傷つき Hek の脅威が目の前に押し寄せてくる、という光景を前にしての、16 巻での涙とともになされた Pat の嘆願が成功するのだ。「あなたの武具を身に着けて、私が戦場に出れば」という、Ne の唆しそのままの Pat の嘆願に Ak が応じる。以上の Schadewaldt による // 中心部に対する構想理解は 70 年以上の時間が経過しても輝きを失っていない^{*28}。筆者は、我々の小さな場面の機能を論じる場面でも、Schadewaldt の慧眼に従いたいと考えている。このようにして彼の拒否は即刻のトロイア退去から Hek がミュルミドーンの船に現実の火をもたらす未来へと延期される。そしてこの延期が、あるいはこの延期を生じさせた Ak の中の何かが、Ne の唆しを生み、Pat の戦死という転回点を作り出す。しかし転回点をもたらし Ak の中の素地とは実際のところ何であるのか。

^{*25} Adkins は、発表直後から大きな賞賛と、かなり大きな批判を受け続けてきた。特に H 理解、就中 // 理解をめぐってそうである。これは現在でも変わらない。叙事詩の社会の価値はすぐれて競争的なものと彼は言う。正しいが、// 理解に関しては明らかに問題含みである。正しくは、// がそういう叙事詩世界的価値の喪失に関わるものだと思えるべきだと私は考えている。なお注 29 も参照。

^{*26} これが Ak の戦線復帰拒否の理由の、彼の側からの理由付けの根幹である。そういう意味では、拒否そのものを扱う作業を先取りしたことになるが、拒否そのものが持っている問題はこれに尽きるものではないので、やはり別建ての論考は必要である。

^{*27} この過程が 9 巻に歌われていることは、Whitman (190f.) も認めている。

^{*28} Schadewaldt (1966) の初版発行は、1938 年である。Schadewaldt (1966), 127-43 特に、135f. を見よ。圧巻である。

4

Ak の κλέος^{*29} を成就することが、この物語詩の大すじであると考えてみよう。我々の場面から詩人によるそのような指示を読み取ることは自然なことでもあるように思うのだ。この指定を基礎にして上述の Schadewaldt による構造を見直せば、たとえ、結局は同じ絵を違った角度から見るに過ぎないにしても、随分印象が違ってくるように思える。Od の要請に対する Ak の峻厳な拒否は、Ak の κλέος が成就されることが絶望の淵にあることを聴衆たちに告げていると聞こえる。そして Ph のメレアグロスの物語を使った説得と、Ai によるテントにわざわざ出向いた者としての、そしてしかるべく饗応を「館のうちに」受け得た^{*30} 者による、血縁で Ak を大切に思う友からの短い説得（「君は、君のこと

^{*29} 仮に κλέος ἄφθιτον が、英雄叙事詩のひとつの典型的な主題を指す語であったとしよう。そして、κλέος ἄφθιτον あるいは κλέα ἀνδρῶν によって、ある種の典型的な叙事詩が同時に想起されるという本稿のそもそもの前提が、原則的には正しいとしよう。しかし II という叙事詩は、外見上、たしかに、この κλέος を成就する形へ持ち込まれるけれども、その成就がかなり変則的なものだということは本稿第 5 章が明らかにするとおりである。Ak の死が Ak 自身によって受け入れられ、彼の Hek 殺しが、アカイア勢の戦いの目的であるトロイアの崩壊へ向けての巨大な一歩であるかぎりにおいて、たしかに外形上彼の行為は κλέα ἀνδρῶν を形成しうる条件を備えているが、しかしそれは Adkins の H 社会の価値に関する研究の前提になっている社会的な諸関係を満たして成就されるものではない。これが本稿第 5 章の指摘することである。H 叙事詩の後ろには戦争に満ち満ちた、東地中海の紀元 2000 年期末から 1000 年期前半にかけての状況がまずある。それぞれの小さな社会的集団は利益の確保と共同体そのものの存続の為に、外部と戦う武力に格段の価値を置く社会的な価値の体系を採用する他なかった。つまり武力的な意味合いに大きく傾いた ἀγαθός とか ἀρετή とかという「競争的価値」が H 社会では独占的な力を持っていた、という彼の把握は十分に説得的である。しかし II を読んだ者はみんな知っているはずである。Ak は、この場合の社会的な集団をアカイア勢全体だという意味に理解する限り、自分の属している社会的な集団の為に命を賭けたのではないのだ、ということ（本稿第 5 章参照）。16 巻から 22 巻の進行を知っている者は、恐らく誰でも知っているはずだ。Ak がほとんど瞬時に戦場に戻ることを決意したのは、アカイア勢という社会の為にでもなく、プティエーという本来自分が所属していた集団の為にでもないということ。自分の替りに、自分の武具を身に着けて戦場に戻った友である Pat の死を、自分は防ぐこともできたのに防いでやれなかった、ただこの 1 点が彼の動機のほとんどすべてであることを。だからこそ、Hek を斃した瞬間、ほんの短い迷いの後に軍勢をトロイアの城へ導くのをやめて、Hek の死体を Pat に捧げる為に、自分のテントに帰還する方を選ぶのである（22.378-94）。Adkins の労作は κλέος ἄφθιτον をキーワードとする英雄叙事詩が成立し、文学的な伝統として維持されてきた背景の分析として大いに尊重すべきものであるが、我々の II を理解する為の支柱としては危険なものなのである。我々の II は彼の指摘する社会的価値体系が崩壊して行く事態に対応して創作されたものだ、という肝心の点を見落としているからである。

^{*30} οὐ δ' ἴλαον ἐνθεο θυμόν, / αἰδεσσαι δὲ μέλαθρον ὑπάροφιοι δέ τοι εἶμεν / πληθύς ἐκ Δαναῶν, μέμαμεν δέ τοι ἐξοχον ἄλλων / κήδιστοί τ' ἔμεναι καὶ φίλτατοι, ὅσοι Ἀχαιοί. 「あなたは折れて、心を和らげてほしい。あなたの館（実際はテントであるが）をわざわざ訪れたことに敬意を示してほしい。我らは、大勢のダナオイ勢から選ばれてあなたの館のもとにある。我らのあなたを求める気持ちは誰にも負けない。また、我らは、アカイア勢の中であなたに（血縁上）最も深く結ばれた者であり、また最も近い者なのだから（9.639-42）。」ここで Ai は 2 つの部族社会的価値を強調している。嘆願が近親からのものであること（だから、Od を排除しているとまでは言わないが、主として Ph と自分のことを一人称複数では指している）と、そして館までやって来ていることである。これが嘆願にとっては重要なことなのだ。Od は確か

を大切に尊重している友たちの愛情にも動かされないのか」³¹ (9.630-1) が、ある程度の譲歩を Ak から引き出し、κλέος は Ak が戦場に戻ることを拒否してテントに残る以上、あいかわらず成就を望めない状況にあるが、Ak の κλέος という物語は明日にも死を宣告されるという状況でもないということになる。

κλέος の一連の文脈での使われ方がおおよそ上に記したとおりの意味を帯びているとしよう。また私が推定するとおり κλέος は英雄叙事詩の典型的なタイプ、つまり聴衆が今まさに享受しつつある *Il* のようなこの叙事詩をも指示しうるとすれば、我々の場面を中心にした一連の語りは、彼ら聴衆たちに次のような行為を促していると言えるだろう。彼ら聴衆は、Od と Ak のやりとりをつうじて、英雄たちの命と、軍の目的の成否を明らかに左右しかねない息詰る瞬間に直面していることを知らされる。と同時に現在享受しつつある *Il* という作品が成立しうるか否かに関わる、そういう意味でも息詰る瞬間に直面しているのだと知らされていると言ってよいのではないか。Ak は、自分の命という目盛りを片手で示しながら、故郷に帰って κλέος は放棄すると宣言しているのだ。だからトロイアは陥落する見込みがない、君たちも帰れと宣言しているのだ (9.410-20)。それは同時に聴衆たちに、この叙事詩が典型的な英雄叙事詩として成立する見込みが絶望的になりつつあることも知らせているとも言える。こういう叙事詩の成立に関わる信号も Ak の叙事詩上演場面には発信されていたのだと私は考える。詩人が上演しているのは英雄たちの κλέος を歌い上げ将来に向けて維持する行為である。その行為を、椅子に座し、豎琴を抱えて、Ak がしていると詩人は歌っているのだ。この叙事詩のこれ以降の進行を巡っての重い役割が Ak という登場人物に伝達されたことをこの一節が持つ可能的な意味として理解することは許されるのではないか。Ak が *Il* のいわば主人公であることは当然信号に含まれるとして、それ以上に、物語の主人公というにとどまらない、ある詩的な重みを持った何かが、詩人が創造するということに含まれる何かが、この叙事詩の詩人から Ak に与えられたと

に「館」まで来ているが、彼は個人的な嘆願をした訳ではない。彼の演説の非常に大きな部分が Ag の償いの品々のリストの繰り返し (264-99 = 122-57) であることから分かるように、Od の説得は Ag = Ne という「司令部」の意思の伝達という意味が濃い。つまり彼の演説は、Od 個人が嘆願をしているというより、極端に言えば Ag が直接 Ak の膝にすがらなかった、という事実を表現しているものと言える。要点はここだと思う。

³¹ テキストそのものは、3 人称を使っている。しかし、その批判、あるいは批判の形を借りた願いが、Ak そのものに向けられているのは明らかなので、あえて 2 人称で訳した。了解を乞いたい。なお、ここでは議論しないが、2 人の説得が功を奏する理由のひとつは、彼ら 2 人とアキレウスの「近い」関係が大いに力を持った、と私は判断している。詩人はアキレウスをそういう、血族的・部族的遠近を大切にする古風な男として意図的に描いている。Ph は Ak の父親がわりをした (中心は 9.494-5) ことを説得の前半で長々と強調する。Ai は Ak のいとこである。また死体を返せというプリアモスの説得成功の鍵は「父」であった (24.486-7; 24.507-12)。

理解することは可能ではないだろうか。その物語の成就する目的地が Ak の κλέος なのであるというのはその何かのうちの一番表層にあるひとつに過ぎない。

Ph の長い説得に対する Ak の短い返答の中で Ph の説得そのものに対する怒りを露にした部分がある：

ἄλλο δέ τοι ἐρέω, σὺ δ' ἐνὶ φρεσὶ βάλλεο σῆσι
μή μοι σύγχει θυμὸν ὀδυρόμενος καὶ ἀχεύων,
Ἄτρεΐδῃ ἥρωι φέρων χάριν· οὐδέ τί σε χρὴ
τὸν φιλέειν, ἵνα μή μοι ἀπέχθῃαι φιλέοντι.

他におまえに言うことがある。心して聞け。

泣き言を言ったり、嘆いたりして、俺の心を乱してくれるな。

アトレウスの子が喜ぶだけだ。それにあの男に近い者としての

身振りをするべきではない。近しい私に厭わしい者とならない為にも。 9.611-4

何に Ak は苛立っているのか。表面的には、自分にとって近しい者である筈（父親的役目を Ph は果たしたのだ）の Ph が、明日故郷に帰ると宣言する彼の決断に反して、アカイア勢を助けよ、Ag の償いを受け取れ、という趣旨の大演説をしたからだ。近しい自分の決断を助ける演説をすべきであるのに。これが部族社会的な価値観を正面に立てる Ak が、現在自分と敵対関係にある Ag の利益になるような演説をした Ph に対して苛立った理由であることは確実である。φιλέειν ... φιλέοντι という繰り返しは、我々に何が Ak の判断の核^{*32} になっているかを教えている。

苛立ちは、もっと別の根拠を持っていると、我々の場面の角度からは見える。Ph の説得が、Ak の痛いところを突いたからではないのか。彼の演説は Ak を動揺させたのだ。その動揺は、明日ヘレスポントスを渡って故郷に向うという決断を一步後退させる結果になる（「明日故郷に発つかどうかは明朝相談するとしよう」9.618-9）。さらに「文学的に」言えば、この Ph の説得への一部妥協が引き起こしうる自分の運命の変化を予感しての苛立ちだとも言うことができるかもしれない。

何が、妥協を引き出したかについてのひとつの可能性については、先に（注 30 および 31 参照）言及した。そして、少なくとも Ak 自身の言い方に従えば、Ph による、メレアグロス伝説を範例とした贈り物（δῶρων 9.604）や敬意（τιμῆς 9.605）を核概念とする説得には、Ak はいささかも影響を受けなかったのだ（9.607-10）。ただこの断言をそのまま顔面どおり受け取っていいかどうか疑問の余地は全くないとは言わない。では Ak が Ph の演説に対してある種の妥協で応じ、かつ苛立を見せたのは、ただ Ph が養育者としての役

*32 部族社会内での親近の距離が人間関係の重要な基準であるという判断の、である。

割を強調しつつ嘆願した(485-514) からだけであろうか。

明らかに、それだけが理由ではない。もうひとつの明らかな、そして最大の理由は、恐らくは誰でもが、言葉に明確には表さなくとも感じているはずのものだ。彼は男の命(ψυχή 408)は齒の間から逃れ出しまえ、もう取り返しのつかない何かなのだと言う。その定言とともに、母親のテティスが彼に与えた予言を明らかにした：

εἰ μὲν κ' αὖθι μένων Τρώων πόλιν ἀμφιμάχωμαι,
ὤλετο μὲν μοι νόστος, ἀτὰρ κλέος ἄφθιτον ἔσται·
εἰ δέ κεν οἴκαδ' ἵκωμι φίλην ἐς πατρίδα γαῖαν,
ὤλετό μοι κλέος ἐσθλόν, ἐπὶ δὴρὸν δέ μοι αἰῶν
ἔσσεται, οὐδέ κέ μ' ὤκα τέλος θανάτῳ κιχείη.

ここに残ってトロイアの城をめぐって戦い続ければ、
帰還の可能性はない。ただ、朽ちることのない名が得られるだろう。

逆に、家郷に向けて父祖の愛しい里に着くことが出来れば、
良き名を得る可能性は失われてしまうが、私の命は永い

だろうし、死という終わりが私をすぐに捉えることもないだろう、と。 9.412-6

この予言が Ak に要求している「生か死か」に関する決断は、Ak の短命という予言(最初の例は、1.416-8) と様々に組み合わせられて、// 全編を貫いてひとつの緊張感でつないでいると言える。そしてそれは同時に Ak という登場人物の性格を決定する役割もしている。もちろん、彼が κλέος を強く志向する存在だという性格である。だから、メレアグロスの伝説を使って κλέος 獲得の範例を持ち出した(κλέα ἀνδρῶν 9.524) Ph の説得は、何らかの成功を得ることが予め約束されていた、と言ってよい。これが、Ak の「痛いところ」だったのだ。Ph の説得の成功は、我々が問題にしている Ak の叙事詩吟唱場面において予め約束されていた、とも言える。最後の H が、目の前で吟唱している情景を思い浮かべてほしい。彼は、κλέος をテーマとする典型的な英雄叙事詩を演じている。今からその κλέος が不可能になろうとする場面を、つまり Ak 自身が、「自分は戦えない。κλέος より故郷での静かで永い生命を選びたい」と宣言する Od 演説への返答場面を演じている、と思い浮かべてほしい。だがその直前の場面では、詩人の姿そのままに Ak が κλέα ἀνδρῶν を吟じていると詩人は歌ったのだ。この叙事詩吟唱場面は、次に訪れる「(この) 叙事詩の危機」に対するほぼ最強の対抗手段として準備されたのであろうということはほぼ間違いない。叙事詩の主人公を Ak と定めた上で彼の帰郷宣言が実現されれば、この叙事詩は実現不可能な叙事詩として、ここで自己破産宣告を下さねばならないはずである。しかし、それは我々の場面、Ak が κλέα ἀνδρῶν を歌っている場面が予め防いでいる。

彼が、生命を賭しても κλέος を志向する典型的な英雄であることは、既に Ag との I 巻での争いの直後にも暗示されている。会議の場での宣言どおり彼はテントに籠り、ブリーセーイスは奪われ、会議の場からも戦場からも離れるが、「Ak は、自分の心を腐らせていた、じっとひとつの場所にとどまって。雄叫びや戦が欲しくてたまらなかった (I.491-2)。」我々が論じているこの巻からは遠いが、この叙事詩の主人公として「正式に」詩人から指定された Ak が、同一の性向を持った人物であることは、この I 巻の記述にも言われていると言える。しかしこの一節には Ak のある一過的な心理状態を歌っているにすぎないように聞こえる可能性がある。だが我々の場面は違う。このような場面を使節とのやりとりの直前に置いたことに詩的な意図があったとすれば、I 巻の引用句よりは明らかに永続的な、少なくともこの詩人の演じる II の続く限りは持続するものとして、κλέος を志向するという主人公の性格の核をこの場面が定着した、と言うべきではないだろうか。

自分とアカイア勢という社会との関係に関して冷徹な判断を示して、Od が伝える司令部の要請を拒否したにもかかわらず、Ph の説得に彼はある決定的な譲歩をする。Ph の説得の質もそれに貢献しえたかもしれない。しかし Ak の譲歩の一番の根は、彼を κλέος を志向する者として定着した我々の場面にあると認めるべきではないか。κλέος を志向するという「痛いところ」を突かれ、冷静な計量に反する譲歩を強いられたからこそ、彼は Ph のアカイア勢寄りの態度にいらだったのではないか。

私は Ak の戦場復帰拒否 (9.308-429) には、拒否の根拠に関して聴衆を充分説得するだけのものが含まれていたと信じる^{*33}。もし帰郷もやむをえない、と聴衆を信じ込ませるものがそこにあったとしても、聴衆はそれでも Ak は κλέος への願望を実現させるに違いないと信じてよいのだ。詩人が物語を語り続ける以上、英雄詩の享受を期待してよいのだ。「Hek が自分たちのテントや船に火をかけるまでは自分を出ない」という否定的な譲歩であれ、彼が故郷に帰らない限り、結局は十全な英雄叙事詩の享受をできる、と信じてよいのだ。目の前の aoidos は Ak に叙事詩の運命を託した。Ak が物語から消えない以上、聴衆は期待してよいのである。これがこの使節到着の前に置かれた印象深い場面の、II 構成上の機能のひとつであると言いたい。

^{*33} まだ Ak による戦線復帰拒否演説の持つ説得力を誰も充分には説明したとは言えないが、にもかかわらず「最強の予防手段」だと命名した我々の場面が、彼の演説はあのみまで説得力のあるものだったと逆に保証していると言える。本当に Ak がこのまま帰ってしまうこともあり得る、そういう拒否理由が何らかの形でそこに表明されていなければ、我々の上演場面が提供する予防はお笑い草となるであろう。

5

ここで *Il* は単一のすじから成るというアリストテレースの見解^{*34}を採用することにしよう。もちろん、その単一のすじとは、詩人が我々の叙事詩上演場面で聴衆に知らせたとおり、Ak に κλέος を獲得させるという到達点を目指すものである。少なくとも本稿にとっては。すると詩人がそのすじの到達点を設定し、誰が主役であるかを知らせた直後に Od と Ak のやり取りをつうじて、その到達点に向けての詩的な運動が袋小路に入ったことを聴衆は知らされることになる。その袋小路から、できれば必然の関連のもとに物語を脱出させる。*Il* とはそういう型の詩的物語である。

Schadewaldt が *Iliasstudien* をつうじて明らかにした *Il* の構造図は、Ne が Par を唆す場所から見た絵である。骨組みはそのままに彼の描いた絵は、Ak に κλέος を獲得させるという物語の運動を袋小路から脱出させて到達点へと導く仕掛けそのものを描く絵として使えると私は考える。脱出図として見た Schadewaldt。これがより作品そのものに即した *Il* 理解である。

Ak は、Hek がテントと船に火をもたらすまでは戦場に出ないという自分の行動に関する設定をする。これは、故郷にすぐには帰らない、しかし、アカイア勢の戦闘には参加しない、という彼の譲歩の形と整合している。戦闘には参加しなくとも、自分とミュルミドーン勢の命を守る必要はある。また帰郷の手段としての船はどうしても確保しなければならない。それらが危うくなった時は戦う。戦わない、だが帰らない。これが、Ai に与えた譲歩 (9.650-3) の意味である。この譲歩には、予想がついている。「私のテントと黒い船の周りにまで来れば、Hek も、どんなに戦に焦がれていようとも、(戦を) さし控えると思う (654-5)。」しかし、予想は当たらない。ゼウスが、その日が暮れるまでは、という限定付きで、Hek に力を付与したからだ。いやその前に Ne の唆し場面が重要な意味を持つ。

Ak がいないばかりにアカイア勢が陥った苦境 (11 巻) を打開する為に、Ne は Par に、Ak を戦場に引っ張り出すのが無理なら「では、せめておまえを戦場に送り出すように仕向けよ、そして同時に他のミュルミドーンの民も付けるように仕向けよ (11.796-7)」と唆す。何故、それが唆しか。Ne は明らかにアカイア勢の作戦に責任を持つ立場にある。Ak へ使節を出して彼を戦場に戻すように「司令部」を誘導したのは Ne である (9.103-113)。使節の人選をしたのも (9.167-70)、また正使である Od に入念な (πόλλ' 9.179) 指示を与えたのも Ne である (9.179-81)。彼は、明らかに Ak なしには苦境から軍勢を救い出すこ

*34 Po. 1459a17-24.

とは出来ない、と確信していた。Pat の父が Pat 出征の時、Ak を助けあるいは指導して、力を尽くすように諭したのを知っていた（11.786-9）。つまり、彼 Pat にも、κλέος を志向する何かがあることを知っていたのだ。Pat の最初のあいさつ（11.648-54）から、Ak がアカイア勢の苦境にひとかたならぬ興味を抱いていることも知っていた。Pat を動かせば Ak を戦場へ引っ張り出すという目的は達成できるかも知れない。これを唆しと呼んで悪い理由はない。

Pat は唆される。Hek がゼウスの助勢を得て防壁を破り、テントと船陣まで押し寄せてくる（12 巻 15 巻）。Pat による涙を流しながらの「戦場へあなたの武具とあなたの将兵とともに」という嘆願と説得（16.21-45）。それほど追いつめられているのなら（16.64-73）、という状況把握のもとで、代理で Pat が出ることへの Ak からの容認。そして譲歩は Pat の出陣、奮戦、戦死へと繋がる。Ak の出陣決意と短い命の甘受の決意（18.98-126）へと繋がる。そして Hek 撃ちという物語上の頂点（22 巻）へと一気に繋がるのだ。

以上基本的には Schadewaldt の理解の枠組みにそって略述した。しかし、この唆し場面を中心に、そこに至るまでの準備（1-9 巻）およびその展開としての 12 巻以降という構造理解は、構造が作品の「思想」をも含んでいるものだと考えれば、不十分なものである。ひとことで言えば、彼の理解はあまりに「力学的」にすぎるのだ。

こういう問題がある。Ne にはアカイア勢の苦境の本当の姿が分かっている（Ak の不在）。そしてこの苦境の打開策として、狡猾で有効な策略を考え出すことは出来た。しかし彼は Ak の苦悩と戦線復帰拒否の本当の理由をまったく理解していない：

εἰ δέ τινα φρεσὶν ᾗσι θεοπροπίην ἀλεεῖναι
καί τινα οἱ παρ Ζηνὸς ἐπέφραδε πότνια μήτηρ,
ἀλλὰ σέ περ προέτω,

何かしらの神々からのしるしを彼が、心の中で、実現させまいとしているとか、
また、ゼウスのそのような意向を、母神が伝えたというのなら、
せめておまえだけでも、彼は送り出すべきなのだ。

11.794-6

Ak が何故意固地にテントに籠るのか、その理由についての Ne による推測である。Ne はその理由に関して無知であることをこの 3 行は明らかにしている。この 3 行を含む 10 行は Pat の出陣訴えの中でほぼ繰り返されている^{*35}（11.794-803 ~ 16.36-45）。Ak は、アカイア勢とともに生命を賭して戦うことはできないと直感している。だから κλέος をあきらめて故郷に帰るべきだと決心した。しかし彼の英雄としての本質（κλέα ἀνδρῶν を彼

^{*35} 定形詩行とは言えない詩行の繰り返しは、しばしば削除要求の原因となる。この 10 行も、削除要求が古代から繰り返された。しかし、この繰り返しは本稿から見れば重要な意味を持っている。

は歌っていた 9.189) の故に、また近しい者たちの願いの故に妥協し、戦場の片隅にとどまった。従ってあれやこれやの知った顔が Hek 率いるトロイア勢に、自分が戦場に出ないばかりに斃されるのを見ていなければならない。この苦悩も彼にある。II 巻以降に生じた状況すなわちアカイア勢の苦境の故に、彼らが彼の膝の前にすがって嘆願するかもしれない、そうすれば自分はアカイア勢のもとに戻れるのだという空しい期待を持つことになる (II.608-10)。これが Pat を、誰が負傷者なのかを探る使命を与えた上で送り出した (II.611-5) 理由である。こういうことを、Ne は Pat 同様全く理解していない。むしろ、どうしてアカイア勢とともに κλέος を求めることが出来ないと自分が判断しているのか、Ak 自身説明できず、ただ自分の取る行動を宣言するしか彼には方法がないということが無理解の原因なのだが、Ne が無理解であるということには変わりはない。そういう意味では、Ne の行なった唆しは、Ph の大説得演説や、Ai. の捨て台詞と、Ak の抱えている問題に無知であるという点に関しては本質的に変らない。

9 巻の Od の説得に対する拒否が生み出したドラマの核心となり、「思想」を含む構造理解の核心とならねばならないのは、明らかに Ak の κλέος である。これが我々の短い場面が促す全体への視点のありようである。Schadewaldt の構造理解はおおむね正しいと筆者は信じているが、この視点が欠けている。

18 巻の出陣決意表明の場に次の言葉が見える。一続きの言葉なのだが、長いので、焦点となる部分だけ引用する：

αὐτίκα τεθναίην, ἐπεὶ οὐκ ἄρ' ἐμελλον ἑταίρῳ
κτεινομένῳ ἐπαμῦναι·

今すぐ死んでしまいたい。僚友が殺されるその時に、防いでやれないような
ことになっていたのなら。

18.98-9

νῦν δ' εἴμ', ὄφρα φίλης κεφαλῆς ὀλετῆρα κιχείω,
Ἴκτορα· κῆρα δ' ἐγὼ τότε δέξομαι, ὅπποτε κεν δῇ
Ζεὺς ἐθέλῃ τελέσαι ἧδ' ἀθάνατοι θεοὶ ἄλλοι.

今こそ私は出陣する。私の大切な人間の命を滅ぼした者に、ヘクトールに
遭う為に。死を受け入れる覚悟は出来ている。ゼウスや他の
神々が成就することを望むその時が来たならば。

18.114-6

Pat の死を知らされ、Ak が崩れ落ち、彼が悲痛な叫び声をあげるのを海の底で聞いた母親のテティスがニュンプたちを引き連れて Ak のところへ向かう。この道行きがどれほど大事なものを聴衆に知らせる為であろう、ニュンプたちの長いカタログが続けられる。トロイアの浜に着いた母親は、Ak から Pat の死を知ったという事実と、Pat が友の中で彼

にとって最も大事であつた (τὸν ἐγὼ περὶ πάντων τῶν ἐταίρων 18.81) ことを知らされる。その Pat を殺した Hek から仇を取らなければ人に交じり続ける気はない、という決意を Ak は口にする (18.90-3)。その決意をくじく為に、母親は、Ak の短命についての予言を繰り返す。ここではそんなことをしたら Hek に続いてお前が運命に出会うことになる、という形を取っている (18.95-6)。その引き止めに怒りを込めて瞬時に返した返答の中心が上に引用されている。死を受け入れる覚悟とともに出撃すること、その出撃の動機は、友の死の仇をうつことであることが宣言されている。そして死の覚悟とともに、私たちにあって大事なことが、彼の口から出る：

κείσομ' ἐπεὶ κε θάνω· νῦν δὲ κλέος ἐσθλὸν ἀρούμην,

死ねば、死骸となり横たわるだけ。今こそ良き名を掲げたい。

18.121

この瞬間、9 巻の拒否から始まった袋小路は開けるのだ。テントの中で κλέα ἀνδρῶν をたった独りの聞き手の前で歌っていた英雄は、その名の為に命を賭けてもよい κλέος を見つけたのである。

しかし、κλέος が英雄叙事詩伝承の核心を表現する言葉でこれまでであったとすれば、そして、κλέος という概念がギリシア初期社会の共同体と、それを守る戦士との間にあった切実な需要供給関係に深く根付いていたものだったとすれば、その κλέος の持つ意味は、この叙事詩では崩壊しかかっていることもまた我々は認めねばならない。Hek を倒すことは実質的には、トロイアを滅ぼすことに他ならないことを英雄も承知してはいるが、トロイアの滅亡は、友の仇討ちの為に死の覚悟とその実現としての Hek 殺し、それが結果としてもたらす κλέος ἐσθλόν への希求、という Ak の出撃決意の単なる結果でしかないかのような形で宣言の最後に、トロイアの女たちの泣き声として付け加えられるだけなのであるから³⁶：

καί τινα Τρωιάδων καὶ Δαρδανίδων βαθυκόλπων
ἀμφοτέρησιν χερσὶ παρειάων ἀπαλάων
δάκρυ' ὁμορξαμένην ἀδινὸν στοναχῆσαι ἐφείην.

そしてトロイアや懐高く襞深く結んだダルダノイ族の女たちのだれかれとなく、
柔らかな両の手で涙を拭いながら絶え間もなく
嘆き泣かせてやりたいとも思う。

18.122-4

³⁶ Schadewaldt, *Die Entscheidung des Achilles, Von Homers Welt und Werk* (= *VHWW*), Stuttgart 1965, 234-267 は優れた観察であるが、Ak の κλέος ἐσθλόν をアカイア勢の頭脳の側から見ようとしているからであろう、この宣言が持っている以上のような特徴を完全に見落としている。

トロイアの女たちの泣き声は Ak の渴望する κλέος の付録でしかないという表現は、単なる修辞ではない。19 巻の和解のちぐはぐさ^{*37}、先に指摘した Hek 討ちの瞬間での、トロイア攻め断念の決意の早さ、最終巻における、「プリアモスを守る為には、アカイア勢の目を逃れなければならないが」、という敵味方が逆転したような Ak の思考法 (24.650-5)^{*38}、プリアモスの願いを入れて Ak が独断で Hek の葬儀の為に設定する休戦条約 (24.656-70) といった例に見られる節目節目での大事な判断が、Ak の κλέος がアカイア勢という社会集団と深く結びついたものではもうなくなっているという事実を私たちに教える。

9 巻で Ak が自分は κλέος を断念せざるを得ないと表明した時、その κλέος はまだ伝統的な概念のうちにあった。自分が属している社会集団（この場合彼が考えているのはアカイア勢という集団である）の中に、自分が生命を賭けてまで κλέος へ向けて走り出すべきだと思わせるものはない、と彼は表明した。κλέος が本稿第 2 章で略述したようなものであったとする。すると戦士としての自分と、その恩恵を蒙るべき社会集団としてのアカイア勢との間に、そのような関係は成立していないと言う時、彼は κλέος をまだ伝統的な英雄叙事詩概念の中で捉えていたと言いうる。そういう伝統的な κλέος と戦士と社会との関係を自分と君たちとの間に認めることはできないと彼は言ったのだ。

κλέος に向けて再びテントを出るという決意をついに彼が表明した時 (18.98-126)、その κλέος は、彼がアカイア勢という社会集団との関係から捉えていたものとは性格を異にするものだということに注意を促したい。あるいは彼が Od の復帰促しを拒否した時に否定した κλέος とは別種のものであると言うべきかも知れない。なるほど彼の決意表明の中でトロイアを滅ぼすことは目的のひとつであることをこの引用文は明らかにしている。しかしこの「トロイアの女たちは泣くだろう」という予想は Pat を殺した Hek を殺す為に出発せねばならないという決意 (18.114-6) が実現した場合に生じる必然の結果を言ったにしかすぎない。トロイアが滅びるという予想は、そのような位置関係 (Hek 殺し表明の直後で出陣表明発言の最後に付加されている) にあり、そのような重みしか持っていない。καί (18.122 行頭) は、そのような Hek 討ちを κλέος ἐσθλόν とするという「決意表明」を表す文 (18.120-1) に、「トロイアの女たちを泣かせる」文を接続する文接続詞である^{*39}。つまり、「Pat の仇として Hek を討ち κλέος ἐσθλόν をあげる。その結果として女たちは泣

^{*37} 「アカイア勢が私の膝を求めて嘆願の為に今にも駆けつけてくるぞ (11.609-10)」が、Ach. が望む戦場復帰への理想的な条件であるとすれば、アーテーに責任を押し付けて、つまりは、自分には責任はない、と主張する Ag の弁明が、「膝を求めて」からほど遠いことは明らかである。

^{*38} この恐れは、ヘルメースもプリアモスに告げる。だから、プリアモスは、Ak に別れのあいさつもせずに、黙ってテントを去ることになる。

^{*39} M. Edwards, *The Iliad: A Commentary*, vol. 5, Cambridge 1991, 163 も、注釈項目の提示の仕方からみる限り (Τρωιάδων καὶ Δαρδανίδων βαθυκόλπων) 同様の読み方をしていると判断される。

く」と訳すこともできるような役割を果たしていると思われる。なるほど Hek 討ちは、アカイア勢という集団の戦争目的と完全に一致する。その限りでは Ak とアカイア勢の間には表面上 κλέος をめぐる相互関係が成立することになる。しかし Hek を殺した Ak が Hek という支柱を失って動揺が明らかなトロイア城に軍勢を向けず、Hek の死体をテントで待っている Pat の死体の前に持ち帰ることを優先した時 (22.378-92)、彼の κλέος が Pat の殺し手を殺すということに基礎を置いており、トロイアを滅ぼすことではなかったことは明らかである^{*40}。その彼の決断とここで今指摘した「Pat の仇として Hek を討ち κλέος ἐσθλόν をあげる。その結果として女たちは泣く」に見られる関係は完全に一致する。つまり彼の κλέος は物語の中でその意味を変えたのだ。意味を変えたという言い方が不適切であるならば、Ak はアカイア勢との関係を離れた別の κλέος を発見したのだ。アカイア勢と Ak の間に κλέος をめぐる相互関係が復活した訳ではないのだ。アカイア勢との関係での κλέος 獲得の為に「戦士の命が歯の間から逃れても」構わないという関係が戻った訳ではないのだ。その意味で Ak の社会的 κλέος への、少なくともアカイア勢との関係における κλέος への評価はいささかも変化していない。そうすることによって始めて「Ak はまだ Ag に腹を立てていた」というような、一時的な感情としての怒りに傾いた戦線復帰拒否を巡る理解から我々は解放される。偉大なドラマを動かす原動力として感情では不適切な場合があるのだ。

Schadewaldt の構造理解が大きな間違いをしているとは思っていない。しかし Ne の側 (つまりアカイア勢の側) からことを見れば、大事なことを見逃すことになるのだ。Ne の目的は単にアカイア勢の目的を成就させることであった。その成就の為の手段としてのみ、Pat への唆しが案出された。もちろん、その理解は正しいし、またこの行為が叙事詩の展開に大きな役割を果たしたことは疑えない。しかし、この Ne の唆しを中心に見たからこそ、彼の論考は Ak の κλέος の変質あるいは発見を見落とすことになった。18 巻の Ak の決意表明は、Ne の唆しの地点から見てしまうと、Ne の本当の意図がどこにあったか——Pat を死なせてしまうことにあったとは思えない——という問題とは無関係に、Ne の目論見の単純な成功と見えてしまうからだ。II の物語の進行の軸は、もちろん、Ak を再び戦場に立たせることでもあるに違いない。しかしもっと Ak の内側に軸はあって、それは、アカイア勢との間で κλέος を求める戦士としての動機を失ってしまった Ak に再び

^{*40} 19 巻のいわゆる和解は、Ak の側から見る限り、Pat の殺し手を殺すための援軍としてアカイア勢を求める意図を持っており、恐らくそれが唯一の理由だろうということも明らかであるように思う。このように彼の意図を理解する時、Ag のあの弁明が見逃され、Od による「兵には食事を与えよ。しかる後戦場に送り出せ」という正論的戦術に、食を断つたまま戦えと主張していた Ak がそれ以上抗弁しなかったという事実も、正しい理由を見いだすことになるように思える。ただし、この問題はここでは論じない。

戦士・英雄としての自己同定を回復するということであったのだ。我々の問題にしている叙事詩上演場面は、まさにそのようにして *Il* を捉えることを我々に促している。我々の場面から見れば、9 巻で見せた自身とアカイア勢の間の *κλέος* 的關係が不可能になっているという判断はそのまま彼の出陣決意に反映されているのが分かるだろう。

9 巻で、Ak が、自分の命と、それとの引き換えに獲得される *κλέος* に関して示した判断は次のようなものであった：君たちとともに命を的にこのトロイアを滅ぼすべく戦い、*κλέος* のために命をおとすことはできない、だが、親しいものたち (Ph; Ai) の説得に応じて、家郷には当分帰らず、戦わない者として戦場の片隅には残ることにする。一方、18 巻の出陣決意に示された Ak の判断は次のようである：大事な僚友を殺した Hk を殺す為に自分は命を的に戦い、*κλέος* を獲得すべく出陣する、君たちアカイア勢の目的であるトロイア陥落は、その私の戦いの必然の結果でありうるが、それについては容認の範囲内である。この 2 つの判断は整合している。

さらにもう 1 点、僚友の為の復讐という Ak の出陣決意の動機について言葉を加えた^{*41}。M. I. Finley による *The World of Odysseus* という H 研究史上の記念碑がある。その一つの章は Household, Kin, Community と名付けられている。ここで著者は、英雄叙事詩の基礎となっている社会の構成単位を下方から並べて、章の題としている。Ak は、ペーレウスとテティスの営む家の実質的な長である。そして同時にその家が核となって成立している血族的・部族的集団 (kin) の長でもあるだろう。そしてまたこういう kin のおそらくは緩やかな集団であり、地域的な集団でもあるミュルミドーンと呼ばれる戦士集団の長でもある。この集団は、Finley の例では、Od がイタケーという戦士集団でもあり、地域集団でもあるものを束ねているという関係に該当する。問題は、*Il* の場合、そのミュルミドーン勢やイタケー勢のさらに上方にアカイア勢というものがある（その長は Ag^{*42}）、ということだ。Finley はこのアカイア勢という臨時のかつ、彼の言う community の上に成立した集団の探求について熱心ではなかった^{*43}。*Il* 固有の問題であったからかもしれない。

^{*41} この段落から、この章の終わりまでの部分は、査読者の勧告に従って付け加えた。確かに筆者にとっては Ak は戦場に再び立つ動機を「発見」したと見えるが、「発見」したものをきちんと説明しないと、何か「新しい価値」を見出したかのように聞こえかねない、というのがその勧告の趣旨である。確かにその恐れはある。Ak によって詩人は新しい英雄像を作り出したという文芸評論的に有力な意見もあるからだ (A. Parry, *The Language of Achilles*, *TAPA* 86 (1956), 1-7)。査読者の意見に感謝する。

^{*42} 従って Ag は、ミュケーナイその他の地域から成る community の長である (2.569-78) が、と同時に、カタログの中では「英雄（すなわち community の長たち）の中で傑出していた」と極めて控えめな表現で言われているが (2.579-80)、諸 community の長の上にたつ長でもあった。

^{*43} と言うよりは、そもそも彼の歴史家としての目的は、彼自身が言っているように (Finley 13-52)、英雄叙事詩の基礎になっている「英雄社会」の歴史的背景は前 10-9 世紀にあったギリシアの社会と見定め、その社会の構造を明らかにすることにあった、と言うべきであろう。少なくとも我々が現に有している *Il*

しかしアカイア勢といういわば「超 community」の問題は、H 最後の詩人たちや、ヘシオドスたちの意識にとって明らかに深刻な問題だった。彼らは、部族的なあるいは血族中心的な「英雄社会」を覆して時代は新しい段階に突入しつつあることを見ており、同じようにその光景を目にしている聴衆の前で、その覆されつつある社会構造の上に成立した英雄叙事詩という人工言語・価値・美意識からなる「伝統的な」文芸を実行する生業を持っていたからである。

οὐδὲ πατήρ παίδεσσιν ὁμοίος οὐδέ τι παῖδες,
οὐδὲ ξείνος ξεινοδόκῳ καὶ ἑταῖρος ἑταίρῳ,
οὐδὲ κασίγνητος φίλος ἔσσεται, ὥς τὸ πάρος περ.

父は子たちと心をひとつに持たず、子たちも（父と）ひとつに持たず、
客はあるじと、僚友は、僚友とひとつに持たず、また、
兄は弟と親しいものではなくなるだろう。かつてのようには違い。

Hes. Op. 182-4

この3行が、ヘシオドスの描く絶望の「鉄の時代」への呪いのラップである。ここでは家を構築する関係（父・兄弟）と、その拡大の為の擬似的関係（客・僚友）という、「英雄社会」の支柱群が、この「鉄の時代」では崩れようとしていることを詩人は歌っている。ヘシオドスの「鉄の時代」と「英雄時代」については、ここでは触れない^{*44}。ただ、今まさに「鉄の時代」の圧力の前に崩れ去ろうとしている「英雄社会」の支柱を歌うこの3行が表現していることの中にIIの最後の詩人がそのすじを通して表現していることが重なることは明らかである。少なくとも表面的にはこういうことになる。Akはアカイアの英雄たちの中で唯一、この超 community の為に命を賭けて戦うということを受け入れられない英雄となり、孤立し、戦う動機を失う。戦うことを本性とする英雄であるから、説得に応じて彼は戦場に残ることを承知し、残った以上はPatの出撃への懇願に応じる他はないのだが、彼の戦死という悲劇はまるで必然のごとく生じる。大切なものを、敵の大將に殺されてしまえば、その事実は、超 community の原理（つまりAg）を唯一受け入れられないほどに典型的な英雄（旧タイプと言ってもよい）であるAkにとっては、「一度歯並みの垣から外に」生命が逃れ出ても構わない覚悟で戦場に立つ充分な動機を与えてくれたに等しいと言える。

は、作品として接近しようとするかぎり、Finleyが与えてくれる武器だけでは足りない、というのが本稿の主張ということになるだろう。

^{*44} 以下の論文でこれは論じた。安西眞(2012),「英雄時代と鉄の時代——ヘシオドスのギリシア社会史」、『近代精神と古典解釈——伝統の崩壊と再構築』、高等研報告書1102（研究代表——手島勲矢）、高等研究所、2012、163-。

本来、文芸評論的なことがらを論じることが本稿の目的ではないから、これ以上の発言は控えたい。ただ、Akが「発見した」、戦場に再び出る為の、僚友の死の復讐をするという動機は、ヘシオドスの引用した詩行から察するに、ギリシアの英雄叙事詩（今は跡形もないものを含んで）の中で最も人気の高いものだったのではないだろうか。「発見した」と言えば、何やら新しい価値を見つけたと言っているように聞こえるかも知れないので、付け加えておきたい。

6

『パトロクレイア (Pat の物語)』という用語が分析論者によってばかりではなく、広く使われている⁴⁵。分析論の功罪をあげつらうことが目的なのではない。ただ 16 巻での Pat の輝かしい働きと無惨な死を中心にした語りがある独立性を持ちながら、同時に 11 という全体の中で極めて重要な働きをしていることは認められてきたという事実がある。そして独立したものであったとの想定の上で、その接合のされ方が幾度か議論の対象になってきたことも事実である。その種の議論を提示した研究者には、それぞれ、最後の 11 詩人が何をしたか、ということに関する見通しがあったに違いないが、ここでは、その当否をあげつらうよりも、「怒りの物語」と「僚友の死に殉じる物語」という 2 つの別個のものとして取り出せるものが、どのように文芸的に機能し合っているかが、我々の場面からは比較的説明し易いのだということを示しておきたい。

本稿で説明したとおりに、9 巻から後は Ak の κλέος が果たして成立しうるかどうかがすじの中心になっていたとしよう。1 巻から 8 巻までは 9 巻をも含んだ、Pat 唆しの場面への準備だという、Schadewaldt の理解を、ここで提示された捉え方に従って準用すれば、1 巻から 9 巻の Ak の拒否演説 (9.308-429) までは、Ak の κλέος というすじの核を、袋小路に追い込むための準備だということになる。以上のような見通しが正しいとすると Ak による英雄叙事詩上演の場面のもうひとつ別の意味が、明らかになることを示したい。

ἄειδε δ' ἄρα κλέα ἀνδρῶν 「彼が歌っていたのは、男たちの誉れだった 9.189」という、聴衆たちに対する信号に満ちた表現が、その歌を歌っている当の英雄の κλέοςこそが、歌の中心に据えられることを告げる。もちろん、その詩的な役割を支えるのは英雄が叙事詩を演じるという行為そのものが持つ、聴衆の目をひく異様さであり、一方では聴衆が、実際詩人が聴衆の前で κλέος = 叙事詩を上演しているのを目にしていながら、その詩人は登場人物である Ak が κλέος = 叙事詩を上演していると歌っているという二重性である。だが

⁴⁵ 『パトロクレイア』という独立の物語を考える、という傾向については身近なところでは、新分析論者としての Schadewaldt の論考: *Einblick in die Erfindung der Ilias. Ilias und Memnonis*, VHWV, 155-202 を参照。また、未完稿ではあるが、K. Reinhardt, *Die Ilias und ihr Dichter*, Göttingen 1961, 17-37 を参照。

Ak の κλέος という、すじを動かす元素は、この小さな場面が終わり、使節の説得が始まるとたちまち挫折する。Ak はアカイア勢の為に生命を賭して、その結果として生命の代償としての κλέος を得る、という社会と個人としての戦士の間に成立すべき相互関係について「それはあり得ない」と宣言するのだから。

Ak はトロイアを明日去ると宣言する。物語消滅の危機である。物語にとっての最悪の事態は Ph の説得と Ai の捨て台詞が救う。Hek がミュルミドーン勢のテントと船の群れに火をもたらす危機が目前に迫るまでは戦場に出ない、というように拒否の形を軟化させる。消滅の危機は当面回避された。だが、根本的な解決が得られたのではない。父親がわりの者や、いここによる説得に、Ak は旧英雄としての本質を披露して、一応の譲歩を彼はただけであり、アカイア勢の為に生命を投げ出す理由を見つけた訳ではない。

Ne の唆しは、Ak を最終的に戦場に引き出すという狙いを持っていたに違いない。短期的にも、Pat を Ak に仕立てて戦場に出せば、少なくとも当面の危機は回避できる。だが、Ak が戦場復帰を拒否している理由を理解していない以上、彼のこの策略は本来的な成功（つまり Ak を叙事詩の英雄に相応しい戦場に引っ張り出して κλέος を得させる）は獲得しないはずのものである。しかし外形的には成功する。Pat の κλέος を求める戦士の性を刺激し、戦場の仲間が死にアカイア勢が危機にあるのに、自分たちだけは安全であるといううしろめたさに働きかけ、彼を戦場に立たせ、活躍させ、死なせる。Ne の唆しの本来的な射程はここまでである。しかしここで魔術のような化学的変化が起きる。友を自分が戦場に一緒に出てやらなかったばかりに死なせてしまった自責と、友の死に対しては報復すべしという、極めて Ak らしい反応（友愛に殉じる物語は古い英雄叙事詩の典型のひとつであったに違いない）とともに、Ak は再び戦場に戻る決意をする。しかし、それは、アカイア勢がトロイア城を滅ぼすという戦場ではなく、ただひたすら Hek を殺すことを目的とする戦場である。少なくとも Ak にとってはそうである。

これが、我々の場面から見た II という物語のすじである。修辞学教科書風に表現すれば、「命を賭ける意味を見出せなくなった古風な英雄^{*46}をどのようにして再び戦場に立たせるか」という題目を与えられた生徒が見つけた突破口（inventio）。すなわち最愛の友を英雄の判断の誤りにも責任を負わせつつ死なせるという苦肉のかつ最優秀の解答。これが II のすじなのではないか。

「Pat が独りで黙って彼の前に座していた。アイアコスの子が歌い終えるのを待ちながら（9.190-1）」。これは「怒り」の物語と「友愛に殉じる物語」の結合という、これから始まる Ak の κλέος の物語の根源形態を予め知らせる図である。Ak が κλέος を成就するとい

^{*46} Ak の英雄としての古風さについては、注 29 および 30 参照。

たことは、編集、改変、付加、削除であろう。その行為が、我々の持つ *Il* 本文にどれだけの質・量におよぶ影響を与えたかについては、von der Mühl の見解を受け入れることは難しいが^{*48}、そういう行為だけがこの詩人のなし得た範囲であるということについては筆者にも異論はない。口承叙事詩の言語で表現できる^{*49}ことは限られている。聴衆の側の受け取り方と、この詩人の意図したこととの誤差がありうることは、当然詩人も予想していたであろう^{*50}。その誤差を予防するひとつの方策として、Ak が κλέος = 英雄叙事詩を上演するというこの場面の衝撃的な喚起力に頼り、絵画的象徴としての力に頼った、ということではないだろうか。

最後に、κλέος の変質として、あるいは別の κλέος の発見として本稿が規定した事態について、一言述べておきたい。本稿は、*Il* 9.182-95 の解析と、この部分が叙事詩構成上果たしている機能の解明をつうじて、Ak の κλέος の成立如何という角度から見れば、この叙事詩の構造が見渡しやすいことを主張し、示した。κλέος を袋小路に押し込み、以降は、Ph, Ai, Ne, Pat が、各自 Ak に κλέος を実現させるよう働きかけ、ついにその κλέος を実現させるというすじを持っているのではないかと指摘した。しかし、どの働きかけも、Ak が何故戦場復帰を拒否するのか、まったく理解しないままの働きかけであった。しかし、Pat の働きかけだけが、Ak の動機（あるいはその不在）を理解していたからという理由ではなく、彼が Ak のかけがえのない友であり、また Ak の判断の誤りもあって彼が He に殺されてしまうという事情によって、Ak の κλέος の実現に手を貸す。これが、筆者の理解する大筋である。その当然の結果として、Ak が実現した κλέος は、外形こそ戦士の死とその恩恵を蒙る社会集団との間に伝統的には成立してきた κλέος という関係に酷似しているが、死を賭する戦士の動機という面では全く異なるものにならざるを得なかったことを明らかにした。

何故そのようなすじを詩人は選んだのかという疑問が当然起きる。私が提示できる説明はひとつ。詩人も聴衆も、ギリシアの英雄叙事詩という文学的伝統を支えてきた鍵概念である κλέος ἄφθιτον というものを、受け入れることが難しいと既に感じるようになっていたからだ。すなわち英雄叙事詩を享受してきたひとびとは英雄叙事詩を支えてきた筈の世

^{*48} von der Mühl のような分析論的アプローチの文芸的な難点は、後から為された「付加」を「新」というラベルを付けさえすれば、「旧」が回復されるという単純な思考である。「新」に詩的創造力があつた場合、たといそれが編集・付加等の行為であっても、その「創造」の目を通り抜けて出現する（あるいは残される）ものは、「新」創造を通り抜けた限りにおいて既に「新」の一部となっているのだということをこの思考は理解していない。

^{*49} この最後の詩人は、Hes. と違って、伝統的な英雄叙事詩の文芸形態を維持した、と考えられる。その点、彼は決して innovative な創造者だったとは言えない。安西眞 (2012) 参照。

^{*50} 実際、その誤差は、誰もが知るとおり現実のものであった。

界の形とは異なる世界に自分たちが生きていることを自覚し始めたのだ。そういう意味で我々の最後の II も、Hes の『農と暦』同様、詩人が英雄叙事詩を支えて来た社会の中に根本的な変質が始まったことを見出し、その変質を英雄叙事詩というひとつの文学的伝統の決定的変質あるいは死として捉えたことを告げる作品だったと言えよう^{*51}。

(北海道大学)

^{*51} 最後に最終章に関してここでお断りをしておきたいことがある。読者には、この論文は、詩人の計算を解明することにより重きを置く、その意味では Schadewaldt の方法をより先鋭化したものといえる、ということがご理解いただけたと思う。ただし、この論文が試みたことがうまくいっていればの話であるけれども。この方法に基づいた最終章の叙述に対して、査読者のひとりから、かなり厳しい批判を頂戴したことからわかるように、少なくともこの章は、かなり未熟で、つめの甘いところがある。その厳しい批判は、この部分のさらなる洗練へ向けて活かすことをお約束して、現段階では、この論文が明らかにした、我々の場面の持つ意味を、一応筆者が得ている現段階の『イリアス』像と破綻をきたさないように解説する、ある種の実験的試みということでお許しいただこうと決断した。読者諸氏と査読者のご了解が得られれば幸いである。

Ovidius, *Metamorphoses*, 13.146–7

中川未来

『変身物語』13 巻 146–7 行目は、大アイアスとの間でアキレウスの武具を争うオデュッセウスが、自らの武具継承を成功させるために、自身の血筋の高貴さを主張する場面である。彼はここで、母方の祖先ヘルメスとの関係を述べる。Tarrant に従えば、本文は以下のようになっている。

est quoque per matrem Cyllenius addita nobis
altera nobilitas;^{*1} deus est in utroque parente.

この箇所に対する伝統的解釈においては、施されている句読法からすると、146 行目の est は受動態を構成する助動詞として捉えられていると考えられてきた節がある^{*2}。つまり est addita が本動詞であり、また addita に対する主語は女性名詞に限られるので altera nobilitas が主語と取られ、全体では「母方を通して、ヘルメスという更なる高貴さが、私に与えられている」といった意味になる。

しかし以上のような解釈には難点がある。Cyllenius を altera nobilitas の同格として理解しているために、「更なる高貴さ」という単なる抽象名詞が、具体的な神の名前「ヘルメス」よりも強調されてしまっているのである。問題の箇所の直前、144–5 行でオデュッセウスは以下のように父方の血統について主張している。

nam mihi Laertes pater est, Arcesius illi,
Iuppiter huic—neque in his quisquam damnatus et exul.

ここでは内容また語順からも明らかである通り、父の祖先がゼウスであるということに主眼が置かれている。これらの行の直後に 146–7 行が続くのであるから、強調されるべき

^{*1} このセミコロンの部分にコロンやピリオドを用いている校訂本もあるが、それに関しては問題としないこととする。ピリオドを用いれば asyndeton と解釈できるので理解がより容易になるようにも思われるが、ここでは論点を絞るためあえて通例に従った。

^{*2} 流布している翻訳の中では、Lafaye による Budé の仏語訳がこのように捉えられる表現を提示している。Miller による Loeb の英語訳はこの点については曖昧な訳となっている。本稿は、句読法を再考することによって明快なラテン語を構成することもわれわれの仕事に含まれるのではないかと、という主張を示すことも意図していることをご理解いただきたい。これといった句読法を施さないことによって、二重の解釈の余地を残すのが適切である場合があることも筆者は認めるが、この箇所についてはその限りではないとも主張する。なお管見の限りでは、この箇所について、いかなる内容をもってであれ明確に説明したものは見当たらない。

は、新たに祖先として紹介される神が具体的にどの神であるかということである。

加えて、147 行の後半部の表現 *deus est in utroque parente* 「どちらの親の側にも神がおいでなのだ」からも、オデュッセウスは自らの血筋における神の存在を声高に主張しているのだと読み取れる。このような観点から考えると、問題の箇所に対する伝統的解釈、および伝統的句読法には不足がある。

最善の解決策として考えられるのは、*Cyllenius* の後にコンマを施すことである。筆者が参照した校訂本の中には、そのうち最も古くは 1702 年に出版された *Heinsius* 校訂本なのだが、146 行のこの箇所にコンマを施しているものは存在しなかった。この処置を実際に行った本文は以下ようになる。

*est quoque per^{*3} matrem Cyllenius, addita nobis^{*4}
altera nobilitas; deus est in utroque parente.*

私に付け加えられた更なる高貴さとして、母方にも
ヘルメスがいる^{*5}。どちらの親の側にも神がおいでなのだ。

このようにコンマを加えると、上記のような解釈となる。強調されるべき *Cyllenius* を主語と捉え、またそれに対する同格として *addita nobis altera nobilitas* を理解することができるのである。同格の語は後置されることが普通なので、この方がより自然であろう。

更にこの処置によって、文頭に置かれている *est* が助動詞ではなく存在動詞として機能するようになる。これもまた *est* の位置からするとより自然な文法的理解だと言えよう。

(北海道大学)

^{*3} Bömer はこの *per* について *Metamorphoses*, 13.134 を参照するよう注釈を付けており、当該部分での *per* とそれに後置される対格を *instrumental* として理解している。

^{*4} *addita nobis* とそれに続く *altera nobilitas* には頭韻と類韻が意図されているように見え、*addita ... nobilitas* を 2 つの音的に呼応する部分からなるひとかたまりとして捉えることで、この技法の効果がより明確になる。この点については、ご指摘下さった無記名の査読者に感謝の意を表したい。

^{*5} *per* が母親に相当する語を伴い、母が子を生むといった関係を表す類例としては *Pacuvius trag.* 403.-R.; *eundem (= Vlixem) filios sibi procreasse per Calypsonem autumant.* が挙げられる。なお、この注の存在も *per* の類例を探すようご指摘下さった査読者に依る所が大きい。感謝とともに記す。

1. 1990年1月1日以前に作成されたもの
2. 1990年1月1日から1995年3月31日まで作成されたもの

3. 1995年4月1日から1999年3月31日まで作成されたもの
(公衆利用可能)

4. 1999年4月1日から2003年3月31日まで作成されたもの
5. 2003年4月1日から2007年3月31日まで作成されたもの

6. 2007年4月1日から2011年3月31日まで作成されたもの
7. 2011年4月1日から2015年3月31日まで作成されたもの

8. 2015年4月1日から2019年3月31日まで作成されたもの

フィロロギカ——^{こてんぶんけんがく}古典文献学のために 第 VII 号

2012 年（平成 24 年）5 月 31 日発行

編集・発行 フィロロギカ編集委員会
（古典文献学研究会）

〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目

北海道大学文学研究科 安西眞研究室

Tel: 011-706-4093（直）

Mail: philologica@hotmail.co.jp

印刷・製本 北海道印刷企画株式会社

頒価 2000 円

ISSN 1884-1562

Philologica VII 2012

Societas Philologorum

(Secretary) Yasunori Kasai

Editorial Board:

(Hon.) Masaaki Kubo

(Hon.) Elizabeth Craik

Makoto Anzai, Yoshihiro Oshiba, Hiroyuki Takahashi,

Noburu Notomi, Yosinori Sano

Contents

Horatius, <i>Epod.</i> 11	I
Yoshihiro Oshiba	
Citations in Plato's <i>Symposium</i> 178B–C	23
Noburu Notomi	
Aristotle, <i>Rhetoric</i> 1355a23: δι' αὐτῶν: On the Usefulness of Rhetoric	42
Koichi Horio	
An Epic Hero Performing a Heroic Epic: <i>Iliad</i> 9.182–95	51
Makoto Anzai	
Ovidius, <i>Metamorphoses</i> , 13.146–7	77
Miku Nakagawa	